

埼玉県入間郡三芳町

# 町内遺跡群

発掘調査報告書

1988.3

埼玉県入間郡三芳町教育委員会

# はじめに

三芳町教育委員会

教育長 岡村 顕

三芳町は『三富開拓』に代表されるようにそのほとんどが武蔵野台地に位置し、畑作中心の農村として、緩やかな発展をしてきた地域です。

しかし、都心から30 km圏内という至近距離にあたることから、昭和30年代後半からの高度経済成長の影響を受けて、急速に住宅建設をはじめ、工場や商店等の進出がめざましく、道路の整備や交通の便などこれまでにない生活の便利さをもたらしてくれました。

しかし、そのような中であって、意識・無意識のうちに有形・無形の文化遺産を失なわせるという状況をも生み出してきていることも少なくありません。

あらゆる文化遺産には、私達の祖先が長い歳月をかけて築きあげてきた暮らしや歴史が伝えられており、三芳という風土のなかでどのように暮らしをたて、どのように生きてきたかを知る資料であると同時に、私達の今の社会・未来の三芳を見つめようとする時、これらの文化遺産は数多くの示唆を与えてくれるものでもあります。

幸い三芳町は数多くの文化財に恵まれており、以前より文化財の保護に力を入れてまいりました。埋蔵文化財の記録保存もそのうちのひとつといえます。

ここに刊行する三芳町町内遺跡群発掘調査報告書は、文化遺産の保護の一環として実施した発掘調査の成果の記録書です。埋蔵文化財は開発により直接的に失なわれてゆく文化財ですが、幸いにして本町では国・県の補助を得て記録保存のための発掘調査を行なうことができました。本書が開発によって失なわれた遺跡のかたりべとして、永く将来にわたり先人達の努力の足跡を伝えてくれることを願ってやみません。





## 例 言

1. 本書は、埼玉県入間郡三芳町に所在する三芳町町内遺跡群の発掘調査報告書である。三芳町教育委員会が主体となり、国庫補助・県費補助事業として、昭和 58 年度から昭和 62 年度までの 5 ケ年間の調査の成果をまとめたものである。
2. 本報告書作成ならびに発掘（試掘）調査を本事業の一環として昭和 62 年度に実施したが、昭和 62 年度は、国庫補助事業「町内遺跡群発掘調査」事業として総額 3,000,000 円（国庫 1,500,000 円・県費 750,000 円）で実施したものである。
3. 本書の編集は柳井章宏が行なった。
4. 本書の執筆は、本村南遺跡・古井戸山遺跡・北側遺跡・三芳唐沢遺跡を柳井章宏、藤久保東第二遺跡・俣埜遺跡 D 地点を松本富雄、古井戸山遺跡縄文時代遺物を矢島洋一が行なった。
5. 本書の図版作成は、松本富雄・柳井章宏が行ない、これを秋山伸一・稲田 淳が手伝った。
6. 本書の写真は、遺構を松本富雄・柳井章宏、遺物を柳井章宏が主に撮影した。
7. 本書の図版の縮尺等の読み方は、それぞれの図で示した。
8. 本書に掲載した地図は、国土地理院発行の 1/25,000 地形図「与野」および「志木」、1/2,500 三芳町全図である。
9. 本書の作成および発掘調査にあたり、以下の方々に御教示・御指導・御協力を賜った。記して感謝の意を表したい。（敬称略）

会田 明、荒井幹夫、飯田充晴、石岡憲雄、伊東香織、井上 肇、梅沢太久夫、尾崎光伸、書上元博、小出輝雄、小林貞夫、小淵良樹、佐々木保俊、笹森健一、斯波 治、筋野 勲、高橋 敦、高橋一夫、館野 孝、田中英二、坪田幹男、鶴田 靖、早川智明、増田逸朗、横山裕平

## 凡 例

1. 遺構の縮尺は、住居跡・地下式坑 1/60・炉 1/30・溝 1/120 を基本とした。
2. 土器の縮尺は 1/4 を基本とし、拓影図は 1/3 とした。
3. 遺構図版の実線は掘込みなどの上端、一点鎖線は下端を表す。住居跡内の細線は、床面硬化範囲を示す。
4. 胎土粒子に関する各項の規準は以下のように定めた。  
礫 2.0 mm 以上  
粗砂 0.2~2 mm  
細砂 0.2 mm 以下
5. 本書図版で使用了スクリーントーンは以下のとおりである。

遺構図版		焼土		貼床
遺物図版		赤彩		釉

# 目 次

はじめに  
例 言  
凡 例  
目 次  
図版目次

I 序 章	1
1. 三芳町町内遺跡群について	1
2. 町内遺跡群付近の位置と環境	2
1) 地理的位置	2
2) 考古学的環境	3
3. 年度ごとの調査と組織・参加者	5
1) 年度ごとの調査	5
2) 調査組織と参加者	7
II 各遺跡の調査	11
1. 概 括	11
2. 本村南遺跡の調査	12
1) 遺 構	13
a. 弥生時代住居跡	13
b. 方形周溝墓	16
c. 地下式坑	17
d. 土 坑	18
e. 溝状遺構	18
2) 遺 物	32
a. 遺構内出土の遺物	32
b. 遺構外出土の遺物	37
3) まとめ	38
3. 古井戸山遺跡の調査	39
1) 遺 構	39
a. 包含層	39
2) 遺 物	40
a. 縄文時代	40
b. 弥生時代	42
c. 平安時代	44
d. 中 世	44

4. 三芳唐沢遺跡の調査	46
5. 北側遺跡の調査	48
1) 遺構	48
6. 藤久保東第二遺跡の調査	50
1) 遺構	50
a. 層位	50
b. 遺構	50
2) 遺物	52
7. 俣埜遺跡D地点の調査	61
1) 遺構	61
a. 旧石器時代	61
b. 縄文時代	61
2) 遺物	63
a. 炉穴内出土の土器	63
b. 遺構外出土の土器	63

写真図版

## 図 版 目 次

第1図 周辺の地形と遺跡	4
第2図 調査を実施した遺跡	10
第3図 本村南遺跡調査地点	12
第4図 本村南遺跡全測図	12
第5図 本村南遺跡1号住居跡実測図	20
第6図 本村南遺跡2号住居跡実測図	20
第7図 本村南遺跡3号住居跡実測図	21
第8図 本村南遺跡4号住居跡・1号土坑実測図	22
第9図 本村南遺跡5号住居跡実測図	22
第10図 本村南遺跡6号住居跡実測図	23
第11図 本村南遺跡7号住居跡実測図	23
第12図 本村南遺跡8号住居跡実測図	24
第13図 本村南遺跡8号住居跡炉実測図	24
第14図 本村南遺跡9号住居跡実測図	25
第15図 本村南遺跡9号住居跡炉実測図	25
第16図 本村南遺跡10号住居跡実測図	26
第17図 本村南遺跡10号住居跡柱穴断面図	26
第18図 本村南遺跡11号住居跡実測図	27
第19図 本村南遺跡11号住居跡炉実測図	27

第20図	本村南遺跡1号方形周溝墓実測図	28
第21図	本村南遺跡1号地下式坑実測図	29
第22図	本村南遺跡2号地下式坑実測図	30
第23図	本村南遺跡溝状遺構実測図	31
第24図	本村南遺跡出土遺物(1)	35
第25図	本村南遺跡出土遺物(2)	36
第26図	本村南遺跡出土遺物(3)	37
第27図	古井戸山遺跡全測図	40
第28図	古井戸山遺跡出土遺物(1)	41
第29図	古井戸山遺跡出土遺物(2)	43
第30図	古井戸山遺跡出土遺物(3)	45
第31図	三芳唐沢遺跡調査地点	46
第32図	三芳唐沢遺跡全測図	47
第33図	北側遺跡調査地点	48
第34図	北側遺跡全測図	49
第35図	藤久保東第二遺跡土層図	50
第36図	藤久保東第二遺跡全測図	51
第37図	藤久保東第二遺跡ユニット1石器分布図	57
第38図	藤久保東第二遺跡ユニット2石器分布図	58
第39図	藤久保東第二遺跡ユニット3石器分布図	59
第40図	藤久保東第二遺跡ユニット4石器分布図	60
第41図	藤久保東第二遺跡ユニット5石器分布・土坑図	60
第42図	俣埜遺跡D地点全測図	62
第43図	俣埜遺跡出土土器拓本図	64
第44図	俣埜遺跡炉穴群新旧関係図	64
第45図	俣埜遺跡1・2・3号炉穴実測図	65
第46図	俣埜遺跡4・5・6・7号炉穴実測図	66
第47図	俣埜遺跡8・9・10・11・12・13号炉穴実測図	67
第48図	俣埜遺跡8・9・10・11・12・13・14・15・16号実測図	68
第49図	俣埜遺跡17・18・19・20・21・22号実測図	69
第50図	俣埜遺跡13・14・16・23・24・25号実測図	70

# I. 序 章

## 1. 三芳町町内遺跡群について

三芳町は埼玉県南部の荒川右岸に所在し、遠く西方に多摩や秩父の山並みを見晴らす平野地帯に位置する。地形的には、西方約 50 km の青梅市付近から扇状に広がる武蔵野台地の北東部にあたり、数条の台地縁辺から切り込む開析谷によって僅かに起伏をもつものの、ほとんど平坦な関東ローム層に厚く覆われた地帯である。

三芳町は上述のように、関東ローム層の厚く堆積した台地から成り、とくに町の西部域は河川も少なく、広々とした台地が続き、台地形成期の古い時代（旧石器時代）には人々の生活の痕跡はあるものの久しく人の住せぬところであった。西部域に現在ある集落は江戸時代になってからの開拓によるものである。なかでも元禄 7 年（1694）に川越藩主柳沢吉保の命によっておこなわれた三富の開拓（三芳町大字上富、所沢市中富、下富）は県指定旧跡「三富開拓地割遺跡」として指定されているところで、いまなお雑木林と畑地そして集落とが整然と残され、武蔵野の集落の面影を色濃く残している。

一方、町の東部域は、武蔵野台地の縁辺により近いこともあって、柳瀬川を始め東方の荒川・新河岸川を流す沖積地へ流れ込む河川や開析谷が、台地を切り込むように数条存在する。これら河川に沿って開発は古くからすすみ、集落の形態等にも西部域とは異なった在り方が見られる。河川や開析谷に沿った台地縁辺部には原始・古代の遺跡も多く知られる。

上述のように与えられた自然環境に適応しつつ三芳地域の歴史・文化は穏やかな発展をしつつ形成されてきたのであるが、三芳町は都心から僅か 30 km ほどの距離にあることから、近年になると都市化の波を強く受け、それまでの緩やかな流れが大きく変えられつつある。

東武東上線への地下鉄乗り入れ、川越街道（国道 254 号線）の 2 車線化、さらに関越自動車道路の貫通と町の南隣に所沢インターチェンジの開設などの交通手段の改善は、都心へあるいは地方への交通の便をより良いものに行っている。工場・倉庫などの企業の進出のほか、個人住宅、アパート、マンションなどの住居建築も年々増加の傾向にある。

さて、三芳町には凡そ 40 ケ所に埋蔵文化財の包蔵地が知られるが、これらの多くは上述のような発展と相俟って破壊の危機にさらされてきている。既にそのうちの一部分は住宅開発により煙滅したものもある。三芳町ではこうした状況に対処すべく、文化財保護法の改正後とくに昭和 51 年以降埋蔵文化財の保護、とりわけ記録保存のための発掘調査に力を注いできた。しかし、このような発掘調査は蚕食的、個別的調査になることが多く、十分な時間と費用を費やし調査ができ得なかったり、正確な記録保存ができ得ぬことも多かった。また開発者との間に調査に係る費用、期間について問題が生じることもしばしばであった。

本事業はこうした問題を少しでも解消すべく実施したもので、国庫・県費の補助を得て、昭和 58 年度から実施してきたものである。開発地における試掘調査の実施により調査期間、方法、費用の積算等が容易になったことと、利益を目的としない個人開発等への費用等の問題を解消できたことは、本事業の成果といえる。

今回の報告は昭和 58 年度から 62 年度までの 5 ケ年の成果の記録報告である。

## 2. 三芳町町内遺跡群付近の位置と環境

### 1) 地理的位置

三芳町を地形的に見ると、武蔵野台地の北東縁辺に近い部分に位置している。武蔵野台地は青梅市（標高 180 m・三芳町から西へ 50 km）付近を扇頂として、その東方に向かって緩傾斜をもって扇状にひろがる多摩川の形成した洪積台地であり、台地の東端は標高約 20 m で、その東方の沖積地に向かっていくつかの谷が形成されており、急崖をなしている。

三芳町は上述のとおりこの武蔵野台地の北東縁辺部に位置しているが、町の西部域はほとんど平坦な地形を呈しており、町の東部域にはその東方の沖積地（荒川・新河岸川を流す沖積地）に向かう谷がいくつか形成されている。町内にはこうした谷が 5 本存在する。これらはみな西から東へ向かっている。

町の南側から見ていくと、まず新座市・志木市とを大きく割する多摩川の名残川と言われる柳瀬川が谷を形成している。

次に通称唐沢堀と呼ばれる掘割を流す谷が大字竹間沢と大字藤久保の間に形成されている。この谷は川越街道付近に谷頭をもち、かつてはこの付近に湧水があったときくが、現在は工場が建設され埋め立てられてしまっている。この唐沢堀を流す谷は三芳町内では台地との比高を 5 m 程のゆるやかな傾斜で開析し、富士見市八ヶ上付近（東武東上線みずほ台駅・鶴瀬駅の間）で江川を流す谷に合流していく。

次はこの唐沢堀の谷と合流する江川を流す谷である。この谷は大字藤久保のほぼ中央部の字俣埜を水源として東方へのびる。俣埜の谷頭にはかつて湧水があり、これが江川の湧水源となっている。その湧水によって池が形成されていたが、しかし今は住宅建設によって埋め立てが行なわれ、湧水は暗渠として下流へ向かっている。この江川の谷は前述に唐沢堀の谷を富士見市関沢字八ヶ上で合流し、谷幅をひろげて富士見市水子字打越付近で沖積地に注ぐ。

藤久保浅間付近の富士見市との境界付近にもゆるやかな谷が存在するが、この谷は町内にはほとんど入りこんでいない。

最後に三芳町の北側の大井町とを割する付近にゆるい谷が形成されている。これは地形的に武蔵野台地の特徴としてとらえられる末無川の 1 つである砂川を流す谷である。砂川は狭山丘陵から発生するが、この付近までは流れ至らず、所沢市中富付近で川は消えてしまう。砂川は三芳町付近では、付近の雨水を流すため掘割としてあるのみである。

以上の如く三芳町には武蔵野台地を開析する 5 つの谷が形成されているが、柳瀬川を別として、他の 4 つの谷はいずれもゆるやかな開析である。しかし、これらの谷が伸びる富士見市付近では、谷は谷底を深くし、台地を切り裂くように急崖をなし、沖積地へ注ぐ。



## 2) 考古学的環境

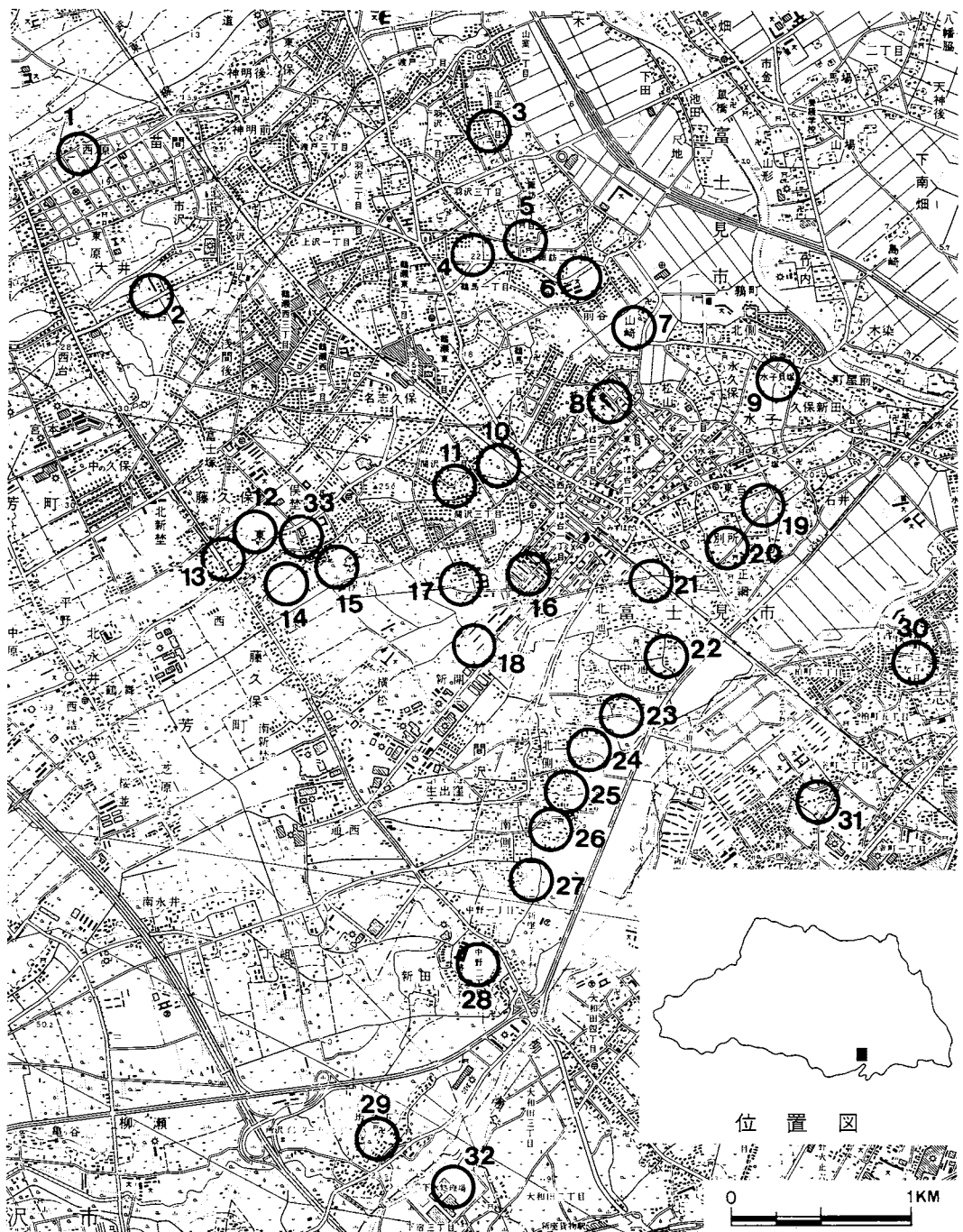
三芳町には約 40 ケ所の遺跡が知られる。このうち 1 ケ所は県指定旧跡三富開拓地割遺跡で江戸時代中期の計画的な武蔵野の開拓の名残をとどめている。あとはすべて原始・古代を中心とした埋蔵文化財包蔵遺跡である。原始・古代の遺跡はほとんど谷を臨む台地上にあり、そうした谷が三芳町の東部に集中するため遺跡は町の東部に際立つ。

柳瀬川を臨む台地上には遺跡の数が多し。第 1 図に示した範囲で数えるだけでも左岸に 11 ケ所、右岸に 3 ケ所の遺跡が知られる。柳瀬川に面した部分のうち三芳町内には上流から古井戸山遺跡 (27)、本村南遺跡 (26)、本村北遺跡 (25)、北側遺跡 (24) が知られる。本村南遺跡からは、かつて弥生時代中期末葉の土器が出土したことで学史的にも知られるが、今回本書で紹介する報文でもわかるように弥生時代を中心とした集落遺跡として位置付けられる。同一左岸には隣接する古井戸山遺跡 (27)、下流の南通遺跡 (23)、北通遺跡 (22)、上流の新座遺跡 (28) や右岸の柏之城遺跡 (30)、西原大塚遺跡 (31) も弥生時代の遺跡として知られる。柳瀬川下流域には比較的広い沖積地が発達していることと台地下に水量豊かな湧水が数多くあることが稲作の生産基盤として適したものであったのであろう。古井戸山遺跡の崖下には上述の湧水の 1 つがある。古井戸山遺跡には旧石器、縄文、弥生さらに平安時代の遺物が散布し、複合遺跡と捉えられる。水量豊かな湧水が人々の営みを可能ならしめたのであろう。古井戸山遺跡では、殊に縄文時代早期の遺物の出土量の多さは注目される。

唐沢堀を流す谷に沿ってもいくつかの遺跡が知られる。新開遺跡 (18) は昭和 51 年から調査がすすめられ旧石器時代のキャンプ跡や平安時代の窯跡の発見されたことで知られる。またその対岸の三芳唐沢遺跡 (17) や少し唐沢堀を下がった右岸にある松ノ木・唐沢遺跡 (16) なども大規模な調査が実施され旧石器時代・縄文時代の遺構・遺物が発掘調査されている。

江川は藤久保に発し、途中で先述の唐沢堀を合流し、富士見市打越付近で台地を出る河川である。江川の水源地は三芳町大字藤久保字俣埜にあり、この水源地の右岸台地上には俣埜遺跡 (15) がある。数回の発掘調査が実施されており、旧石器、縄文、平安時代の遺跡で、10 世紀代の炭窯や窯業関連遺構は興味をひくところである。開析谷は水源地の俣埜付近よりさらに奥に続く。水源地より上部の開析谷に沿って 4 ケ所に旧石器時代の遺跡がある。開析谷の右岸には藤久保東第二遺跡 (14) と藤久保遺跡 (13) が知られる。藤久保東第二遺跡からは今回概要を報告するが I b 期から I c 期の石器群が検出されている。藤久保遺跡は発掘調査は実施されていないが、畑地の耕作の際に石器が集中して発見されている。左岸の藤久保東遺跡 (12) 藤久保東第三遺跡 (33) も旧石器時代の遺跡である。江川の下流部すなわち富士見市側には、左岸に本目遺跡 (11)、隆起線文土器の出土で知られるハケ上遺跡、縄文前期集落や奈良時代の集落遺跡の殿山遺跡 (6) が、右岸には旧石器、縄文前期の貝塚で知られる打越遺跡 (8) や前期末葉の諸磯式土器群の良好な資料を検出した山崎遺跡がある。

以上、概観したように三芳町の東部から富士見市さらにはその北方の大井町、上福岡市、南方の志木市、新座市付近には台地縁辺から切り込んでくるいくつもの開析谷があり、そうした開析谷に面した高台のほとんどが埋蔵文化財の包蔵地といっても過言ではないくらい原始・古代の遺跡が多い地帯である。



第1図 周辺の地形と遺跡

- 1 西原遺跡 2 大井東台遺跡 3 山室遺跡 4 羽沢遺跡 5 黒貝戸遺跡 6 殿山遺跡 7 山崎遺跡 8 打越遺跡 9 水子貝塚 10 ハケ上遺跡 11 本目遺跡 12 藤久保東遺跡 13 藤久保遺跡 14 藤久保東第二遺跡 15 俣埜遺跡 16 松ノ木・唐沢遺跡 17 三芳唐沢遺跡 18 新開遺跡 19 富士見東台遺跡 20 正網遺跡 21 栗谷津（北別所）遺跡 22 北通遺跡 23 南通遺跡 24 北側遺跡 25 本村北遺跡 26 本村南遺跡 27 古井戸山遺跡 28 新座遺跡 29 滝之城遺跡 30 柏之城遺跡 31 西原大塚遺跡 32 下宿遺跡 33 藤久保東第三遺跡

### 3. 年度ごとの調査と組織・参加者

#### 1) 年度ごとの調査

町内遺跡群発掘調査事業は、昭和 58 年度から昭和 62 年度までの 5 ケ年にわたり実施され、この間に 6 遺跡 10 地点の発掘調査および 8 遺跡 22 地点の遺跡範囲確認調査を実施した。年度ごとの発掘調査を整理すると以下のとおりとなる。

##### 昭和 58 年度

##### 1. 藤久保東第二遺跡の調査

所在地 : 三芳町大字藤久保字東 724-16~19  
開発者 :  
面積 : 825 m<sup>2</sup>  
期間 : 昭和 58 年 6 月 6 日~昭和 58 年 6 月 30 日  
発掘通知 : 昭和 58 年 6 月 2 日 三芳教発第 1441 号  
発掘届 : 昭和 58 年 5 月 25 日

##### 2. 本村南遺跡の調査

所在地 : 三芳町大字竹間沢 854  
開発者 :  
面積 : 10 m<sup>2</sup>  
期間 : 昭和 58 年 8 月 3 日~昭和 58 年 8 月 12 日  
発掘通知 : 昭和 58 年 8 月 2 日 三芳教発第 2132 号

##### 3. 本村南遺跡第 2 地点の調査

所在地 : 三芳町大字竹間沢 856-2  
開発者 :  
面積 : 333 m<sup>2</sup>  
期間 : 昭和 58 年 10 月 11 日~昭和 58 年 11 月 19 日  
発掘通知 : 昭和 58 年 10 月 6 日 三芳教発第 2651 号  
発掘届 : 昭和 58 年 9 月 30 日

##### 4. 北側遺跡の調査

所在地 : 三芳町大字竹間沢字北側 714-6,8  
開発者 :  
面積 : 297.95 m<sup>2</sup>  
期間 : 昭和 58 年 12 月 5 日~昭和 58 年 12 月 28 日  
発掘通知 : 昭和 58 年 12 月 2 日 三芳教発第 3039 号  
発掘届 : 昭和 58 年 11 月 11 日

##### 5. 本村南遺跡第 4 地点の調査

所在地 : 三芳町大字竹間沢字南側 862

開発者 :  
面積 : 90 m<sup>2</sup>  
期間 : 昭和 59 年 1 月 12 日～昭和 59 年 1 月 31 日  
発掘通知 : 昭和 59 年 1 月 9 日 三芳教発第 33 号  
発掘届 : 昭和 59 年 1 月 6 日

### 昭和 59 年度

#### 6. 藤久保東第二遺跡 B 地点の調査

所在地 : 三芳町大字藤久保字東 724-23, 24  
開発者 :  
面積 : 916.88 m<sup>2</sup>  
期間 : 昭和 59 年 6 月 4 日～昭和 59 年 8 月 31 日  
発掘通知 : 昭和 59 年 6 月 1 日 三芳教発第 1306 号  
発掘届 : 昭和 59 年 5 月 30 日

#### 7. 三芳唐沢遺跡の調査

所在地 : 三芳町大字藤久保字唐沢 430-7  
開発者 :  
面積 : 495 m<sup>2</sup>  
期間 : 昭和 59 年 8 月 20 日～昭和 59 年 9 月 30 日  
発掘通知 : 昭和 59 年 8 月 18 日 三芳教発第 2073 号  
発掘届 : 昭和 59 年 8 月 17 日

### 昭和 60 年度

#### 8. 俣埜遺跡 D 地点の調査

所在地 : 三芳町大字藤久保字東 708-3  
開発者 :  
面積 : 260 m<sup>2</sup>  
期間 : 昭和 60 年 8 月 1 日～昭和 60 年 8 月 31 日  
発掘通知 : 昭和 60 年 7 月 25 日 三芳教発第 2895 号  
発掘届 : 昭和 60 年 7 月 5 日

#### 9. 本村南遺跡第 5 地点の調査

所在地 : 三芳町大字竹間沢 845-1  
開発者 :  
面積 : 400 m<sup>2</sup>  
期間 : 昭和 61 年 2 月 14 日～昭和 61 年 3 月 31 日  
発掘通知 : 昭和 61 年 2 月 12 日 三芳教発第 313 号  
発掘届 : 昭和 62 年 2 月 10 日

## 昭和 61 年度

### 10. 古井戸山遺跡の調査

所在地 : 三芳町大字竹間沢 1081

開発者 :

面積 : 6084 m<sup>2</sup>

期間 : 昭和 62 年 2 月 24 日～昭和 62 年 3 月 25 日

発掘通知 : 昭和 62 年 2 月 16 日 三芳歴発第 49 号

発掘届 : 昭和 62 年 2 月 5 日

## 2) 調査組織と参加者

### 調査組織

調査主体者 三芳町教育委員会

教育長 岡村 顕

調査事務局 森田不二夫 (三芳町教育委員会社会教育課課長: 昭和 61 年 3 月まで)

高橋 昭夫 (三芳町立歴史民俗資料館館長 : 昭和 61 年 4 月より)

石子 正明 (三芳町教育委員会社会教育課係長: 昭和 61 年 3 月まで)

加藤 三恵 (三芳町立歴史民俗資料館主任 : 昭和 61 年 4 月より)

調査担当者 松本 富雄 (三芳町立歴史民俗資料館学芸員)

柳井 章宏 (三芳町立歴史民俗資料館学芸員 : 昭和 61 年 10 月より)

### 参加者

#### 昭和 58 年度発掘調査・整理作業参加者

石渡悦子、一瀬数子、井上松蔵、大竹楽男、大谷又四郎、大橋実樹夫、尾関恵子、加部弥生、菊池昇啓、小早川虎之助、小林孝太郎、五老義正、佐藤静子、佐藤孝志、志村チヤ子、下角圭司、関向勝子、竹内字哲、中沢実、引地墨、平下春代、吹野富美夫、藤本十郎、保坂悦子、村上延子、望月精司、柳下ケイ子、柳井章宏、柳川純子、柳戸信吾、

#### 昭和 59 年度発掘調査・整理作業参加者

市岡陽子、植木義光、宇佐美廣子、内海掌、榎本弥生、大木新司、大橋実樹夫、葛西初江、笠原直子、河合昇子、久家紀子、久保田美津江、黒丸隆、小林孝太郎、小林貞子、小林多恵、斎藤政美、下角圭司、高島勇二、多田彰子、高田加津美、津野仁、都沢芳雄、中沢実、西尾宏子、野口友子、橋本達廣、長谷川幸博、平田真二、平本正子、藤本十郎、藤原スミ子、星野哲雄、益子和章、森郁子、柳下ケイ子、安田一子、龍本啓子、渡辺信司、

#### 昭和 60 年度発掘調査・整理作業参加者

稲田淳、植田澄子、海老原陽、荻原慎太郎、小沢玉枝、河合昇子、川口智、久家紀子、久保田美津江、黒川チヨ子、小林多恵、小林信江、斉藤正、佐藤徳子、庄司タカ子、筋野勲、高島勇二、津野仁、橋本竹松、長谷川幸博、原田聡士、藤原スミ子、藤原直人、益子和章、榊

田信子、森郁子、柳下ケイ子、柳井章宏、渡辺吉太郎、

昭和 61 年度発掘調査・整理作業参加者

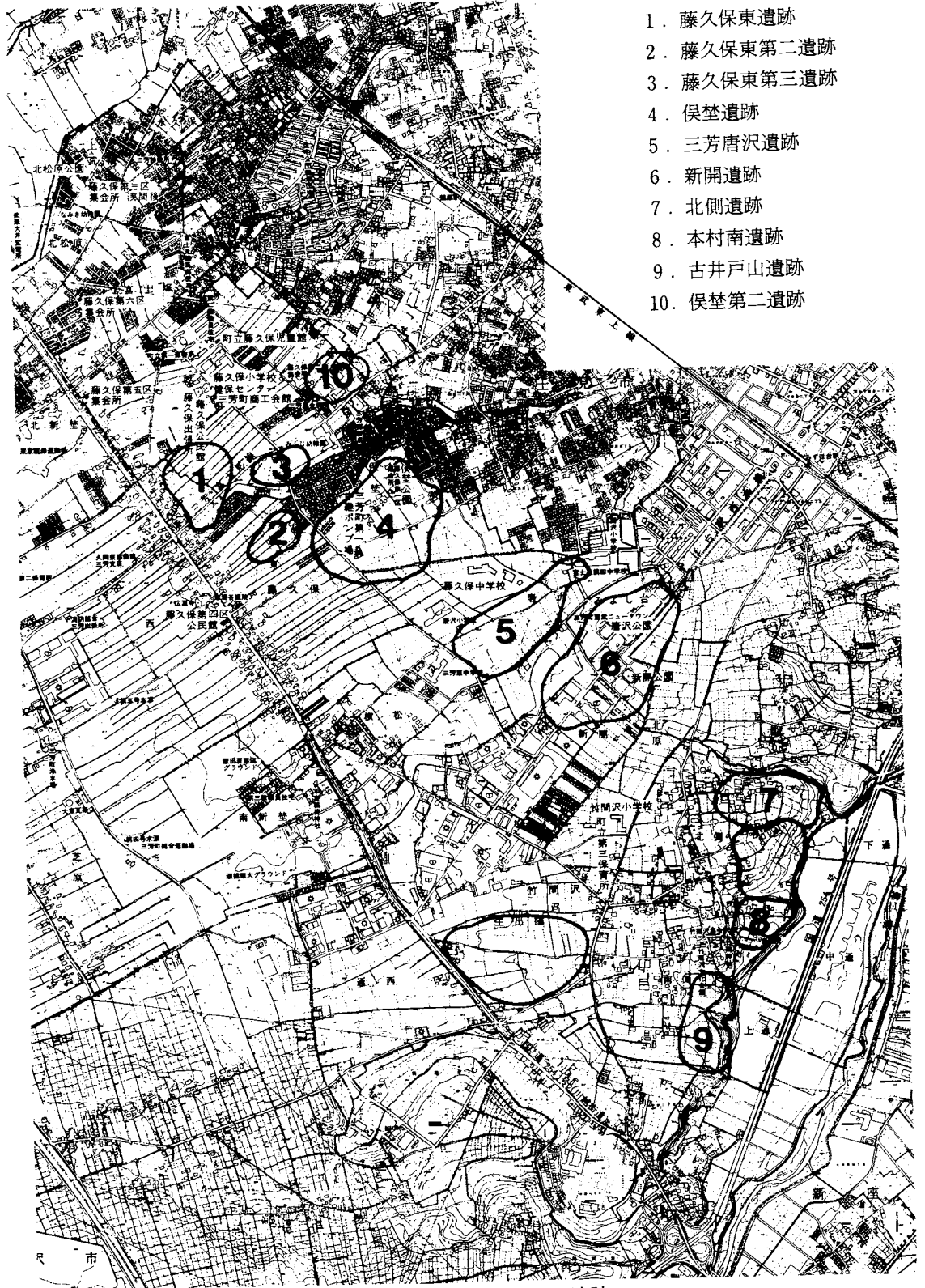
赤岩光代、安島留吉、池上英雄、稲田淳、植田澄子、宇佐美廣子、江原安信、大木浅子、大野路子、小沢玉枝、小野沢紋太郎、河合昇子、木村満子、久家紀子、黒川チヨ子、古寺三吉、小林多恵、斉藤繁信、斉藤常吉、佐藤徳子、佐藤秀夫、高橋亮一、竹居隆一、内藤ミタ、藤原スミ子、益子和章、森郁子、安田マリ子、柳下ケイ子、矢部哲也、吉田知子、渡辺吉太郎、

昭和 62 年度発掘調査・整理作業参加者

井口国男、池上英雄、井砂トシ、稲田淳、植田澄子、江原安信、大木浅子、小沢玉枝、小野沢紋太郎、勝又節子、金田米蔵、黒川チヨ子、小平加枝子、古寺三吉、斉藤繁信、斉藤常吉、佐藤徳子、佐藤秀夫、椿恵子、坪山規子、内藤ミタ、比嘉洋子、細沼豊次、堀籠伊三郎、益子和章、三村美代子、宗村晶子、森節子、柳下ケイ子、矢嶋洋一、安田マリ子、若林紀美代、

名 称	調査原因	調査地	調査期間	対象面積	調 査 概 要
北側遺跡範囲確認調査	倉庫建設	竹間沢 697-1	58.9.2～3	1,200 m <sup>2</sup>	縄文土器片数点・遺構なし
藤久保東遺跡範囲確認調査	駐車場造成	藤久保 321-1	58.9.8	763 m <sup>2</sup>	遺物・遺構なし
藤久保東第三遺跡範囲確認調査	倉庫建設	藤久保 766-1 他	60.9.6～27	2,300 m <sup>2</sup>	旧石器時代石器出土発掘調査の必要が判断された
横松遺跡範囲確認調査	ビル建設	竹間沢 594-4	60.12.16～17	600 m <sup>2</sup>	遺物・遺構なし
藤久保東第三遺跡範囲確認調査	県道拡幅	藤久保 333-1 他	60.12.20～23	100 m <sup>2</sup>	遺物・遺構なし
北側遺跡範囲確認調査	倉庫建設	竹間沢 728-1	61.3～4	900 m <sup>2</sup>	遺物・遺構なし
新開遺跡範囲確認調査	倉庫建設	藤久保 497-1	61.3.13～17	600 m <sup>2</sup>	遺物・遺構なし
本村南遺跡範囲確認調査	遺跡範囲確認	竹間沢 846-1	61.2.25～3.26	650 m <sup>2</sup>	弥生時代埋設谷
俣埜遺跡範囲確認調査	共同住宅建設	藤久保 378-3	61.6.6～20	330 m <sup>2</sup>	縄文中期土器片少量散布 遺構なし
藤久保東第三遺跡範囲確認調査	倉庫建設	藤久保 774-1 他	61.6.20～9.6	2,668 m <sup>2</sup>	旧石器時代石器製作跡。 発掘調査を実施
俣埜第二遺跡範囲確認調査	共同住宅建設	藤久保 291-4	61.7.15～17	1,096 m <sup>2</sup>	遺物・遺構なし
俣埜遺跡範囲確認調査	個人住宅建設	藤久保 385-10	61.9.11・12.24	407 m <sup>2</sup>	遺物・遺構なし
新開遺跡範囲確認調査	駐車場造成	竹間沢 356-1	62.6.16～29	2,219 m <sup>2</sup>	黒曜石片・礫集中部分検出
藤久保東第三遺跡範囲確認調査	駐車場造成	藤久保 766-4 他	62.1.29～2.23	1,429 m <sup>2</sup>	石槍 1 点。遺構なし
俣埜第二遺跡範囲確認調査	共同住宅建設	藤久保 281-11	62.4.15～16	290 m <sup>2</sup>	遺物・遺構なし
新開遺跡範囲確認調査	駐車場造成	藤久保 534	62.4.17～24	1,210 m <sup>2</sup>	遺物・遺構なし
藤久保東第三遺跡範囲確認調査	共同住宅建設	藤久保 336	62.5.7	165 m <sup>2</sup>	遺物・遺構なし
古井戸山遺跡範囲確認調査	公園整備	竹間沢 1081 他	62.11.10～24	3,400 m <sup>2</sup>	縄文～中世の流れ込み遺物。 崖面の調査。遺構なし。
藤久保東第三遺跡範囲確認調査	共同住宅建設	藤久保 336-6 他	62.11.27～63.2.12	2,700 m <sup>2</sup>	旧石器時代石器製作跡 4 ヶ所。発掘調査を実施
藤久保東遺跡範囲確認調査	共同住宅建設	藤久保 803-3.5	63.1.28～2.1	661 m <sup>2</sup>	遺物・遺構なし
藤久保東遺跡範囲確認調査	宅地造成	藤久保 804-1	63.3.7～28	2,700 m <sup>2</sup>	耕作土中より旧石器・縄 文時代遺物検出。遺構なし
新開遺跡範囲確認調査	駐車場造成	竹間沢 351-1	63.3.28～30	250 m <sup>2</sup>	須恵器窯跡 1 基

表 遺跡範囲確認調査実施一覧



1. 藤久保東遺跡
2. 藤久保東第二遺跡
3. 藤久保東第三遺跡
4. 俣埜遺跡
5. 三芳唐沢遺跡
6. 新開遺跡
7. 北側遺跡
8. 本村南遺跡
9. 古井戸山遺跡
10. 俣埜第二遺跡

第2図 調査を実施した遺跡



## II. 各遺跡の調査

### 1. 概 括

三芳町町内遺跡群発掘調査事業は、昭和 58 年度から昭和 62 年度の 5 ケ年にわたり実施してきた事業である。この 5 ケ年の間に、当事業において発掘調査が行なわれた遺跡は 6 遺跡 9 地点である。各遺跡の調査の成果は本章で詳しく述べることとするが、その前に各調査の概要を述べておくことにする。

藤久保東第二遺跡の 2 回にわたる調査で発見された遺構はすべて旧石器時代の遺構で、関東ローム層 VI 層下部に石器ユニット 1 ケ所、VII 層下部に石器ユニット 1 ケ所、IX 層下部に 2 ケ所、さらに、X 層より局部磨製石斧・ナイフ形石器を含むユニット 1 ケ所、合計 5 ケ所のユニットが検出された。本村南遺跡は、柳瀬川の左岸台地上に位置し、当事業において 4 回の調査が実施され、弥生時代住居跡 9 軒、方形周溝墓 1 基、地下式坑 2 基が検出された。古井戸山遺跡の調査は、柳瀬川左岸に面した崖面部分の調査であり、縄文時代早期・後期、弥生時代、中世にわたる遺物が検出されたが、遺構の検出はなかった。俣埜遺跡 D 地点では、縄文時代の炉穴 25 基、旧石器時代の礫ユニット (IV 層中) 1 ケ所が検出された。北側遺跡では、近世～近代と考えられる粘土採掘坑 1 基が確認されたのみであった。三芳唐沢遺跡の調査では、縄文式土器と思われる小破片が数点検出されたにとどまった。

遺 跡 名	調 査 年 月 日	主 な 調 査 内 容
藤久保東第二遺跡 A 地点	昭和 58 年 6 月 6 日～6 月 30 日	旧石器時代石器ユニット 4 ケ所検出
本村南遺跡第 1 地点	昭和 58 年 8 月 3 日～8 月 12 日	地下式坑 1 基検出
本村南遺跡第 2 地点	昭和 58 年 10 月 11 日～11 月 19 日	弥生時代住居跡 5 軒
北側遺跡	昭和 58 年 12 月 5 日～12 月 28 日	オツアナ 1 基・土坑 1 基
本村南遺跡第 4 地点	昭和 59 年 1 月 12 日～1 月 31 日	地下式坑 1 基
藤久保東第二遺跡 B 地点	昭和 59 年 6 月 4 日～8 月 31 日	旧石器時代 (X <sub>5</sub> 層) ユニット 1 ケ所検出
三芳唐沢遺跡	昭和 59 年 8 月 20 日～9 月 30 日	遺構なし
俣埜遺跡 D 地点	昭和 60 年 8 月 11 日～8 月 31 日	旧石器時代礫群・縄文時代炉穴 25 基
本村南遺跡第 5 地点	昭和 61 年 2 月 14 日～3 月 31 日	弥生時代住居跡・方形周溝墓 1 基
古井戸山遺跡	昭和 62 年 2 月 24 日～3 月 25 日	縄文～弥生時代包含層・板碑

表 発掘調査一覧

ほんむらみなみ

## 2. 本村南遺跡の調査

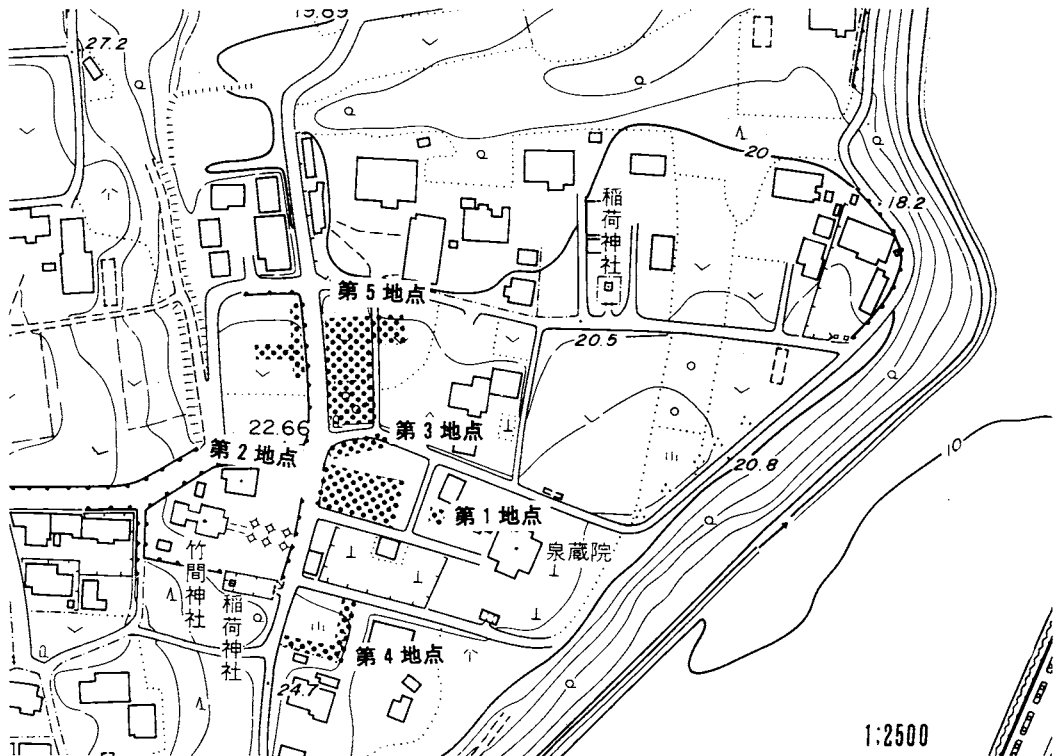
本村南遺跡は、埼玉県入間郡三芳町大字竹間沢字南側に存在する。本遺跡は、柳瀬川が形成した沖積地を東側にのぞむ左岸台地縁辺部に位置し、遺跡の北側にも柳瀬川に流れ込む小河川が、小さな谷戸を形成している。

本遺跡の調査は、昭和58年度より昭和60年度にかけて5地点の発掘調査が行なわれた。発掘調査対象面積は974 m<sup>2</sup>である。

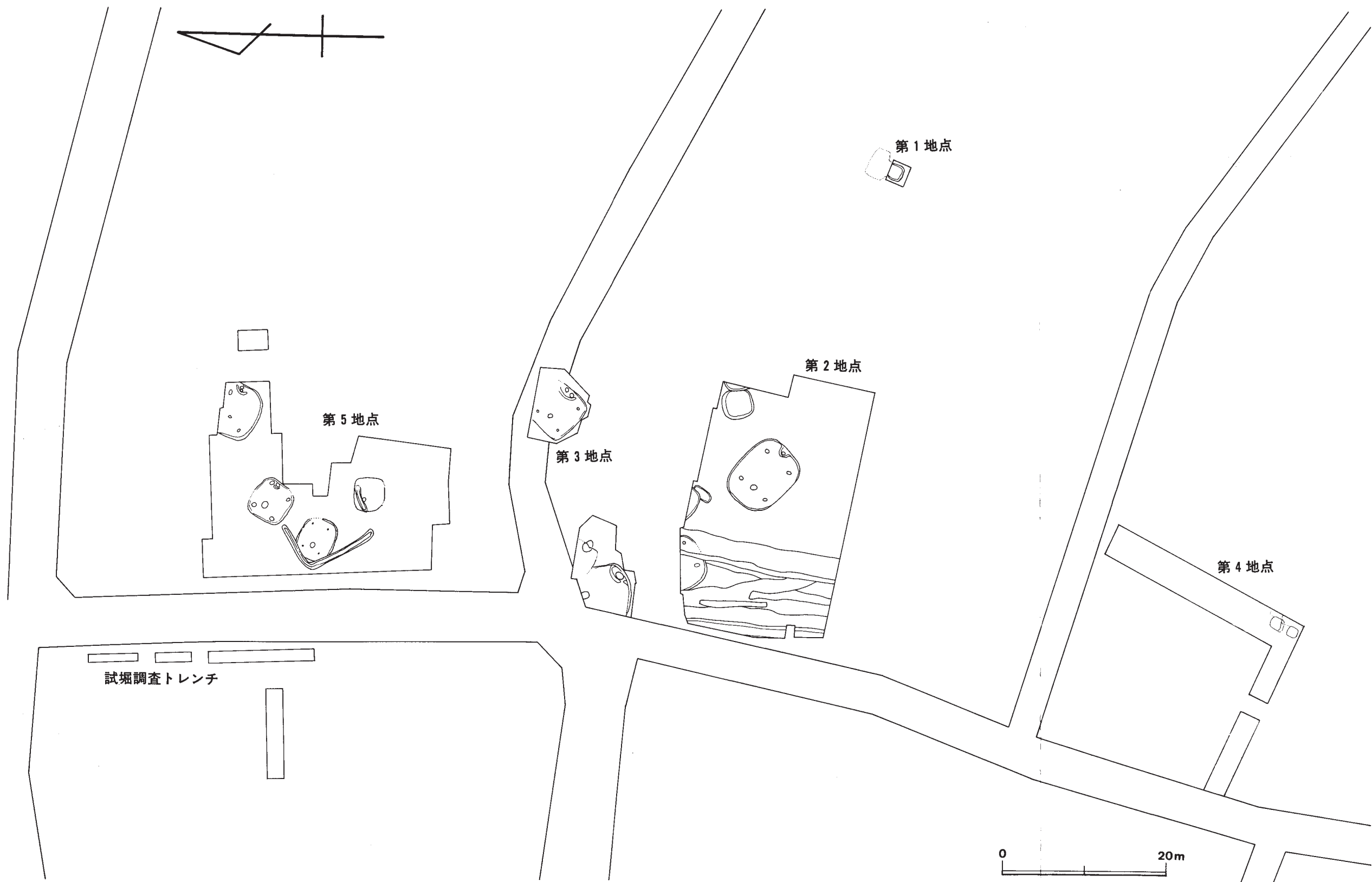
検出された遺構は、弥生時代の住居跡11軒・方形周溝墓1基・土坑1基、近世～近代の地下式坑2基・溝状遺構5条が検出された。

以下、各地点の調査期間と調査経緯の概略を記しておく。

本村南遺跡第1地点の調査は、昭和58年8月8日から昭和58年8月12日にかけて、偶然に開口した地下式坑の記録保存調査であり、調査対象面積は10 m<sup>2</sup>である。第2地点の調査は、昭和58年10月11日から昭和58年11月19日にかけて、地下式坑の調査が行なわれた第1地点の西側にあたる部分、330 m<sup>2</sup>の調査であり、防火水槽設置工事に先立つ発掘調査である。第3地点の調査は、昭和58年12月12日から昭和59年1月30日にかけて道路拡幅に先立ち、144 m<sup>2</sup>の発掘調査が実施された。第4地点の調査は、昭和59年1月12日から昭和59年1月31日にかけて、土留工事に先立つ発掘調査として90 m<sup>2</sup>の調査が実施された。第5地点の調査は、昭和61年2月14日から昭和62年3月31日にかけて、天地返しに先立つ発掘調査として400 m<sup>2</sup>を実施した。



第3図 本村南遺跡調査地点



第4図 本村南遺跡全測図

# 1) 遺 構

## a. 弥生時代住居跡

### 1号住居跡

本遺構は第2地点調査区の北東隅に位置し、2号住居跡を切っている。本遺構の東側部分は調査区外へ延びているため、西側の一部分を調査したにすぎない。

本遺構の規模は、遺構の西側を検出したのみであるため不明であるが、検出された一辺の長さは2.4mを測り、壁に脹らみをもつ胴張りの隅丸方形を呈すると思われる。壁は60°~70°の角度をもって立ちあがり、壁高は20cm~25cmを測る。床面はほぼ平坦であり、ロームブロックを多量に含む貼床が検出された。貼床面は堅く締っている。柱穴・周溝・炉は検出されなかった。

出土遺物は鉢形土器と思われる破片が出土している。

### 2号住居跡

本遺構は第2地点調査区の北東隅に位置し、東側約1/4を1号住居跡によって切られている。近接する遺構としては、他に3m南に3号住居跡が存在する。

平面形は、長軸3.1m・短軸3m、壁の中央部が外側に張り出す隅丸方形を呈する。長軸方向はN-10°-Wである。壁は約70°の角度をもって立ちあがり、壁高は北壁で35cm~40cmを測る。床面は全体に軟弱であり、検出が極めて困難であった。柱穴は3個(P<sub>2</sub>~P<sub>3</sub>)確認された。P<sub>1</sub>は25cm×20cm・深さ20cm、P<sub>2</sub>は30cm×25cm・深さ30cm、P<sub>3</sub>は33cm×25cm・深さ20cmを測る。平面形はすべて不整楕円形を呈する。周溝は検出されなかった。

炉は、住居跡の中央やや東寄りに位置する。火床面の規模は35cm×25cmのほぼ楕円形を呈する。底面はやや丸味を帯び、緩やかに立ちあがる。

遺物は検出されなかった。

### 3号住居跡

本遺構は第2地点調査区のほぼ中央部に位置する。遺存状態は良好である。

規模は、長軸6.6m・短軸5.8mの胴部がやや外側に張り出す隅丸方形を呈する。長軸方向はN-60°-Wである。壁はほぼ垂直に立ちあがり、壁高は25cmを測る。床面は中央部がやや高まりをもち、堅く締っている。柱穴付近は緩やかに窪んでおり、締りが弱くなっている。

柱穴は4個(P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>)検出された。P<sub>1</sub>は42cm×41cm・深さ60cm、P<sub>2</sub>は42cm×40cm・深さ65cm、P<sub>3</sub>は35cm×35cm・深さ70cm、P<sub>4</sub>は42cm×40cm・深さ65cmを測る。

炉は住居跡の中央部やや西寄りに位置する。火床面の中央部には、炉石が存在する。周溝は、西壁・南壁・東壁に認められた。東壁際に4cm~5cmの高さをもつ馬蹄形状の高まりが検出され、その壁側には貯蔵穴(P<sub>5</sub>)が検出された。P<sub>5</sub>は、60cm×55cm・深さ35cmを測り、不整楕円形を呈する。

遺物出土点数は39点を数える。そのほとんどは覆土中の遺物であるが、P<sub>5</sub>内より台付甕形土器片が出土している。覆土中からは壺形土器片の検出があった。

#### 4号住居跡

本遺構は第2地点調査区の北側に位置する。住居跡の南東隅が1号土坑を切っている。本住居跡は大半が調査区外へ延びており、約1/5を検出したにすぎないため、規模は不明である。

検出された部分の床面は固く締っている。壁は約70°の角度をもって立ちあがる。壁高は最大50 cmを測る。柱穴・周溝は検出されていない。

#### 5号住居跡

本遺構は第2地点調査区の北西に位置する。南東壁は、1号溝によって切られている。

規模は、約1/2が調査区外へ延びているために不明である。平面形は、胴がやや脹らむ隅丸方形を呈すると思われる。壁高は15 cmを測る。

柱穴は1個(P<sub>1</sub>)検出された。平面形は、21 cm×20 cmの不整円形を呈する。

炉は、住居跡の南東隅寄りに位置する。火皿をもつ炉である。規模は52 cm×48 cmを測り、ほぼ楕円形を呈する。

遺物は、台付甕形土器の脚台部が出土している。

#### 6号住居跡

本遺構は第3地点調査区の東側に位置する。北壁は攪乱により失われていた。

規模は不明であるが、東西軸で4.8 mを測る。

柱穴は3個(P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>)確認された。P<sub>1</sub>は32 cm×25 cmの不整楕円形を呈する。P<sub>2</sub>は29 cm×21 cmの楕円形を呈する。P<sub>3</sub>は20 cm×12 cmの不整楕円形を呈する。東壁際に貯蔵穴2個(P<sub>4</sub>、P<sub>5</sub>)が検出された。P<sub>4</sub>は52 cm×41 cmを測り楕円形を呈する。P<sub>5</sub>は51 cm×50 cmを測り不整円形を呈する。P<sub>4</sub>とP<sub>5</sub>を囲むように弧を描く高まり(周堤)が検出された。周溝は検出されなかった。

遺物の出土はない。

#### 7号住居跡

本遺構は第3地点調査区の西側に存在する。西壁および北壁は攪乱のために検出されていない。規模は不明である。平面形は、隅丸方形と考えられる。北東隅は平安時代の住居跡に切られている。

柱穴は検出されなかった。床面は平坦であり、締っている。南壁東寄りの隅に弧状に高まる周堤が検出された。周堤と東壁の間に貯蔵穴1個(P<sub>1</sub>)が検出された。規模は70 cm×50 cmを測り不整円形を呈する。

炉はほぼ中央部分に位置する。火皿をもち、規模は、北側部分が攪乱されているため不明である。平面形は楕円形を呈すると思われる。

遺物は器種不明の弥生式土器片が3点検出されている。

## 8号住居跡

本遺構は第5地点調査区の北側に位置する。本遺構の東側約10mの位置に9号住居跡、南西約5mの位置に10号住居跡が存在する。

規模は、長軸4m・短軸3.8mを測り隅丸方形を呈する。長軸方向はN-50°-Wである。壁は80°~90°の角度をもって立ちあがり、壁高は32cmを測る。2本の攪乱により壁面が壊されているが、遺存状態の良好な遺構である。

床面は、全面にロームブロックを多量に含む貼床が施されており、柱穴より内側では、非常に堅く締った状態にあった。

柱穴は4個(P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>)認められた。P<sub>1</sub>は40cm×30cm・深さ55cm、P<sub>2</sub>は50cm×48cm・深さ45cm、P<sub>3</sub>は50cm×40cm・深さ66cm、P<sub>4</sub>は41cm×40cm・深さ52cmを測る。P<sub>5</sub>は貯蔵穴である。北西側に周堤が確認されている。貯蔵穴の規模は45cm×43cm・深さ20cmを測る。周溝は西壁と南壁部分に認められる。

炉は、住居跡中央やや北寄りに位置する。規模は83cm×67cm・深さ12cmを測る。火床面は良く焼け締っている。

遺物は、総点数71点を数える。床直上遺物として台付甕形土器の甕部(第24図2)が東壁隅より逆さになった状態で出土している。他に鉢形土器(第24図3)が覆土中より潰れた状態で出土している。

## 9号住居跡

本遺構は第5地点調査区の北東隅に存在する。遺構は調査区外へ延びており、南側約3/4を検出した。近接する遺構として、南西約5mに8号住居跡が存在する。平面形は、胴がやや脹らむ隅丸方形を呈すると思われる。

規模は不明であるが、南壁が5mを測る。長軸方向は、南東壁から推定するとN-63°-Wであると思われる。壁はほぼ垂直に立ちあがる。壁高は37cmを測る。

床面は貼床がされており、全面が堅く締っている。

柱穴は2個(P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>)検出された。P<sub>1</sub>は、45cm×35cm・深さ58cmを測る。P<sub>2</sub>は、54cm×33cm・深さ63cmを測る。貯蔵穴は、住居跡の東壁際に2個(P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>)東西に並んで検出された。P<sub>3</sub>は、57cm×53cm・深さ19cmを測り、不正楕円形を呈する。P<sub>4</sub>は、45cm×39cm・深さ18cmを測り、楕円形を呈する。P<sub>3</sub>とP<sub>4</sub>を囲むように、高さ9cm~10cmを測る締りの良好な周堤が検出された。周溝は、西壁の南側部分より南壁をまわり、東壁のP<sub>4</sub>の位置まで検出された。

炉は、住居跡中央やや西寄りに位置する。火床面は粘土を用いた火皿である。炉の遺存状態は良好である。火皿の規模は53cm×30cm・厚さ4cmを測り、不整楕円形を呈する。

遺物は、覆土中より台付甕形土器脚台部(第24図4)が出土している。

## 10号住居跡

本遺構は第5地点調査区の西側に位置する。本遺構の西壁両端は1号方形周溝墓に切られている。近接する遺構として、4m南に同じく1号方形周溝墓に切られている11号住居跡が存在

する。

平面形は、長軸 4.2 m・短軸 3.5 m を測り、隅丸方形を呈すると思われる。長軸方向は N-57°-W である。本住居跡はローム層を掘り込んで構築されている。壁は約 70° の角度をもって立ちあがり、壁高は南壁において 25 cm を測る。床面はほぼ平坦であり、炉の東側部分はよく踏み固められた堅く締った状態が確認された。

柱穴は 4 個 (P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>) 確認され、4 個ともに遺存状態が良好であり、セクションにより柱痕も確認されている。P<sub>1</sub> は、20 cm×19 cm・深さ 60 cm、P<sub>2</sub> は、35 cm×26 cm・深さ 56 cm、P<sub>3</sub> は、20 cm×18 cm・深さ 43 cm、P<sub>4</sub> は、24 cm×22 cm・深さ 50 cm を測り、すべて不整楕円形を呈する。周溝の検出はなかった。P<sub>4</sub> の南側に周堤と思われる高まりが確認されたが、貯蔵穴等の掘り込みは検出されていない。

炉は、住居跡の中央やや西寄りに位置する。床面からの掘り込みは殆どなく、焼土も僅かに検出されたのみである。

本住居跡の P<sub>4</sub> 付近からは、炭化材が検出されており、また、覆土中にも炭化物・焼土が多く認められていることから、火災住居跡の可能性があると思われる。

遺物は炉の北側から、台付壺形土器 (第 24 図 5) が出土している。

## 11 号住居跡

本遺構は第 5 地点調査区の南に位置する。住居跡の北側部分は 1 号方形周溝墓に切られており、西側及び東側は攪乱を受けている。

平面形は、長軸 3.2 m・短軸 3.1 m を測り、隅丸方形を呈する。長軸方向は N-85°-W である。住居跡はローム層を掘り込んで構築されているが、ローム層への掘り込みは非常に浅い。

床面はほぼ平坦である。炉の南側部分は固く踏み締められた状態が確認されたが、その他の床面は軟弱であった。壁は耕作により殆ど削平されており、確認面までの壁高は 3 cm~5 cm を測るのみであった。

柱穴・周溝・貯蔵穴は確認されなかった。

炉は住居跡の中央やや西寄りに位置する。平面形は 57 cm×52 cm の不整楕円形を呈する。

遺物は弥生時代土器片 8 点である。

## b. 方形周溝墓

### 1 号方形周溝墓

本遺構は第 5 地点調査区のほぼ中央部に位置する。西溝が 10 号住居跡を、南溝が 11 号住居跡をそれぞれ切っている。耕作による削平のため、確認面はローム層上面である。

平面形は、北・西溝は L 字状に繋がり、南溝は独立して存在する。東溝は未調査区にかかるため不明ではあるが、北溝の立ちあがり方、南溝の状態からすると独立して存在するものと思われる。溝幅を含めた中軸長は、南北 16.8 m を測る。主体部は検出されなかった。

L 字状を呈する北・西溝は遺存状態が良好である。溝幅は約 60 cm~65 cm である。南溝は、溝幅 60 cm を測り、東端に行くに従がい外側に開く。北溝の深さは 60 cm~65 cm、西溝の深さは 45 cm~60 cm、南溝の深さは 30 cm~40 cm を測る。

北・西溝の底面は比較的平坦であるが、南溝の底面は不整であった。東溝については、精査確認を行なったが確認されず、調査区外に存在する可能性も考えられる。

遺物は、北・西溝内覆土中より 14 点出土している。実測可能な遺物は、底部穿孔壺形土器（第 25 図 7）が北溝東端より口縁部を斜め下に向けて流れ込んだ状態で検出された。西溝からは小形壺形土器（第 25 図 9）が溝底部上面から倒れた状態で検出されている。他に埴形土器（第 25 図 10）、高坏形土器脚部（第 25 図 11）、台付甕形土器脚台部（第 25 図 12）が出土している。

なお、本発掘調査以前、当調査区内において耕作中に出土した胴部穿孔壺形土器（第 25 図 8）は、調査の結果、西溝中央部の溝底部付近より出土したものと判断された。

## c. 地下式坑

### 1号地下式坑

第 1 地点すなわち青龍山泉蔵院境内で発見された遺構である。泉蔵院境内庫裏南側において、突然地面が陥没し横穴が開いたとの連絡により、教育委員会で緊急に発掘調査対応したものである。尚、地下式坑の地下式部は発見当初は天井部の崩壊も少なく残存状態も良いものであったが、緊急に天井部の形状のみを図化し、危険性を配慮して寺の協力を得て重機を利用し天井部を破壊して調査に臨んだ。

地下式坑は、発見当初すなわち陥没部分が入り口部分であり、そこから北側に地下室部をもつものであった。地表面からローム層面までの深さは 0.6 m を測り、ローム層を穿いて地下室部が形成されていた。主軸は N-32°-W を測る。入り口部分の上面は崩壊が進んでいたが、主軸方面のやや短い長方形を呈すると想定された。入り口部の底面は短辺約 75 cm、長辺約 90 cm の長方形で、深さは現在地表面から 2 m 70 cm を測った。入り口部床面より地下室部床面へは緩やかに斜下する。その落差は約 15 cm である。地下室部の床面はほぼ平坦で、平面形は主軸を中心に左右対称の台形状を呈していた。床面積は約 7.13 m<sup>2</sup> であった。壁面は僅かに内傾し、高さ 1 m 35 cm～1 m 40 cm を測った。天井部もほぼ平坦であった。壁面、天井面ともに幅 10～12.5 cm ほどのスキまたはクワによると思われる整形痕が明瞭に観察された他は人為的な痕跡は観察されなかった。地下式坑内の覆土は、発見当初の観察によれば、入り口部から流れ込んだ土は、ロームでほとんどが、ブロック状を呈していた。地下室部に入り込んでいるものの床面を覆いつくすほどの土の流入ではなく、入り口部のみの閉塞を目的としたものであると判断された。1号地下式坑からの出土遺物は皆無であった。

時期、性格については詳らかにすることはできなかったが、壁面および天井面に地下式坑穿孔時の整形痕が明瞭に残されていることから推察すれば長期間の使用性がなかったであろうことが推察されることと、70 有余歳の住職および家族の方々には地下式坑の記憶がないということも付記しておく。

### 2号地下式坑

第 4 地点の地下式坑は、同地点の東側に入りこむ落差約 3 m の崖線付近に存在し、発掘調査によるトレンチの一部分に、天井部の崩壊による陥没坑が発見されたことで調査対象となった。

本遺構は東側崖下から横穴式に掘られたものである。崖下の入り口部から入ると、坑はすぐ



に南側と北側の2方向に分かれ、北側はすぐに鍵状に曲がりその奥に約1 m 80 cmの奥行をもつ坑が形成されている。南側は隣地に伸びるため調査対象にはなり得なかった。

坑の幅は入り口部付近が約90 cmと最も狭く、北側の鍵状に曲がる付近が幅約1 m 20 cmと最も広くなり、北側坑最奥で約1 m 05 cmの幅を測る。坑の底面はほぼ平坦であったが、北側の鍵状に曲がる部分に高さ約15 cmの段が2段形成されており、奥に向かって高くなっている。天井部は2段の階段部で僅かに残存するのみであった。階段部付近の地下式坑断面は隅丸の長方形を呈し、天井部の高さ約75 cm幅約1 m 05 cmを測った。

地下式坑に直接伴う遺物は発見されなかったが、北側坑の最奥の部分の埋め土の中からは明治期を中心とした陶器・磁器片が出土している。たぶん天井部崩壊により生じた縦坑に生活の不用品を捨て込んだものであろう。それらの器片の中に県内産の飯能焼の角鉢が出土している(写真図版)。

時期・用途については詳かにはされ得なかった。

#### d. 土 坑

##### 1号土坑

本遺構は第2地点調査区の北側に位置する。北壁の一部と西壁の約1/2を4号住居跡によって切られている。

規模は、長軸2.1 m・短軸1.1 mを測る。長軸方向は、N-30°-Eである。

平面形は、隅丸方形を呈する。壁は約60°の角度をもって立ちあがる。確認面よりの深さは19 cmを測る。底面は平坦である。

遺物の出土はなかった。

#### e. 溝状遺構

溝状遺構は第2地点調査区の西側に、ほぼ同一方向(南北方向)を呈し、5条検出された。以下に各遺構について概略を記すこととする。

##### 1号溝状遺構

本遺構は第2地点調査区西側に位置する。5号住居跡を切っている。規模は、溝幅3.3 m~3.5 m・深さ80 cm~90 cmを測り、方向はN-15°-Eである。断面形は薬研状を呈する。

##### 2号溝状遺構

本遺構は第2地点調査区西側に位置する。5号住居跡と1号溝状遺構を切っている。規模は溝幅1.2 m~1.4 m・深さ20 cmを測る。断面形は皿状を呈す。

##### 3号溝状遺構

本遺構は第2地点調査区西側に位置する。5号溝状遺構によって切られている。2号溝状遺構と重複関係にあるが、切り合いは不明である。規模は溝幅1 m~1.5 m・深さ20 cmを測る。断面形は皿状を呈し、2号溝状遺構に類似する。

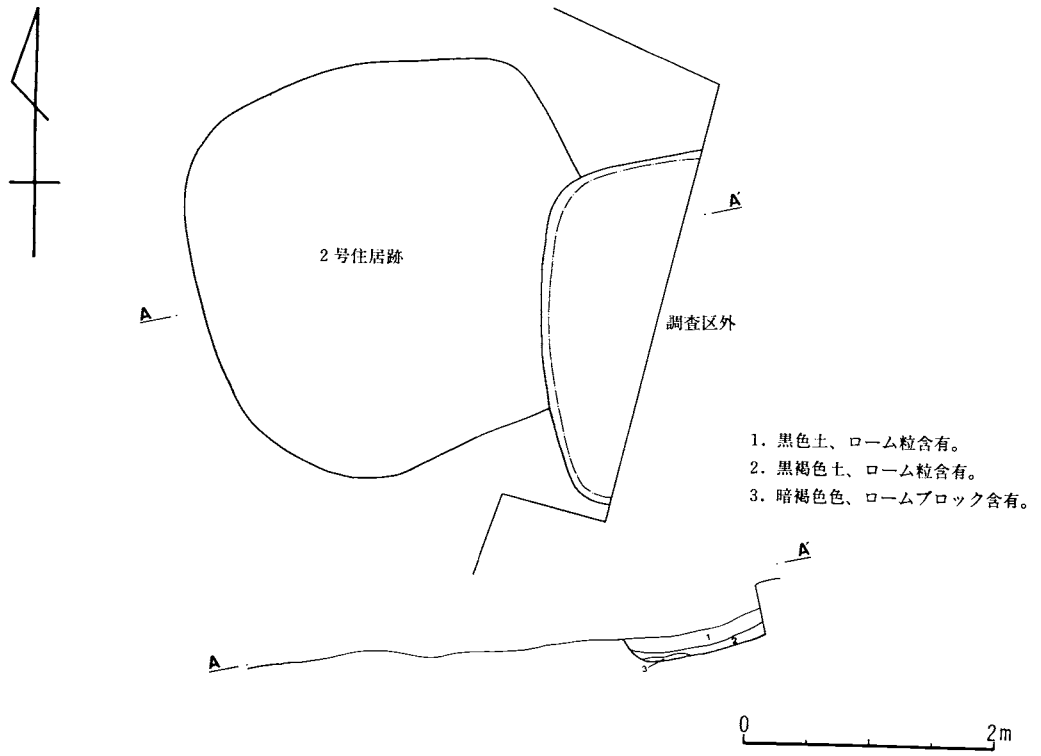
#### 4号溝状遺構

本遺構は第2地点調査区の西側に位置する。溝幅の約1/3は調査区外に延びている。規模は不明である。断面形は箱葉研状を呈すると思われる。深さは50cm～60cmを測る。方向は1号溝状遺構とほぼ同一である。

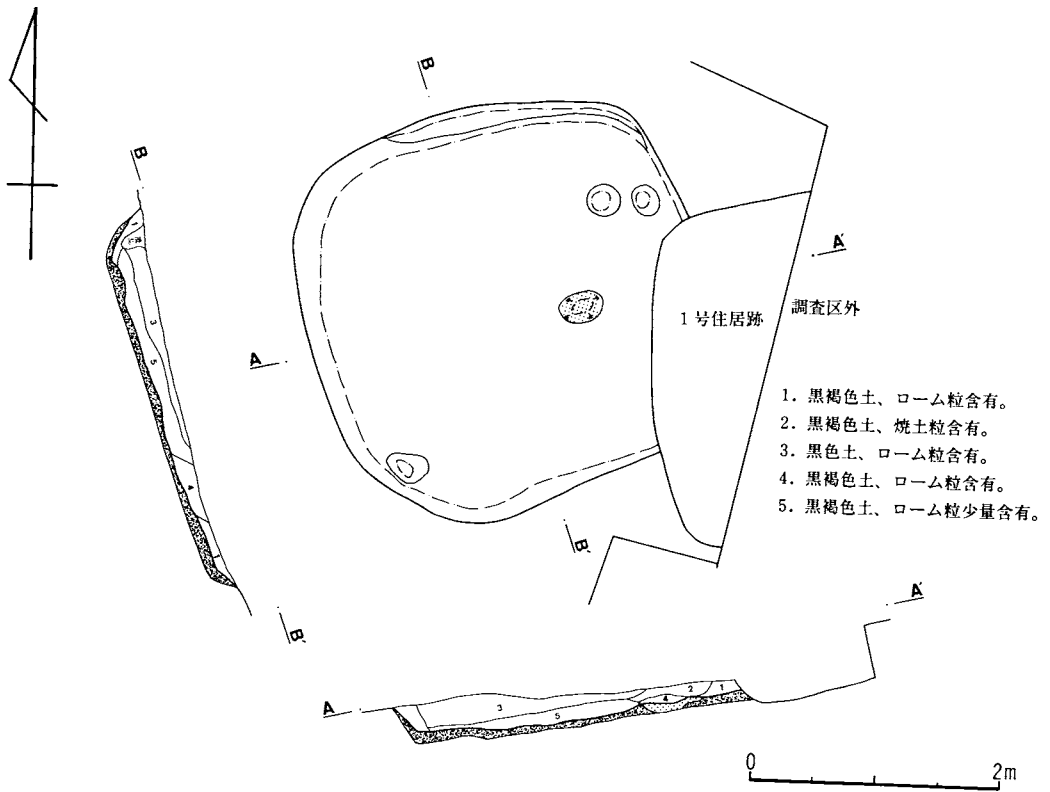
#### 5号溝状遺構

本遺構は第2地点調査区西側、3号溝状遺構を切って存在する。規模は長軸6.6m・短軸0.6m・深さ50cmを測る。断面形は箱状を呈する。本遺構は、現在でも畑の隅に農作物を一時的に埋めて保存するために設けられる土坑（イモアナ）と同様の性格をもつものと思われる。

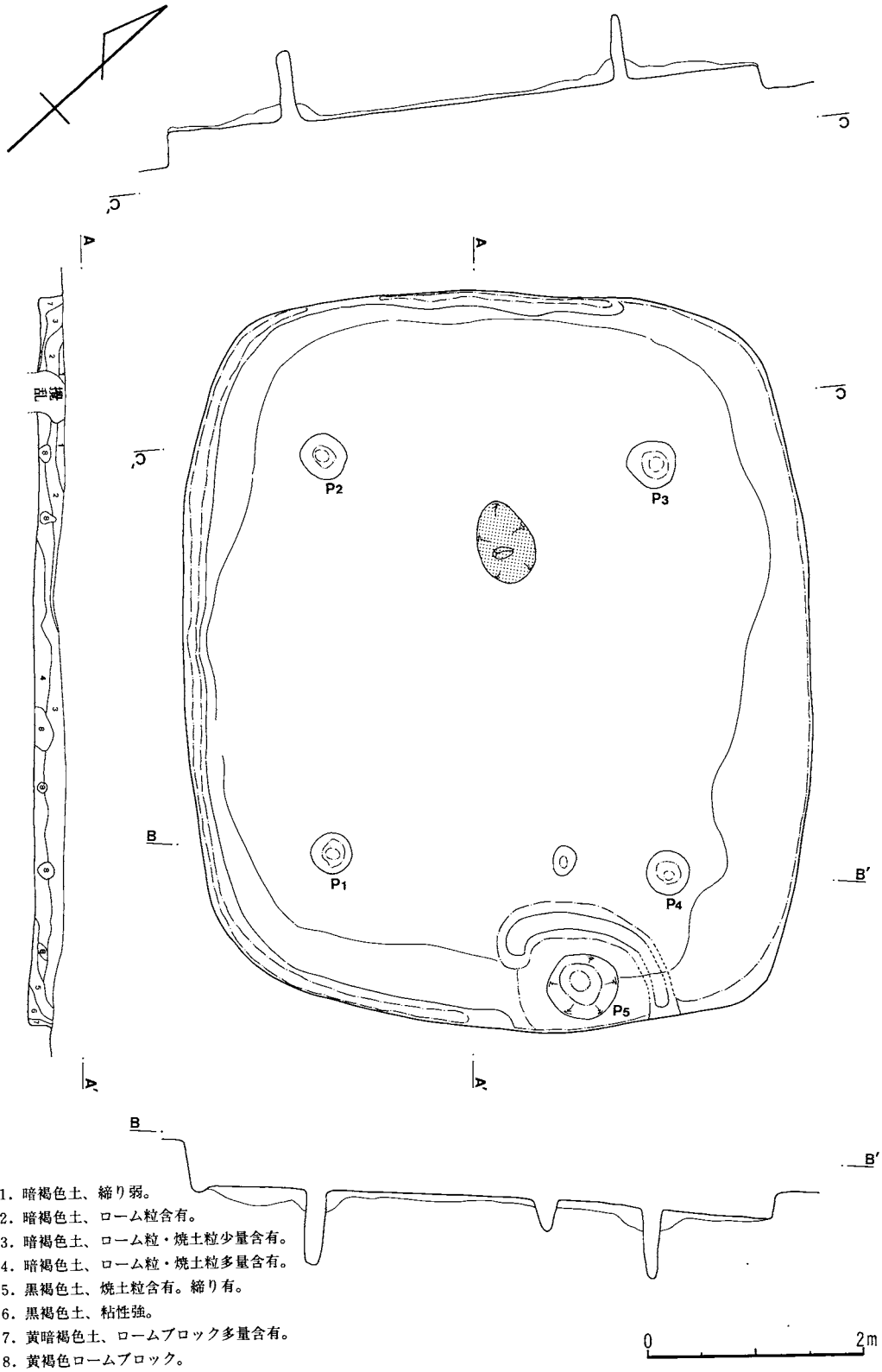
今回確認された第2地点調査区西側に位置する溝状遺構の性格および時期について、断定することは不可能であるが、当調査区は、天台宗寺院の境内にあたり畑として使用されていた所で、地元古老の話によると、以前、寺域を区画するため、当地に溝が設けられていたようである。このことから、葉研状・箱葉研状を呈する溝状遺構は、地境をあらわす仕切溝もしくは、農作物を守るための根切溝としての性格をもつ可能性が考えられよう。



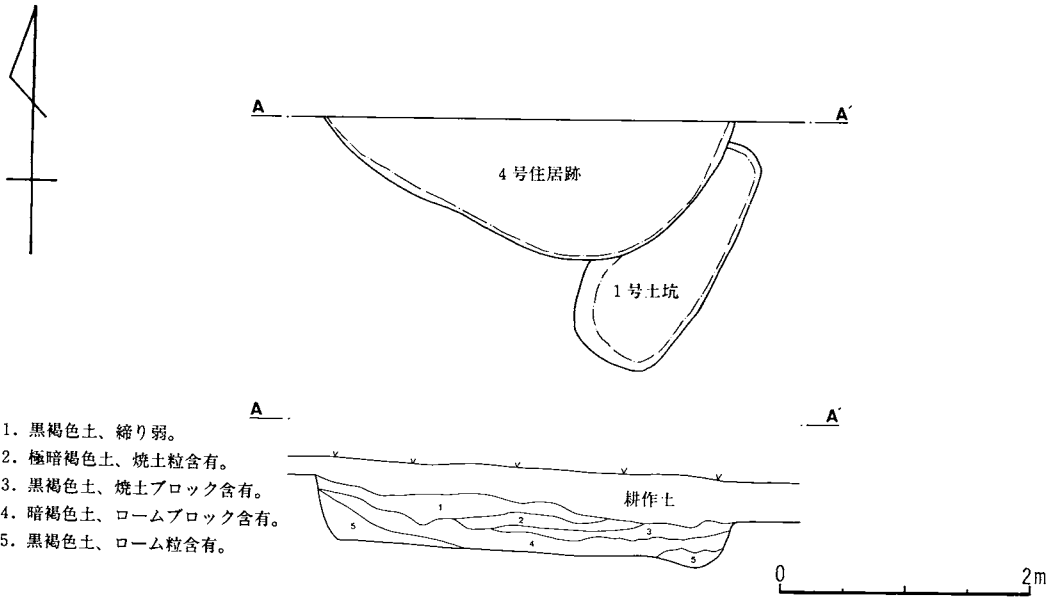
第5図 本村南遺跡1号住居跡実測図



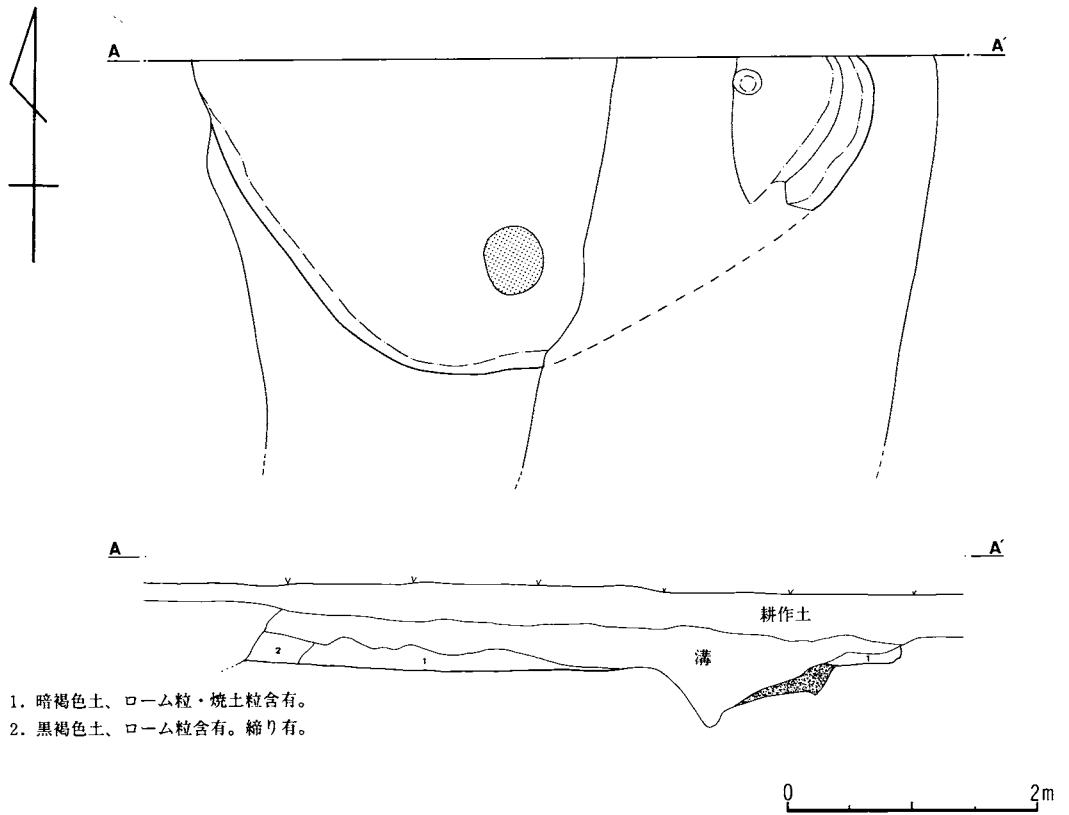
第6図 本村南遺跡2号住居跡実測図



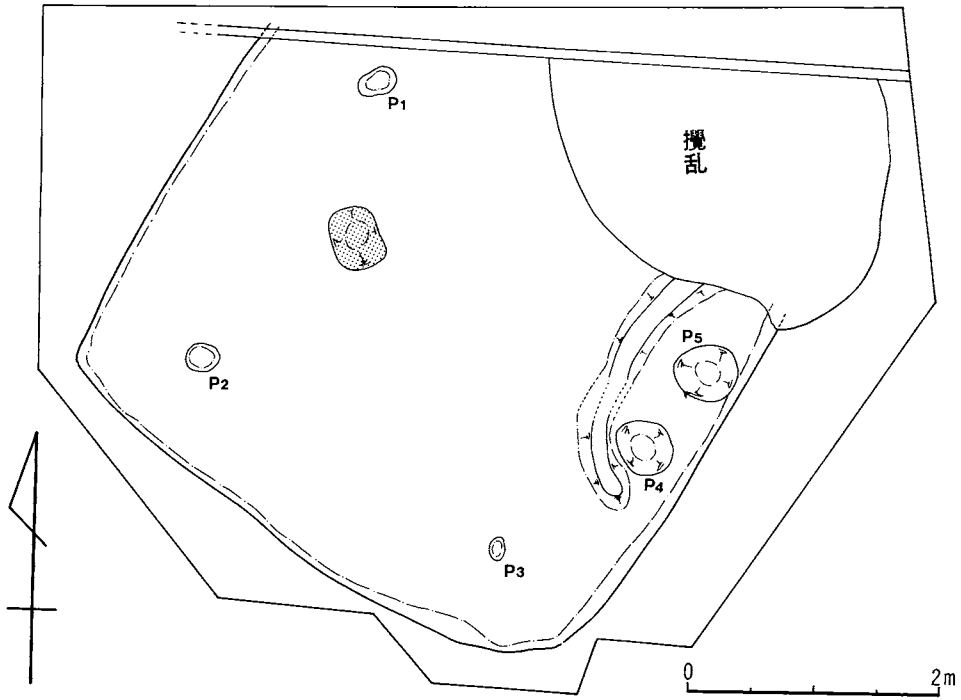
第7図 本村南遺跡3号住居跡実測図



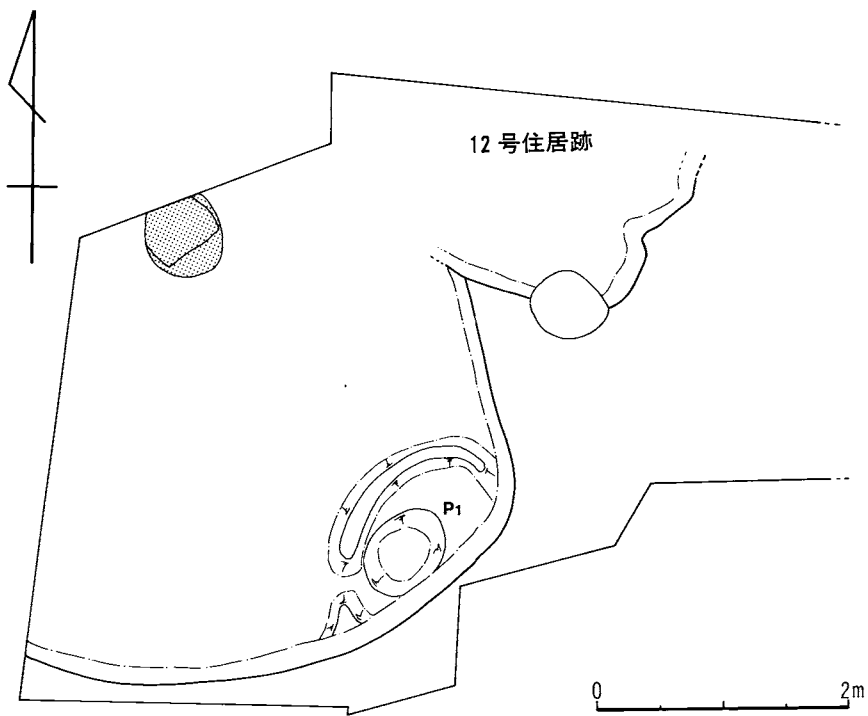
第8図 本村南遺跡4号住・1号土坑実測図



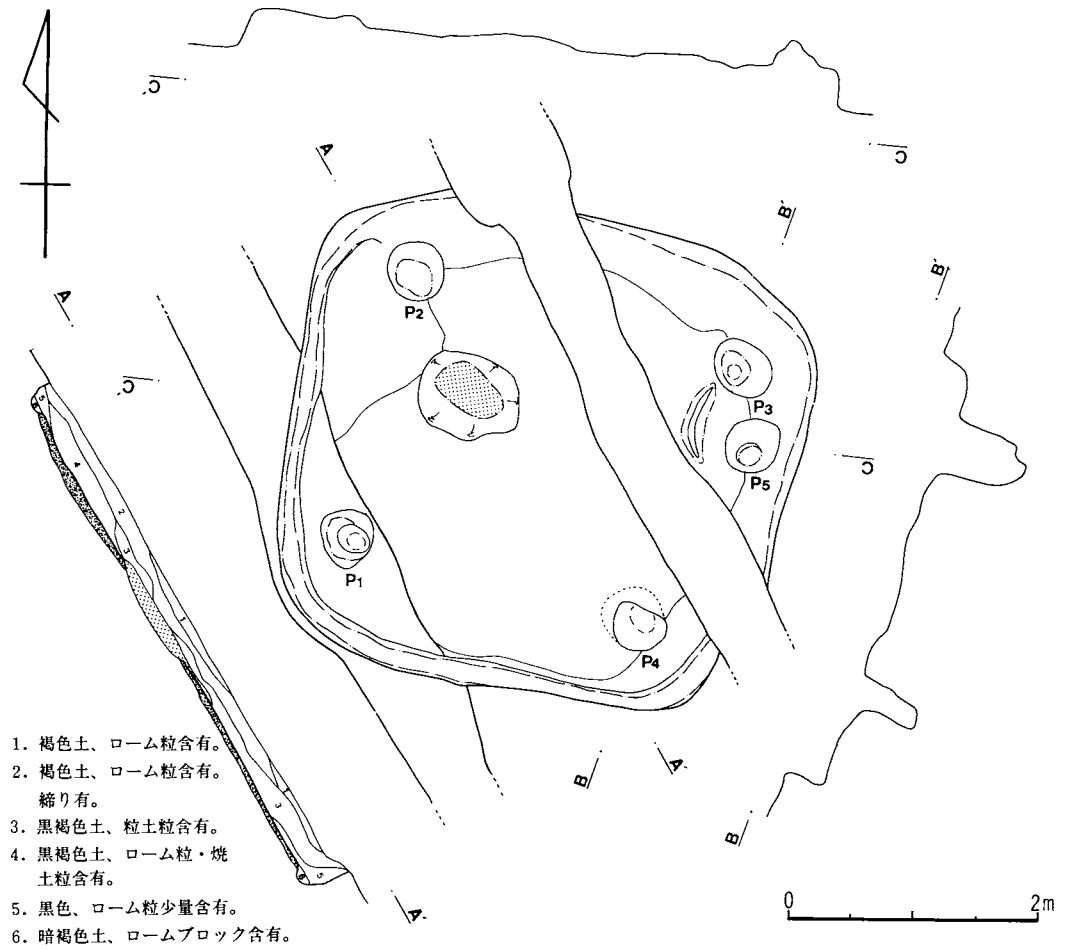
第9図 本村南遺跡5号住居跡実測図



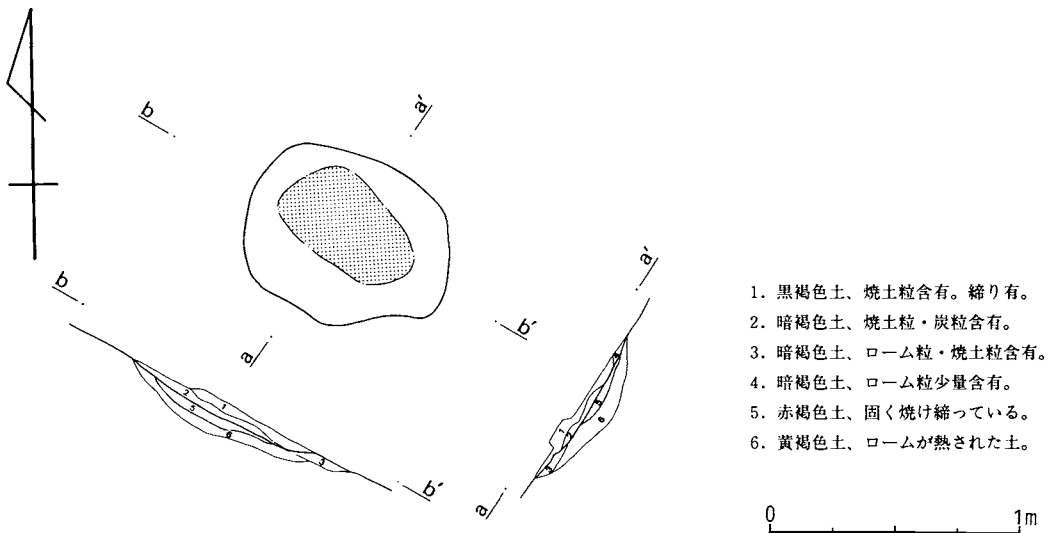
第 10 図 本村南遺跡 6 号住居跡実測図



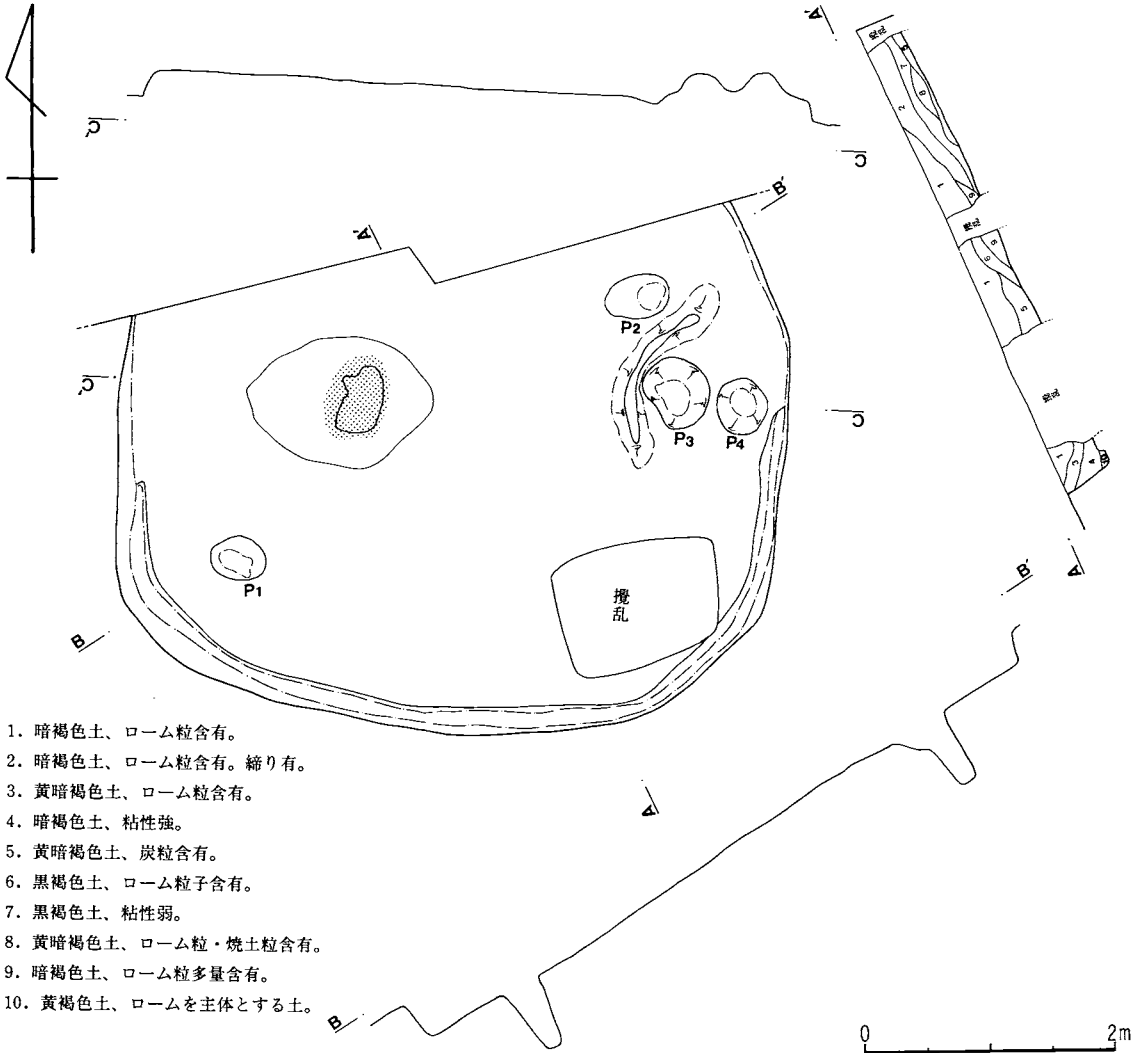
第 11 図 本村南遺跡 7 号住居跡実測図



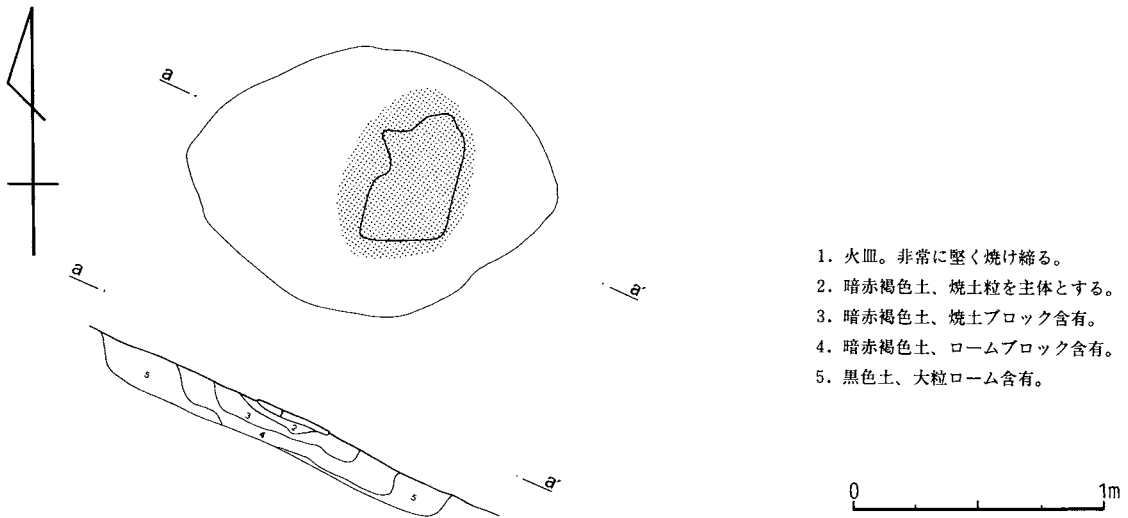
第 12 図 本村南遺跡 8 号住居跡実測図



第 13 図 本村南遺跡 8 号住居跡炉実測図

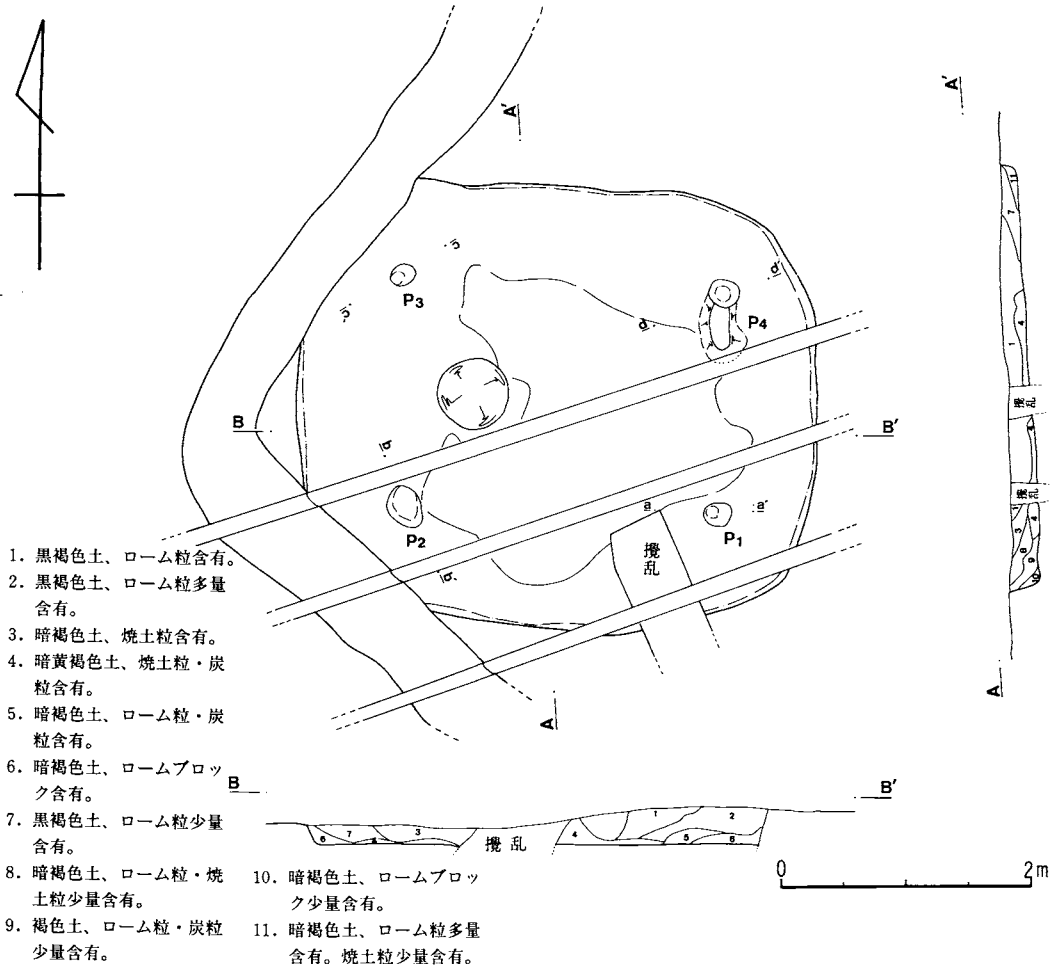


第 14 図 本村南遺跡 9 号住居跡実測図

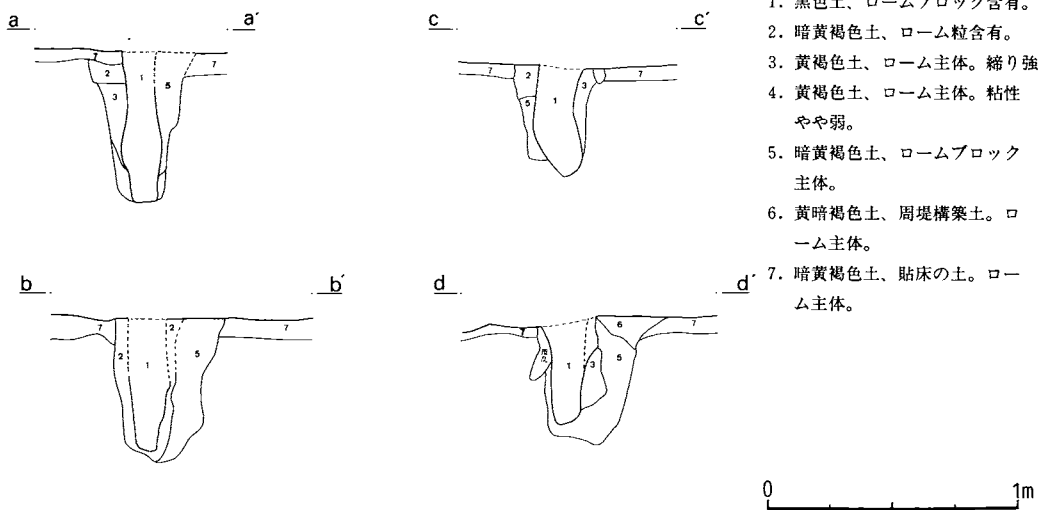


第 15 図 本村南遺跡 9 号住居跡炉実測図

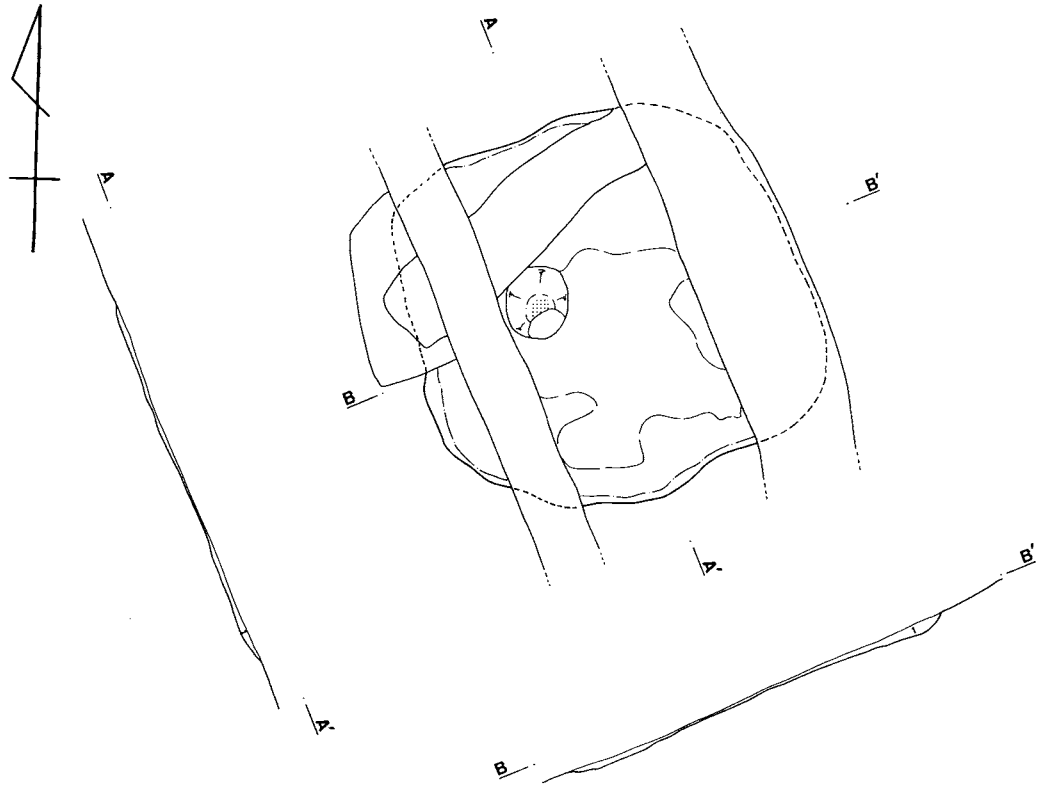




第 16 図 本村南遺跡 10 号住居跡実測図

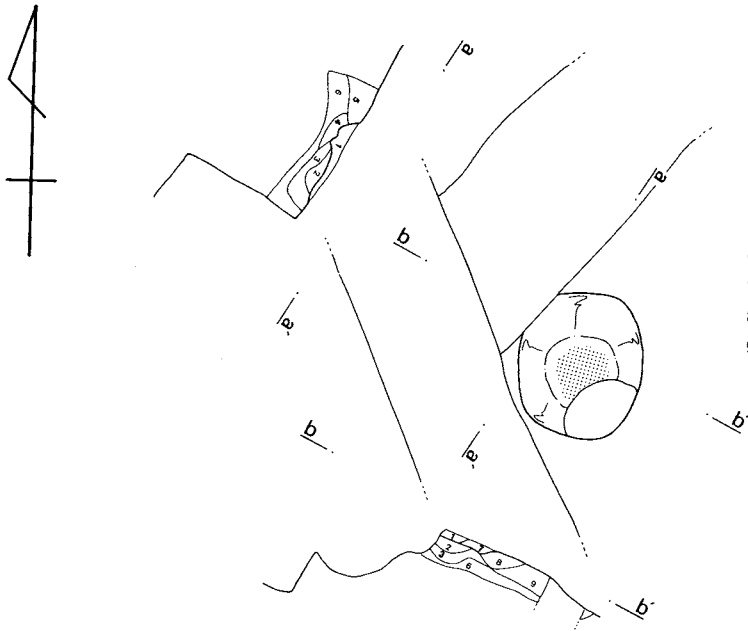


第 17 図 本村南遺跡 10 号住柱穴断面図



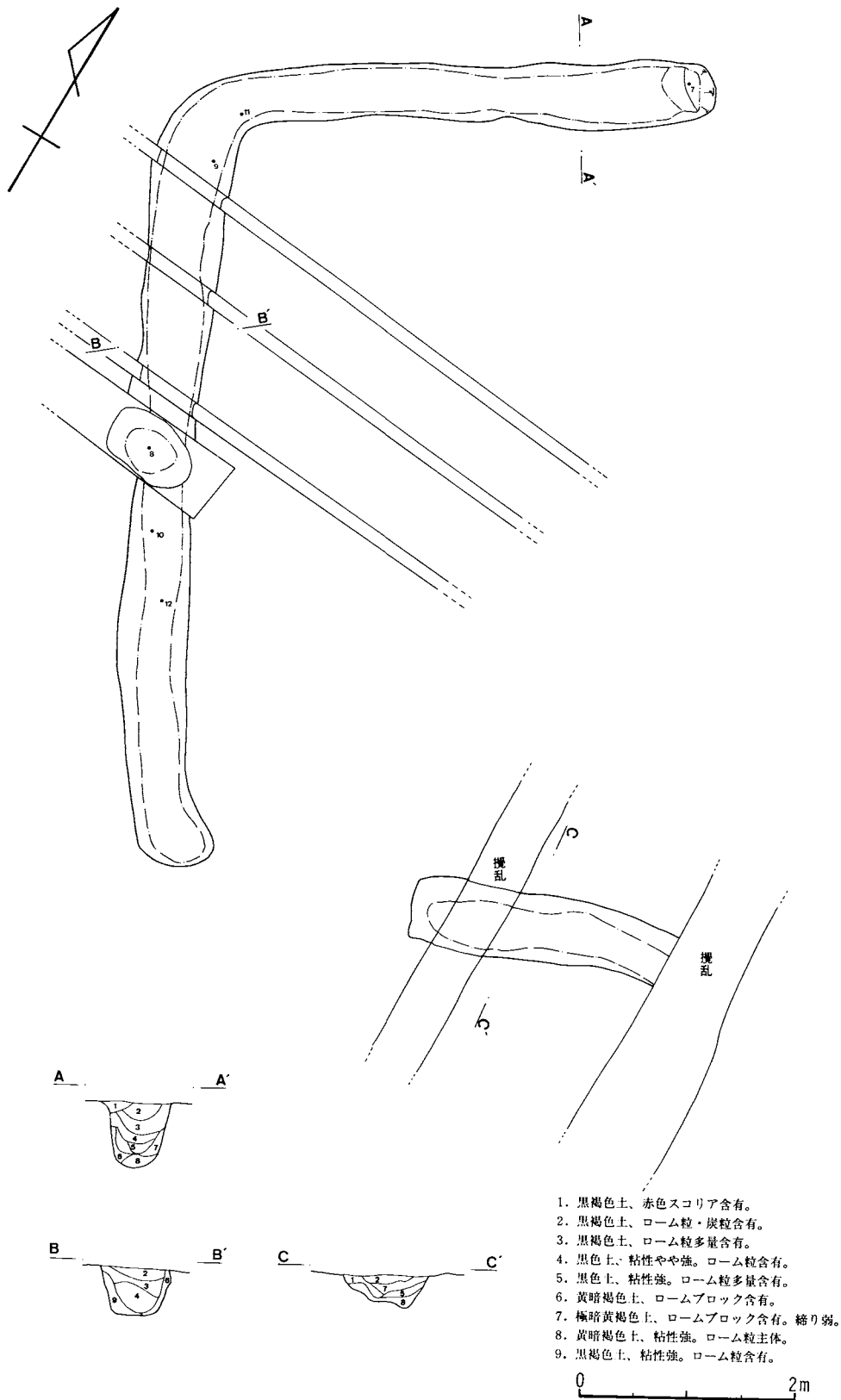
1. 暗褐色土、ローム粒・ロームブロック含有。

第 18 図 本村南遺跡 11 号住居跡実測図

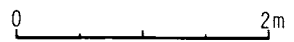
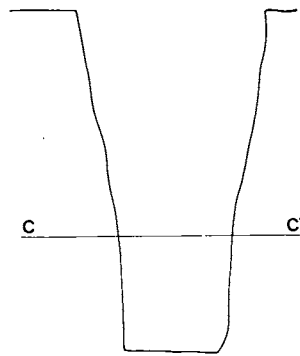
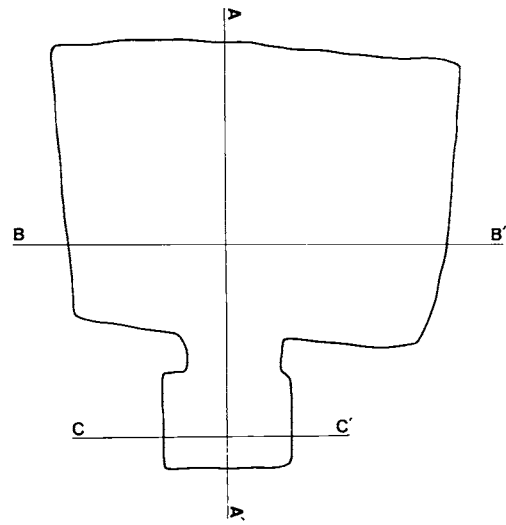
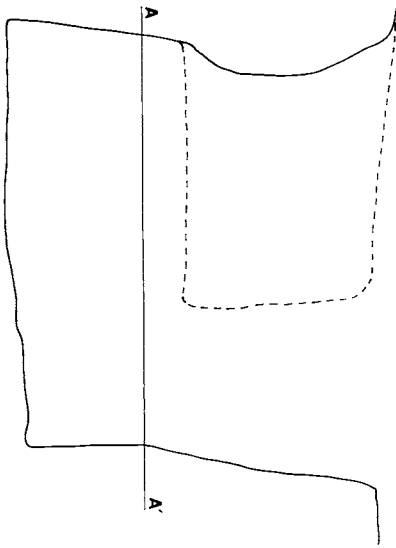
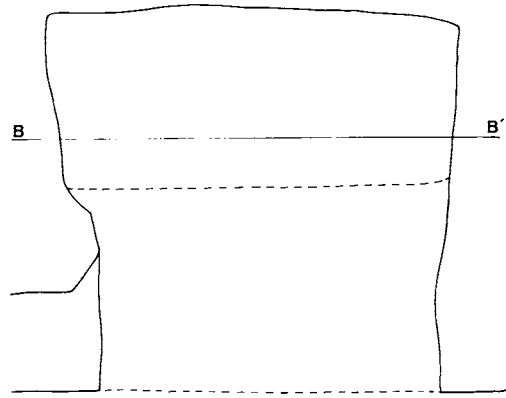
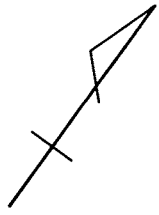


1. 暗褐色土、焼土ブロック多量含有。
2. 暗赤褐色土、ロームブロック主体。
3. 黄褐色土、ローム主体。
4. 暗黄褐色土、焼土ブロック含有。
5. 黒褐色土、焼土粒含有。
6. 黄褐色土、ローム主体。
7. 褐色土、ローム粒含有。
8. 暗赤褐色土、ローム粒多量含有。
9. 暗黄色褐色土、ローム粒少量含有。

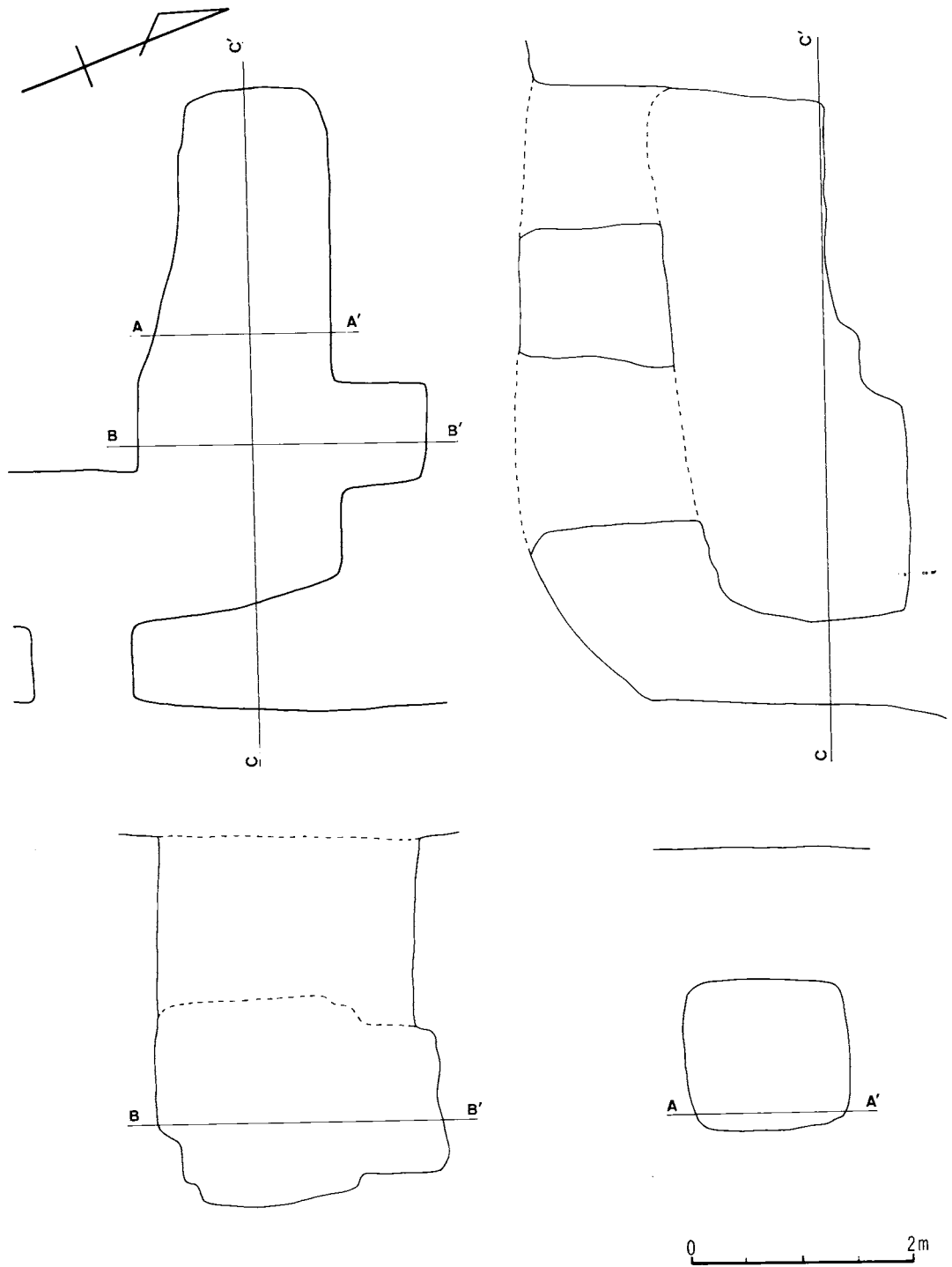
第 19 図 本村南遺跡 11 号住居跡炉実測図



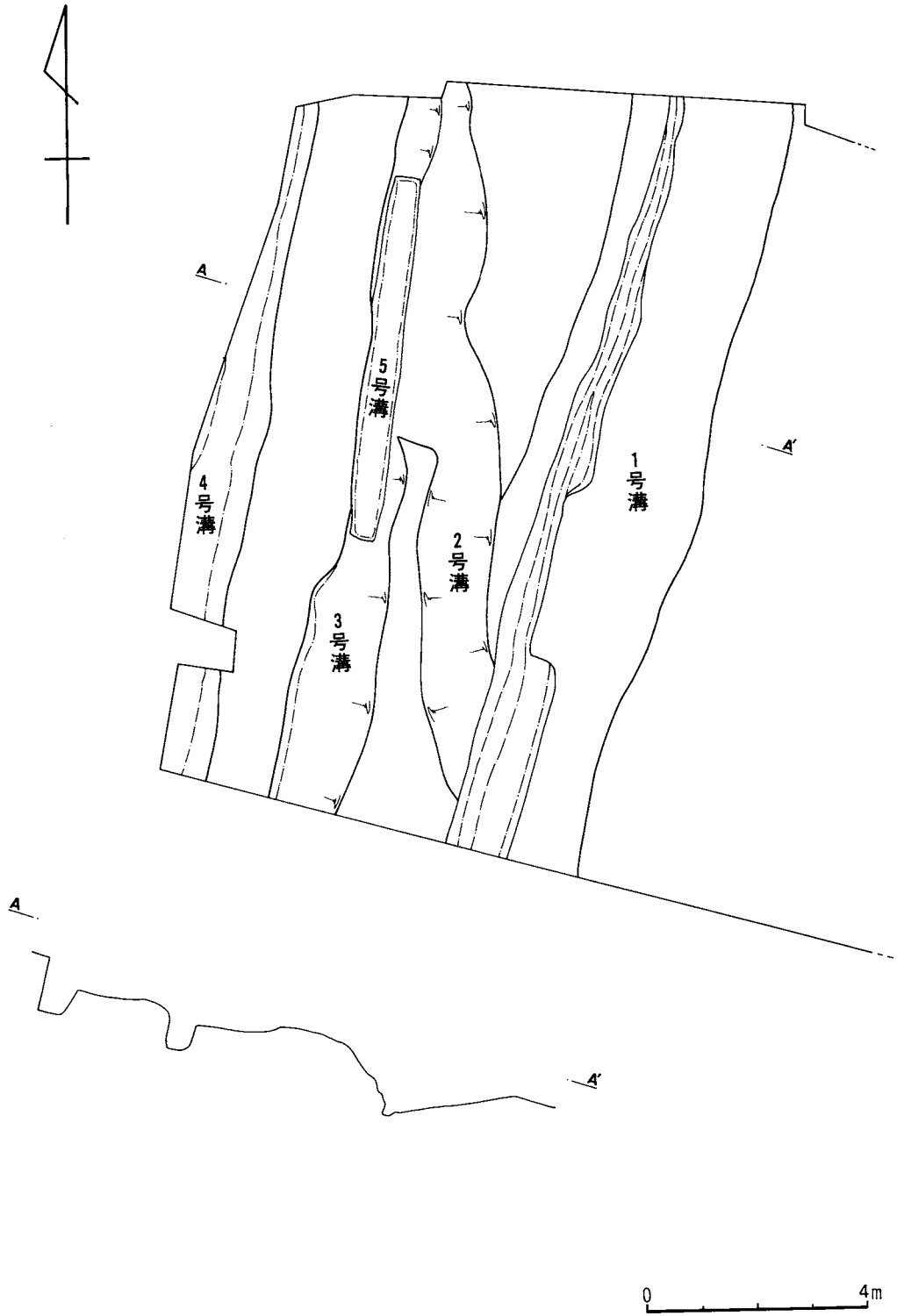
第 20 図 本村南遺跡 1 号方形周溝墓実測図



第 21 图 本村南遺跡 1 号地下式坑実測图



第 22 图 本村南遺跡 2 号地下式坑実測図



第 23 图 本村南遺跡溝状遺構実測図

## 2) 遺物

### a. 遺構内出土の遺物

#### 1. 台付甕形土器 3号住居跡出土

口縁部から胴部にかけて1/2残存。推定口径21.9cm・推定頸部径19.8cm・推定胴部最大径23cm 現存器高18.5cm・口縁部厚6mm・胴部厚7mmを測る。胴部上位に最大径をもつ。口縁部は緩やかに外反する。口唇部外面に刻目が施される。

整形は、内面において口縁部刷毛目を施した後「横撫で」、胴部はヘラ状工具による「撫で」が施される。外面は、口縁部刷毛目を施した後「横撫で」、胴部は横位の刷毛目が施される。

胎土は、粗砂を多量に含む。色調は黄褐色を呈す。外面胴部に一部吸炭。器面状態はやや良。

#### 2. 台付甕形土器 8号住居跡出土

口縁部から胴部にかけて残存する。口径21cm・頸部径18.2cm・胴部最大径20.2cm・現存器高20.4cm・口縁部厚5mm・胴部厚6mmを測る。口縁部に最大径をもつ。胴部は緩やかに脹らむ。口縁部はやや強く外反する。口唇部外面に刻目が施される。

整形は、内面において口縁部刷毛目を施した後、「横撫で」、胴部はヘラ状工具による横位の「撫で」を施す。外面は、口縁部に斜位の刷毛目・「横撫で」が施され、胴部下位に縦位の刷毛目が施される。

胎土は、粗砂・細砂を含む。色調は暗褐色を呈する。器面状態はやや良。

#### 3. 鉢形土器 8号住居跡出土

口縁部から底部にかけて1/3残存。推定口径26.4cm・推定頸部径24.2cm・推定胴部径27.6cm・推定底部径10cm・口縁部厚8mm・胴部厚7mm・底部厚7mm・器高22.1cmを測る。平底から広がりをもって立ちあがり、胴部中位に最大径をもつ。口縁部は緩やかに外反する。

整形は、内面において口縁部から胴部にかけて丁寧な「磨き」が施される。外面は胴部から口縁部にかけて横位の丁寧な「磨き」、口縁部上位には「横撫で」が施される。

胎土は、礫・粗砂・細砂を含む。色調はにぶい暗赤褐色を呈す。器面状態は良。

#### 4. 台付甕形土器 9号住居跡出土

脚台部1/2を残存する。推定裾部径9cm・脚台部厚7mmを測る。脚台部は直線的に開く。

整形は、内面において縦位の「撫で」が施される。外面は縦位の刷毛目が施される。

胎土は、細砂を少量含む。色調はにぶい黄褐色を呈す。器面状態はやや良。

#### 5. 台付甕形土器 10号住居跡出土

口縁部から胴部1/5を欠損する。口径17.6cm・頸部径15.1cm・胴部最大径16cm・裾径10.4cm・器高20.9cm・口縁部厚7mm・胴部厚8mm・脚台部厚6mmを測る。最大径を口縁部にもつ。脚台部はやや脹らみをもって開く。胴部は球状を呈し、口縁部は外反する。口唇部外面に刻目が施される。

整形は、内面において胴部はヘラ状工具による横位の「撫で」、口縁部は「横撫で」が施される。外面は、胴部および脚台部にヘラ状工具による「撫で」が施される。

胎土は、礫・粗砂・細砂を含む。色調はにぶい褐色を呈す。器面状態はやや不良。

#### 6. 台付甕形土器 10号住居跡出土

口縁部から胴部1/2を残存する。推定口径18cm・推定頸部径15.5cm・推定胴部最大径18.6cm・口縁部厚4mm・胴部厚5mmを測る。胴部中位に最大径をもつと思われる。胴部は球状を呈し、口縁部は緩やかに外反する。口唇部外面に刻目が施される。

整形は、内面において口縁部横位の刷毛目の後「横撫で」、胴部は、ヘラ状工具による「撫で」が施される。外面は口縁部斜位の刷毛目、胴部には横位・斜位の刷毛目が施される。

胎土は、粗砂を多量に含む。色調は、暗褐色を呈する。器面状態は良。

#### 7. 底部穿孔壺形土器 1号方形周溝墓出土

胴部から底部にかけて1/4を欠損する。口径17.6cm・頸部径9.6cm・胴部最大径28.2cm・底部径10.4cm・器高35.5cm・口縁部厚1cm～1.5cm・胴部厚1.1cm・底部厚1.8cmを測る。胴部に最大径をもつ。底部の穿孔は焼成後に施されている。平底より大きく開き、胴部は丸味を帯びる。頸部から口縁部にかけて緩やかに外反する。口縁部は折り返しの複合口縁である。

整形は、内面において口縁部に斜位（左下→右上）・横位の丁寧な「磨き」が施されている。外面は、口唇部と複合口縁部に単節斜縄文が施される。口縁部下から頸部にかけて丁寧な「磨き」。肩部には結節文をもつ単節斜縄文を5段に施している。文様帯の中部および口縁部には1cm程の円形朱文が計7個づつ施されている。胴部中位から下位にかけて横位・斜位の丁寧な「磨き」が施される。「磨き」が施されている部分には赤彩が施される。

胎土は、礫・粗砂・細砂を含む。色調は赤褐色を呈する。焼成は良好で全体が丁寧な造りである。器面状態は良好。

#### 8. 胴部穿孔壺形土器 1号方形周溝墓出土

口縁部を欠損するがほぼ完形である。頸部径9.6cm・胴部最大径25.1cm・底部径10cm・頸部厚6mm～8mm・胴部厚12mmを測る。平底からやや外反ぎみに立ちあがる。胴部は丸味を帯び、胴部中位に最大径をもつ。焼成後の穿孔が胴部中位に1ヶ所施される。頸部は外反しながら開く。

整形は、内面において口縁部に横位の「磨き」が施される。外面は、頸部に斜位（左上→右下）の刷毛目、胴部上位に縦位の「磨き」、胴部下位に横位（左→右）の刷毛目が施されている。

胎土は、礫・粗砂・細砂を含む。色調はにぶい赤橙色を呈す。器面状態はやや良。

当遺物は、以前、耕作中に出土したものであり、今回の調査により1号方形周溝墓の西溝に伴う遺物であると判明した。



### 9. 壺形土器 1号方形周溝墓出土

口唇部の一部を欠損するが、ほぼ完形である。口径 9.1 cm・頸部径 6.5 cm・胴部最大径 14 cm・底部径 8 cm・器高 19.1 cm・口縁部厚 4 mm～7 mm・胴部厚 5 mm～7 mm・底部厚 7 mm を測る。最大径を胴部にもつ。底部は平底である。胴部は球状を呈す。口縁部は僅かに外反する。

整形は、内面において口縁部へラ状工具による「撫で」の後「横撫で」を施す。外面は、胴部にへラ状工具による「削り」の後丁寧な「磨き」。口縁部は縦位（下→上）の刷毛目を施した後、「横撫で」が施される。

胎土は、粗砂・細砂を含む。色調はにぶい黄暗褐色を呈する。器面状態はやや良。

### 10. 埴形土器 1号方形周溝墓出土

口縁部 1/3 を欠損し底部は剝落する。推定口径 15.6 cm・頸部径 8.1 cm・胴部最大径 8.9 cm・推定底部径 5.5 cm・器高 10.2 cm・口縁部厚 5 mm・胴部厚 6 mm を測る。扁平に湾曲する胴部をもつ。頸部は直線的に開き、口縁部はやや脹らみをもつ。底部は平底である。

整形は、内面において口縁部は横位の丁寧な「磨き」が施される。外面は口縁部横位の「磨き」の後、胴部にかけて縦位の丁寧な「磨き」が施される。全体に「磨き」は緻密である。内外面ともに赤彩が施される。口縁部の一部に吸炭。

胎土は、礫・粗砂・細砂を含む。色調は暗赤褐色を呈す。器面状態は良。

### 11. 高环形土器 1号方形周溝墓出土

坏部および脚裾部を欠損する。現在器高 8.9 cm・脚部厚 7 mm を測る。脚部はやや外反して開く。

整形は、内面においてへラ状工具による縦位の「削り」が施される。外面は刷毛目を施した後、脚部上位に「磨き」を施す。

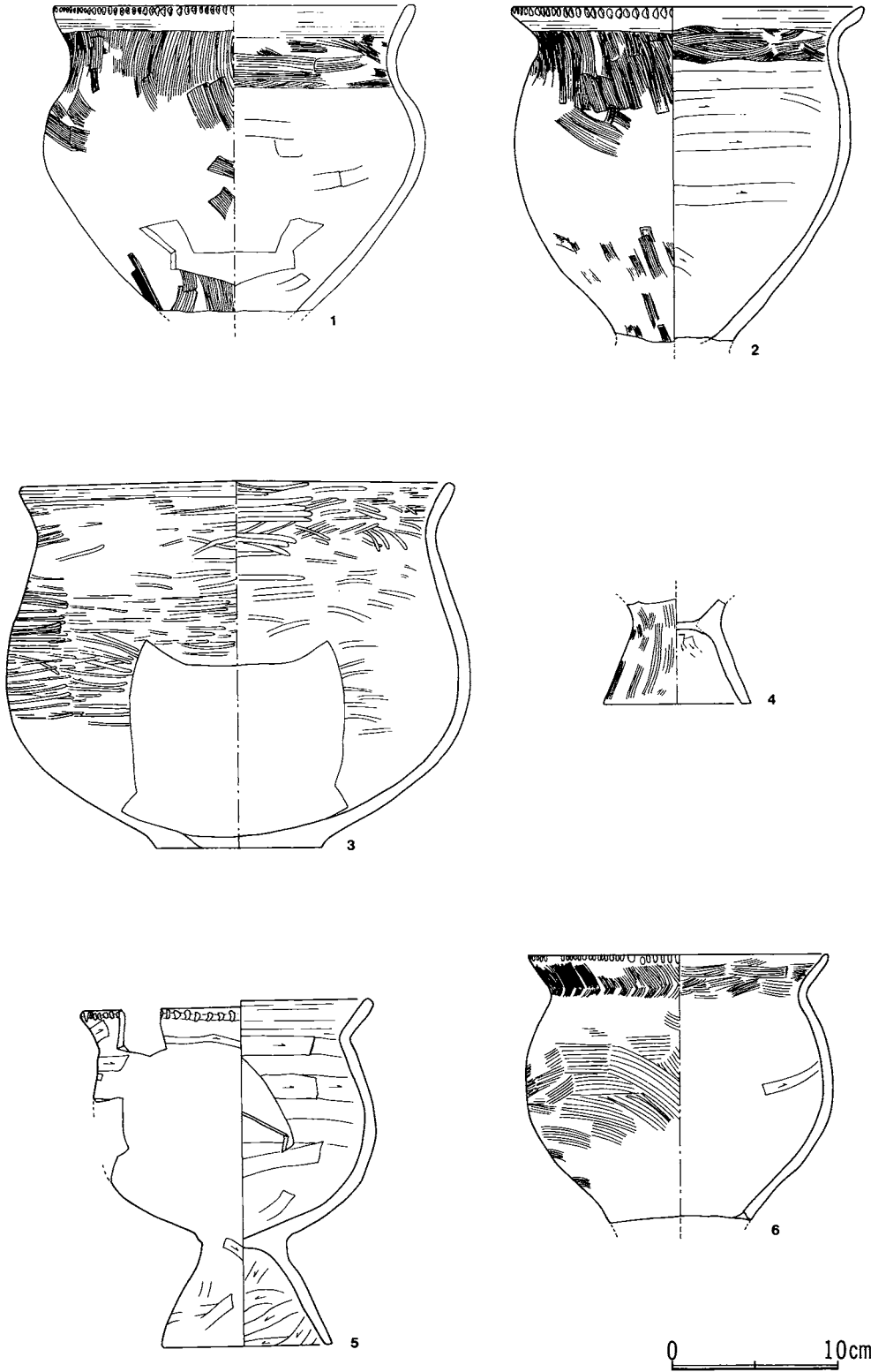
胎土は、粗砂・細砂を含む。外面に赤彩が施される。色調は、外面暗赤褐色、内面にぶい黄橙色を呈す。器面状態は良。

### 12. 台付甕形土器 1号方形周溝墓出土

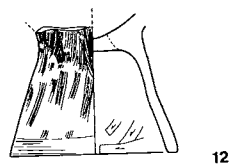
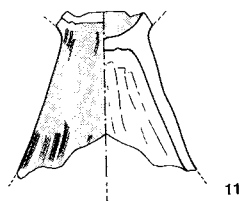
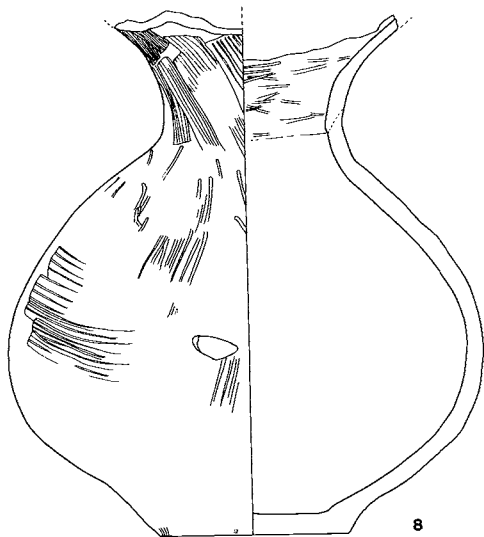
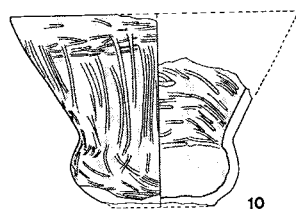
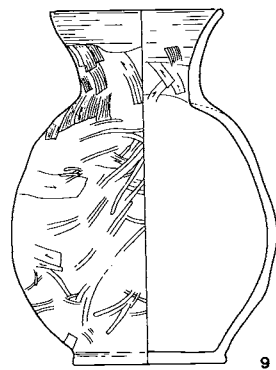
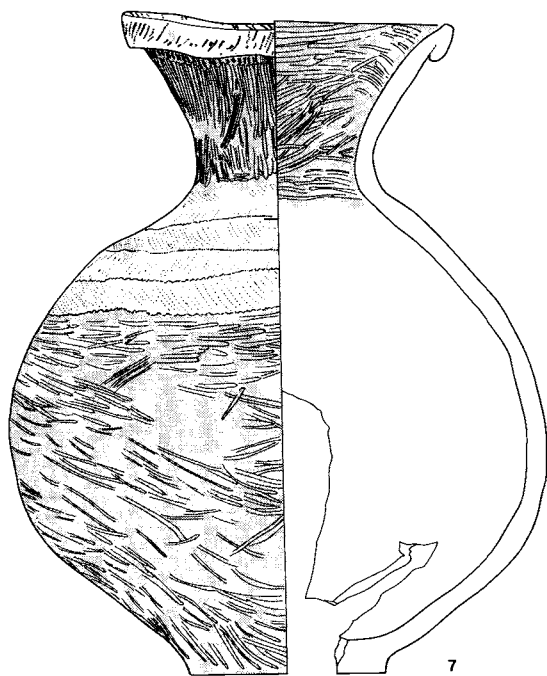
脚台部のみ残存する。裾部径 9.1 cm・現存器高 7.4 cm・脚台部厚 6 mm を測る。脚台部はやや直線的に開く。

整形は、内面において斜位（右上→左下）・横位（右→左）の順で、へラ状工具による「撫で」が施される。外面は、脚台部中位・上位の順で縦位の刷毛目が施され、裾部は「横撫で」が施される。

胎土は、粗砂を多量に、石英粒を少量含む。色調はにぶい黄褐色を呈す。器面状態は良。

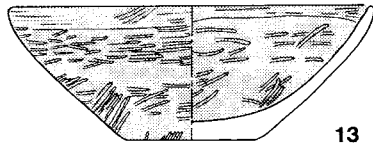


第 24 図 本村南遺跡出土遺物(1)

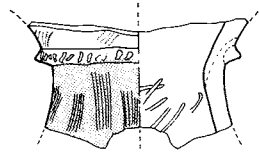


0 10 cm

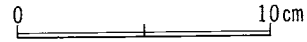
第 25 图 本村南遺跡出土遺物(2)



13



14



第 26 図 本村南遺跡出土遺物(3)

## b. 遺構外出土の土器

### 13. 碗形土器

口縁部から体部の 3/4 を欠損する。推定口径 14.5 cm・底部径 5.2 cm・器高 5.5 cm・口縁部厚 3 mm・体部厚 5 mm～6 mm・底部厚 7 mm～9 mm を測る。平底からやや内弯ぎみに立ちあがる。

整形は、内面において丁寧な「磨き」の後、口縁部「横撫で」が施される。外面は、体部の「磨き」・底部の「磨き」・口縁部「横撫で」の順に施される。内外面とも「磨き」は丹念に施される。

胎土は、粗砂を多量に含む。内外面ともに赤彩が施される。色調は暗赤褐色を呈する。器面状態は良好。

### 14. 壺形土器

壺形土器の頸部 1/3 を残存する。推定口径 6.8 cm・現存器高 5.2 cm・頸部厚 7 mm を測る。口縁部下に隆帯がめぐり、木口状工具による刻目が施される。口縁部には細縄文が施される。

整形は、内面において「磨き」が施される。外面は、隆帯の下より縦位の刷毛目が施される。

胎土は、粗砂を多量に含み、雲母片を少量含む。色調は、内面にぶい黄暗褐色、外面暗赤褐色を呈す。外面「磨き」部分に赤彩が施される。

### 3) まとめ

本村南遺跡の5次にわたる調査は、部分的な発掘調査を行なってきたに過ぎないが、これまでに調査を実施してきた部分について、幾つか整理をしてみたい。

今回調査を行なったのは、5地点974m<sup>2</sup>で部分的かつ面積的にも僅かであるが、5次にわたる発掘調査の中で、集落の存続時期を大まかにつかむことができた。本遺跡は、かつて農作業中に弥生時代中期宮ノ台式土器がまとまって出土したことがあるが、今回の調査では同期の遺構は検出されなかった。今回調査された住居跡数は12軒を数え、その中では、弥生時代後期～古墳時代前期に位置づけられる住居跡が最も多く検出されている。また、最も古いとされる住居跡は3号住居跡で、弥生町期に位置すると思われる。逆に最も新しい住居跡は12号住居跡で国分期（9世紀後半）に位置づけることができる。以前に宮ノ台式土器の出土が確認されていることと、今回の調査結果の中で考えると、本遺跡は宮ノ台期に集落が形成され始め、弥生時代後期～古墳時代前期の集落が中心となる遺跡といえそうである。

本遺跡より検出された弥生時代の住居跡形態を見ると、大型・中型・小型の3種類に大別することが可能と思われる。大型住居跡（3号住）の炉には炉石が存在する。中片住居跡（5・7・9号住）の炉には火皿が存在する。小型住居跡の炉には、炉石も火皿も検出されていないことが確認されている。本遺跡は遺物の出土が少なく、住居跡の詳細な時期決定が難しいが、今後、遺物の検討周辺の同時期の遺跡との比較検討を加え、本遺跡における住居跡形態と炉形態の関係を明らかにしていきたい。

次に本遺跡の第5地点の発掘調査と並行して行なわれた遺跡範囲確認調査の結果を述べておく。本遺跡は、現在の地形を見ると東に柳瀬川、北に小さな開析谷を持つが、第5地点調査区の西側畑に、遺跡範囲確認のため、4本の試掘溝を入れた結果、遺跡の西側に埋没谷が存在することが確認された。埋土下部層には弥生時代土器片が包含され、本遺跡が機能していた時期には東・北・西の三方を自然の谷が囲んでいたと考えられた。この谷がどこまで入り込んでいくのか、今後明らかにしていく必要がある。

最後に、方形周溝墓の遺物出土状態について記しておく。方形周溝墓の周溝内より出土した遺物は、ほぼ完形なものを含めて4点検出されている。それらはすべてL字状を呈する北・西溝からの出土である。遺物の出土状態を個々に見ていくと、北溝の東端で検出された焼成後に底部を穿孔された壺形土器は、口縁部を斜め下に向け、上部より流れ込んだ状態で出土した。西溝より出土した小型の壺形土器は溝底部より若干浮いた状態で方台部寄りに横に倒れた状態で出土している。同じ西溝内より出土した堆形土器は、溝底部よりやや浮いた位置に口縁部を斜め上に向けた状態で出土した。また、胴部穿孔壺形土器の出土状況は不明であるが、出土地点は西溝の底部付近であることが確認されている。これらの出土状態を見ると、方形周溝墓の方台部に置かれたものが、溝が埋没する過程（比較的早い段階）において転落したものとなることができるであろう。本遺構からは、方台部上の遺物の配置関係については確認できなかった。

今回の報告は、時間的な制約もあり、発掘調査の事実報告にとどまった。今後、現資料の再検討を行ない遺跡の性格・位置づけなどを明確にしていきたい。

### 3. ふるいどやま 古井戸山遺跡の調査

古井戸山遺跡は、埼玉県入間郡三芳町大字竹間沢 1081 番地に存在する。本遺跡は、柳瀬川の左岸台地縁辺に位置し、柳瀬川に面する崖下には湧水源が点在している。また、調査地の崖線上には鎌倉街道と呼ばれる古道が走っており、以前より板石塔婆等の中世の遺物も確認されている地点である。今までの分布調査等の結果では、古井戸山遺跡の範囲は柳瀬川左岸台地上に約 30,000 m<sup>2</sup> の広がりをもつととされており、縄文時代早期から中世にかけての複合遺跡であると判断されている。

今回調査を行なった地点は、崖面より流出する湧水により谷戸地となっている部分である。調査は、崖面部分に行なわれる崖崩れ防止工事に先立つ記録保存調査として実施された。古井戸山遺跡の存在する柳瀬川左岸台地縁辺部は、埼玉県指定「ふるさと森」に指定されている地域であり、自然が非常に良く保存されている。そのため、今回の発掘調査においては、自然環境保護のため樹木の伐採を行わず、トレンチによる部分的な発掘調査とした。

調査は、昭和 62 年 2 月 24 日から昭和 62 年 3 月 25 日にかけて実施した。トレンチの設定は、樹木に影響のないように任意の設定とした。

遺物の取り扱いは、表土中の遺物は一括とした。実測可能・遺跡の時期決定可能遺物をトレンチ単位に実測・記録し、他は一括とした。

#### 1) 遺 構

##### a. 包含層

今回の調査により確認された包含層は、ローム層上面にあたる黒色の締り・粘性の共に弱い層である。層中には縄文時代早期から中世までの遺物が認められ、この包含層は崖上からの流れ込み・谷の埋土と思われる。

包含層の広がり、谷を挟んだ西側斜面において、台地肩部より標高 20 m 付近までに認められる。東側斜面においては台地肩部より標高 17 m 付近まで広がるものと思われる。西側斜面において標高 19 m 以下、東側斜面において標高 16 m 以下の部分は、表土層を剥ぐと粘土層・礫層となり、遺物の検出はなかった。

包含層中の遺物としては、縄文時代早期～後期の土器片、弥生時代中期後半の鉢形土器、平安期の坏、室町期の板石塔婆・陶器片、時期不明の焼礫多数が出土している。

## 2) 遺物

### a. 縄文時代

古井戸山遺跡の包含層から出土した縄文時代の主な遺物をここにあげておく。

#### 早期の土器（1～18）

1は胴部破片と思われる。施文は条間の広い原体Rを縦位に施す。色調は明褐色。内面調整は丁寧で、縄束による圧痕が認められる。稲荷原式に比定できよう。2は、口縁部破片である。口唇部は丸頭状を呈し直立する。内外面共に「横撫で」が施される。施文は縄束と思われる擦痕が横位に認められる。色調は黄褐色。稲荷原式に比定できよう。3は、口縁部破片である。口唇部においてやや肥厚し、緩く外反する。内外面共に良く研磨されている。色調は黄褐色。稲荷原式に比定できよう。4は、胴部上位の破片と思われる。施文は細沈線文による格子・平行沈線により構成される。器面状態は不良。色調は灰褐色を呈する。三戸式に比定されよう。5は、細沈線文を基本として上位より切出し状の綾杉文、3条の平行沈線文・列点文を繰り返して施文する。色調は黄褐色を呈し、胎土に石英粒を含む。三戸式に比定できよう。6は口縁部破片である。口唇部は大きく外反する。内外面共に丁寧な研磨が施される。色調は暗褐色を呈す。施文は口唇部下に3条の平行沈線文・綾杉様細沈線文が明確に施される。田戸下層式に比定できよう。7は、口縁部破片である。口唇部内削ぎの形態を呈し、縁に沿って細い綾杉文が施される。さらに、口唇肥厚部直下より、2条の細沈線間に1条の円形刺突文がめぐる。色調は暗褐色、三戸式に比定されよう。8～13は口縁部・胴部の破片である。いずれも器面を削ぎ取るような太沈線を断続的に施文する。8は口縁部破片である。口唇部直下より半截竹管による刺突、細太沈線文・2条の貝殻腹縁文が施文される。9は、沈線間に半截竹管文がめぐる。10は、半截竹管文・細沈線文・貝殻腹縁文が施文される。11は、沈線文が断続的に施される。12は、太沈線が縦位・斜位に施文され、13も同様の構成から成る。8～13は田戸下層式に比定されよう。14は、口縁部破片。口唇部に小突起を有し、平縁上に深い刻みが施される。外面は、弱い凹凸が認められ、貝殻条痕文と思われる圧痕が、僅かに認められる。色調は暗褐色。磨滅が激しい。田戸上層式に比定されよう。15は、外面に絡条体圧痕が認められる。内面は、条痕を不規則に施文する。色調は明褐色を呈する。野島式に類似するものと思われる。16、17は貝殻状痕文を施文する。内外面に凹凸がみられ、粗い条痕が施されている。胎土は植物繊維を含む。茅山下層式に比定されよう。

#### 前期の土器（19～21）

19は、単節LRの縄文、20は、RLの縄文を施す。胎土に植物繊維を含む。磨滅が著しい。花積下層式に比定できる。21は、原体RLの縄文を地文とし、粘土紐貼付による浮線文が2条めぐる。諸磯b式に比定できよう。

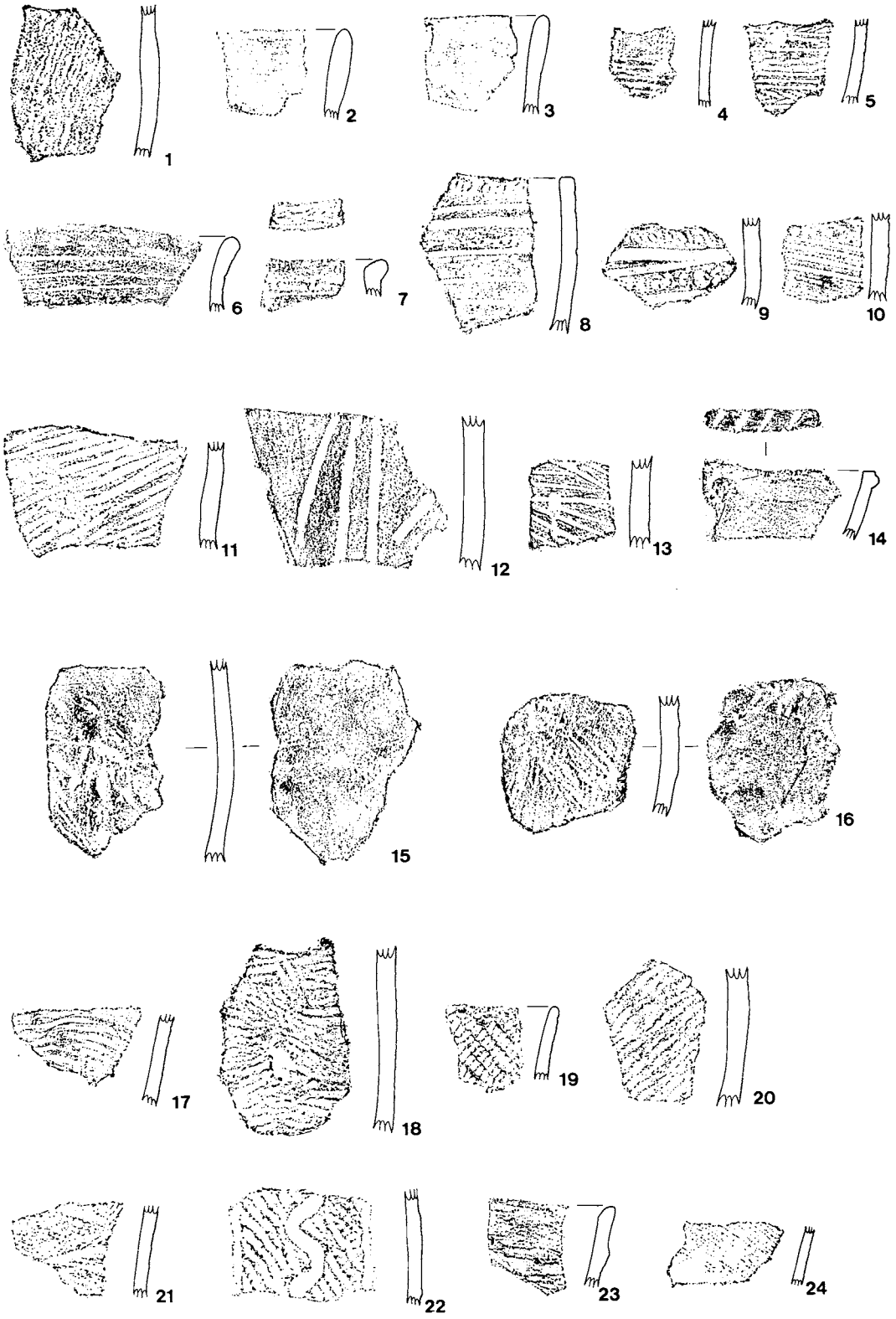
#### 中期の土器（22～24）

22は、胴部破片。沈線区画内に単節縄文LRが施され、中央にS字状沈線が垂下する。加曾利E III式に比定。23は口唇直下に1条の隆帯をもち、下部に縄文を施す。加曾利E III式に比定されよう。



第27図 古井戸山遺跡全測図





0 10cm

第 28 图 古井戸山遺跡出土遺物(1)

## b. 弥生時代

### 1. 甕形土器

口縁部から胴部にかけて 1/5 欠損。口径 17.7 cm・頸部径 13.6 cm・胴部径 15.9 cm・底部径 6.2 cm・現存する器高 24.3 cm・口径部厚 6 mm・胴部厚 7 mm を測る。最大径を口縁部にもつ。平底からやや外反ぎみに立ちあがり、胴下部にやや丸味を帯びる。口縁部はゆるやかに外反し、口縁部外側に刻目を施す。

整形は、内面において口縁部横位の刷毛目を施す。外面は、胴部上位にヘラ状工具による「撫で」が施される。口縁部は斜位（右上→左下）、胴部中位に斜位（左上→右下）、胴部下位に縦位の刷毛目が施される。

胎土は粗砂・細砂を含む。色調は外面暗赤褐色、内面暗褐色。胴部外面と口縁部内面は一部吸炭している。器面状態は良。弥生時代中期後葉の土器と思われる。

### 2. 台付甕形土器

甕部口縁部から胴部上位にかけて 1/4 残存。推定口径 18.2 cm・推定頸部径 16 cm・現存する器高 10 cm・口縁部厚 5 mm・胴部厚 7 mm を測る。口縁部はゆるやかに外反し、口縁部外側に刻目を施す。整形は内面において胴部ヘラ状工具による横位の「撫で」、口縁部横位の刷毛目を施す。外面は口縁部縦位・胴部上位横位・胴部中位斜位の順に刷毛目が施される。

胎土は粗砂・細砂を多量に含む。色調は暗褐色。外面と口縁部内面は吸炭している。器面状態はやや良。

### 3. 台付甕形土器

口縁部から胴部上位にかけて 1/4 残存。推定口径 17.7 cm・推定頸部径 16.2 cm・推定胴部径 20 cm・口縁部厚 7 mm・胴部厚 8 mm、現存する器高 15.5 cm を測る。胴部中位に最大径をもつと考えられる。胴部は球状、口縁部は緩やかに外反し、口縁部外側に刻目を施す。

整形は、内面において口縁部に斜位・胴部中位に横位・斜位の刷毛目が施される。

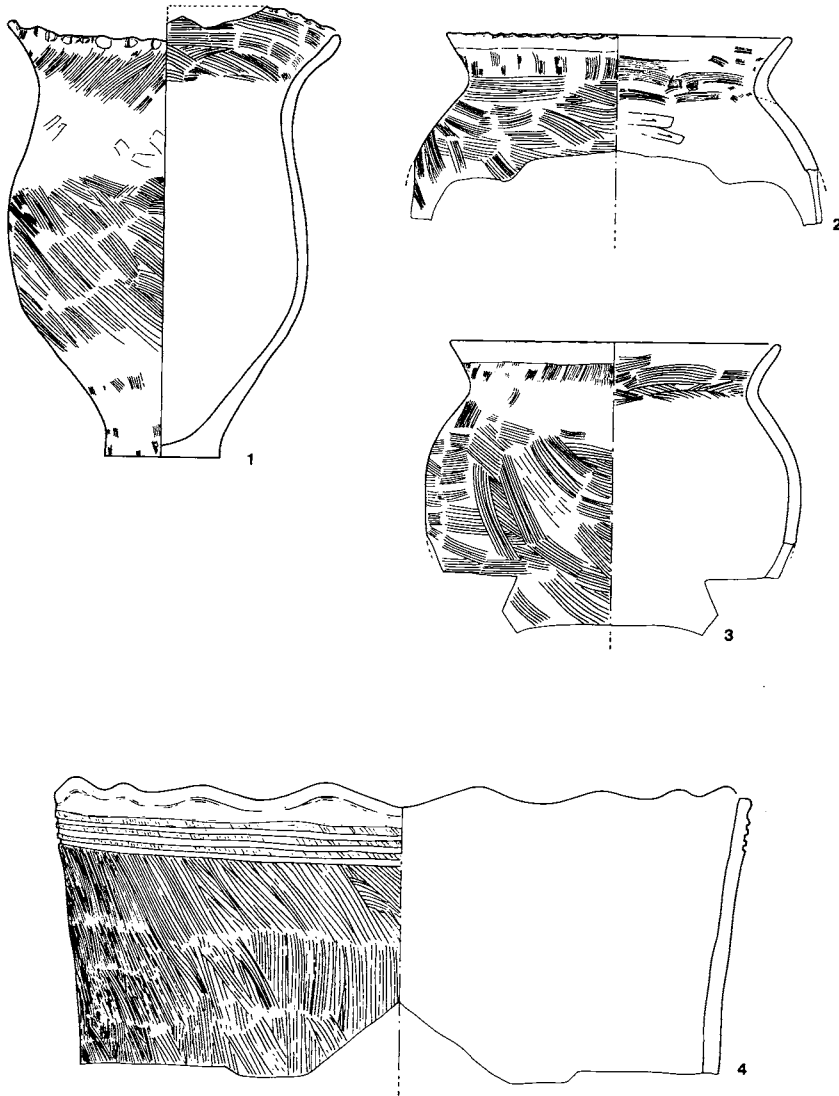
胎土は粗砂・細砂を多量に含む。色調は暗褐色。胴部外面の一部は吸炭している。器面状態は良。

### 4. 深鉢形土器

口縁部から胴部上位にかけて 3/4 を残存する。推定口径 35.6 cm、現存器高 14.6 cm、口縁部厚 7 mm、胴部厚 8 mm を測る。最大径を口縁部にもつものと思われる。胴部から口縁部にかけてうっすらと外反する。波状口縁を呈する。口唇部に削出しの隆帯をもつ。

整形は、内面においてヘラ状工具による丁寧な「撫で」が施される。外面は、口縁部刷毛目を施した後、ヘラ状工具による「撫で」を施し、隆帯を造り出す。胴部は、斜位・縦位の刷毛目を施した後、口縁部と胴部の区画に 3 条の沈線が施される。

胎土は粗砂を多量に含み、石英粒・黒雲母片を含む。色調は、内外面共ににぶい黄暗褐色を呈する。胴部外面から口縁部にかけて一部吸炭。器面状態は良。



0 10cm

第 29 図 古井戸山遺跡出土遺物(2)

## c. 平安時代

### 5. 坏

陶器。口縁部から体部にかけて 1/4 欠損。口径 15.6 cm・底部径 8 cm・器高 6.5 cm・口縁部厚 4 mm・体部厚 5 mm・底部厚 6 mm を測る。

上げ底よりやや角度をもって立ちあがり、口縁部屈曲後やや外反する口唇部をもつ。整形は、左回転の轆轤を使用している。底部の切はなしは、回転糸切り技法である。

色調は灰白色、胎土は礫・粗砂・細砂と白色粒子を含む。

## d. 中世

### 6. 板石塔婆

題目板石塔婆である。塔頂部と体部及び基部を欠損する。現存長 40.2 cm・幅 12.3 cm・厚 2.3 cm を測る。二条線をもつが、額の造り出しはない。枠線をもつ。紀年銘は永正八年辛未（1511 年）。緑泥片岩製。

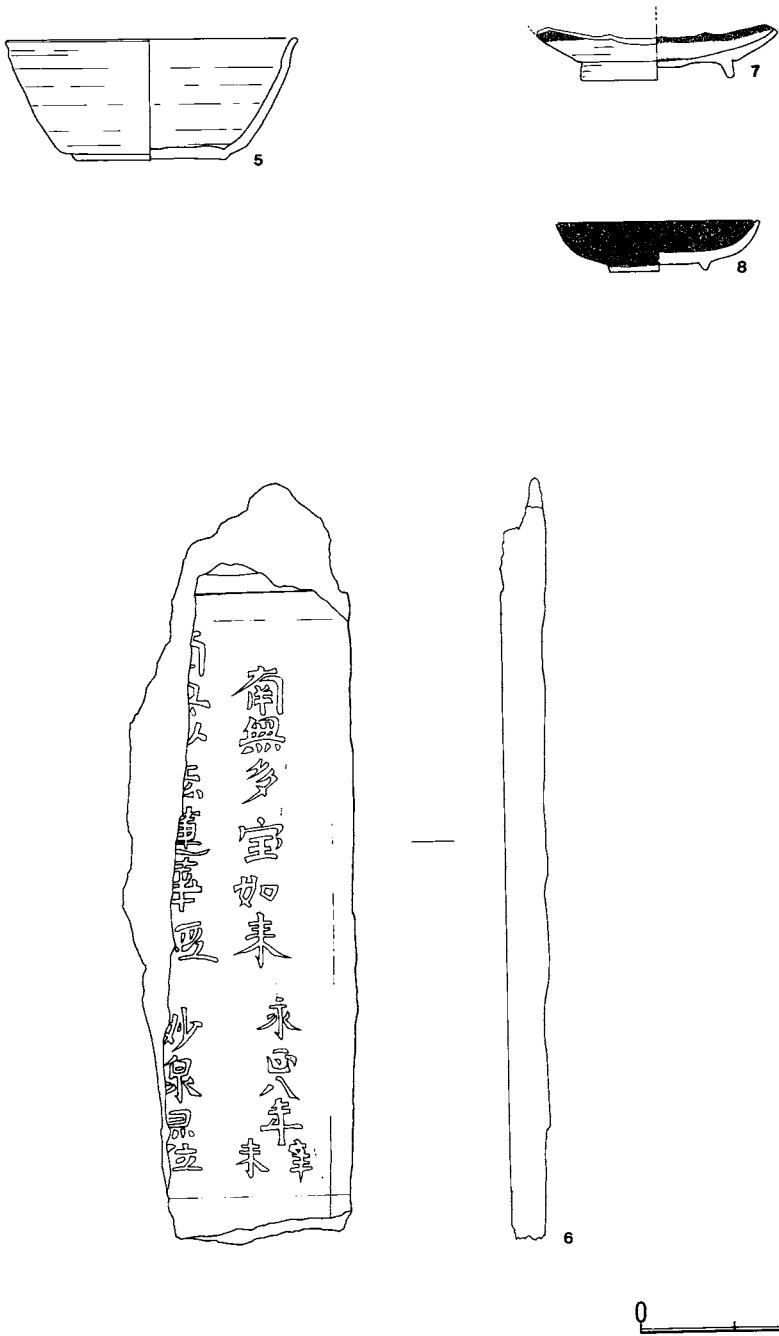
本遺跡では、今回の調査により他に板石塔婆片 4 点が出土している。以前に本遺跡内より板石塔婆が出土したことが伝えられていることから、他に存在する可能性が高い。これらの出土により町内に確認されている総数は破片を含めて 32 点となるが、題目板石塔婆の確認は初めてである。

### 7. 埴

陶器である。体部から底部の 1/3 を存在し、内面の底部から口縁部への移行は滑らかである。法量は、現存器高 2.9 cm・高台部径 8 cm を測り、器厚は体部 3 mm～4 mm・底部で 3 mm～4 mm を測る。整形は轆轤による「回転ヘラ削り」。高台部貼付け。胎土は良、色調は灰白色を呈す。釉は口縁部内外面、内面底部に施されオリーブ灰色を呈す。漬掛け。

### 8. 皿

陶器である。底部 1/2 と口縁部 1/5 を残存。内面の底部から口縁部への移行は角度をもつ。法量は、器高 2.7 cm・推定口径 11 cm を測る。器厚は口縁部 3 mm～4 mm・底部 8 mm～9 mm を測る。整形は轆轤による。高台部は三角形を呈する貼付高台。畳付部分は尖る。釉は、外面高台部きわ、内面は全面に施される。色調は緑灰白色を呈す。体部下位に釉葉の溜が部分的に見られる。内面底部に「とちん」による釉の剥落が認められる。



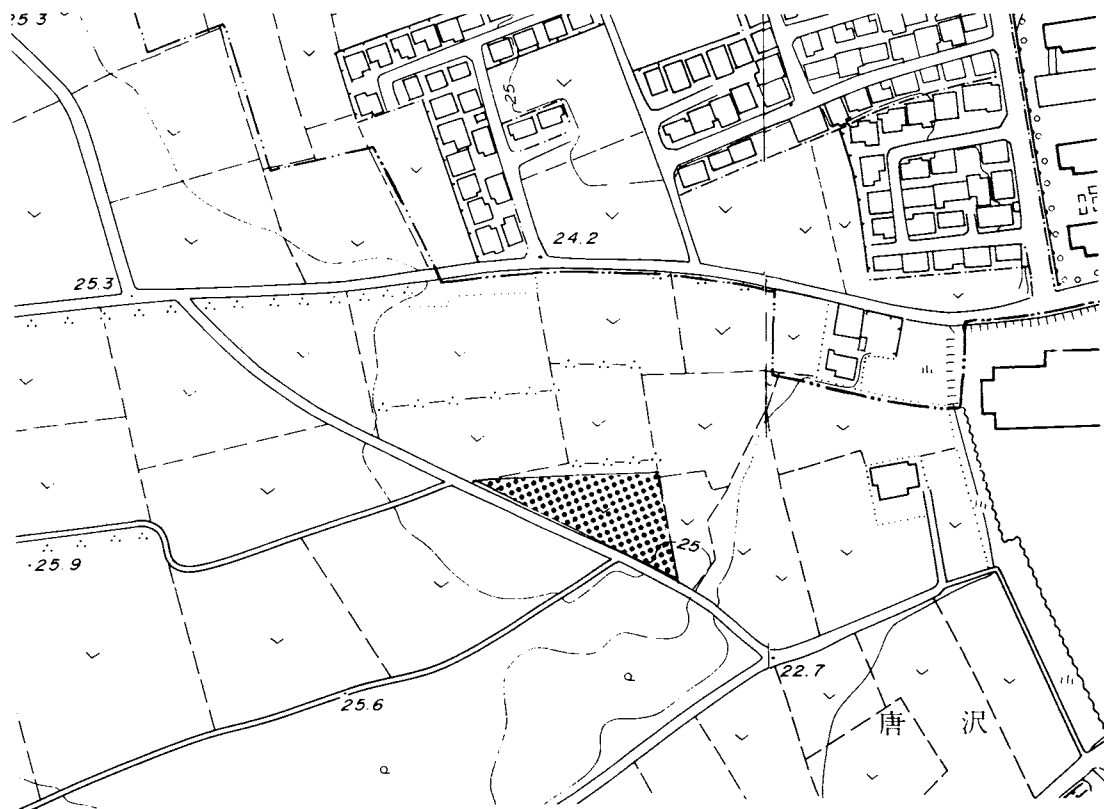
第 30 図 古井戸山遺跡出土遺物(3)

#### みよしからさわ 4. 三芳唐沢遺跡の調査

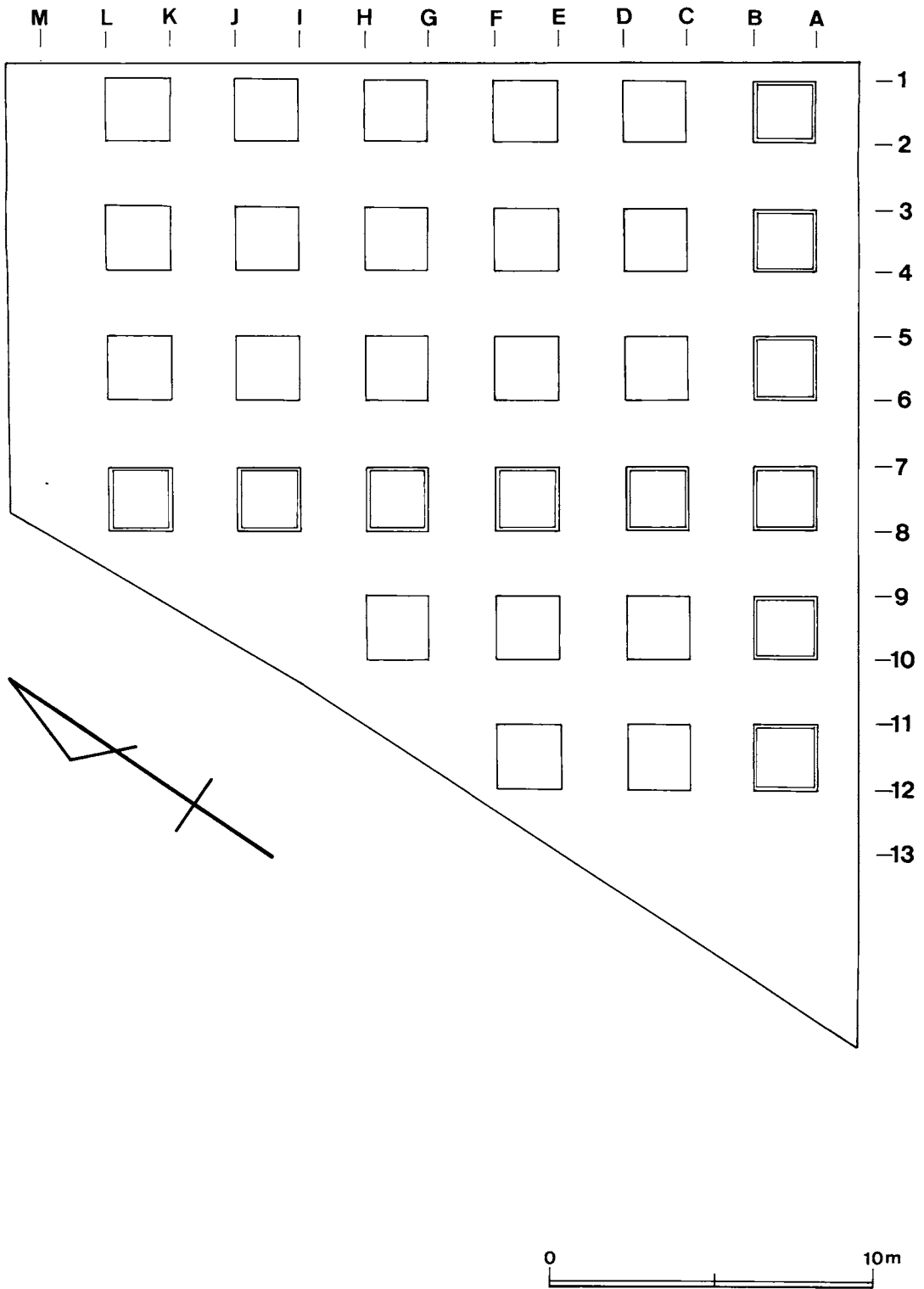
三芳唐沢遺跡は埼玉県入間郡三芳町大字藤久保字唐沢 430-7 番地に存在する。本遺跡の南側には、東方より台地に入り込むゆるやかな開析谷を持つ。この開析谷を挟んだ対岸には、旧石器時代、歴史時代の遺跡として知られる新開遺跡が存在する。本遺跡は分布調査・これまでの発掘調査の成果によれば、旧石器時代・縄文時代早期・中期の複合遺跡と判断されていた。

調査は、昭和 59 年 8 月 20 日～昭和 59 年 8 月 23 日にかけて行なわれた。調査区内に存在した境界杭を基準として 2 m×2 m のグリッドを設定し、縦横 1 ラインおきにグリッドを開掘していく方法をとった。表土層除去後ローム層上面の精査確認を行なったが、遺構の検出はなく I-5 グリッドより縄文時代中期と思われる土器片 1 点が出土したのみであった。旧石器時代の遺跡の存在の可能性があるため、A ラインおよび 7 ライン既掘グリッドを旧石器時代の調査対象とし立川ローム層第 2 黒色帯まで掘り下げたが、遺構・遺物ともに検出はなかった。

遺構の検出がなかったのは、本調査区が遺跡内での周辺部にあたるためと考えられる。



第 31 図 三芳唐沢遺跡調査地点



第 32 图 三芳唐沢遺跡全測図

きたがわ

## 5. 北側遺跡の調査

北側遺跡は、埼玉県入間郡三芳町大字竹間沢字北側 714-6, 8 番地に存在する。柳瀬川左岸台地上に位置し、約 300 m 南には本村北遺跡が存在している。

調査は、昭和 58 年 12 月 5 日～昭和 58 年 12 月 9 日にかけて行なわれた。調査区内に磁北を基準として 4 m×4 m のグリッドを設定し、その中に 2 m×2 m のトレンチを開掘していく方法をとった。検出された遺構は、時期不明の土坑 1 基・明治期の黄津穴（おつあな）1 基である。遺物の検出はなかった。

### 1) 遺構

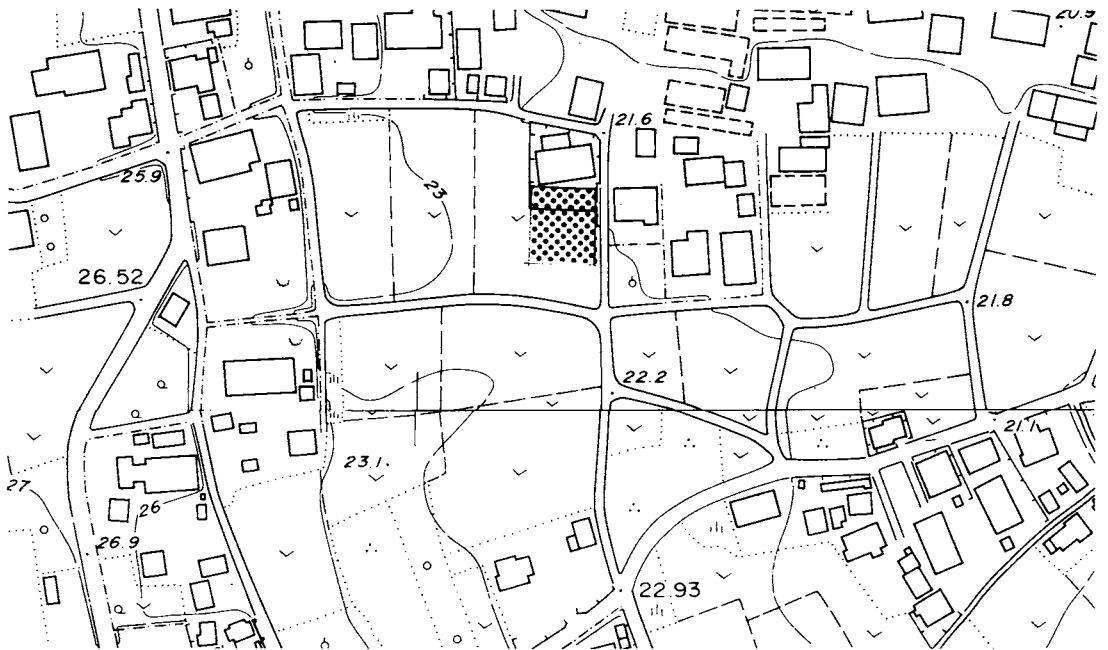
#### 1号土坑

本遺構は調査区の南側に位置する。平面形は長軸 1 m 90 cm 短軸 1 m 20 cm の長方形を呈する。長軸方向は N-50°-E である。平坦な底面から壁はやや角度をもって立ちあがる。覆土は黒色土単層である。出土遺物はなく、時期は不明である。

#### おつあな 黄津穴

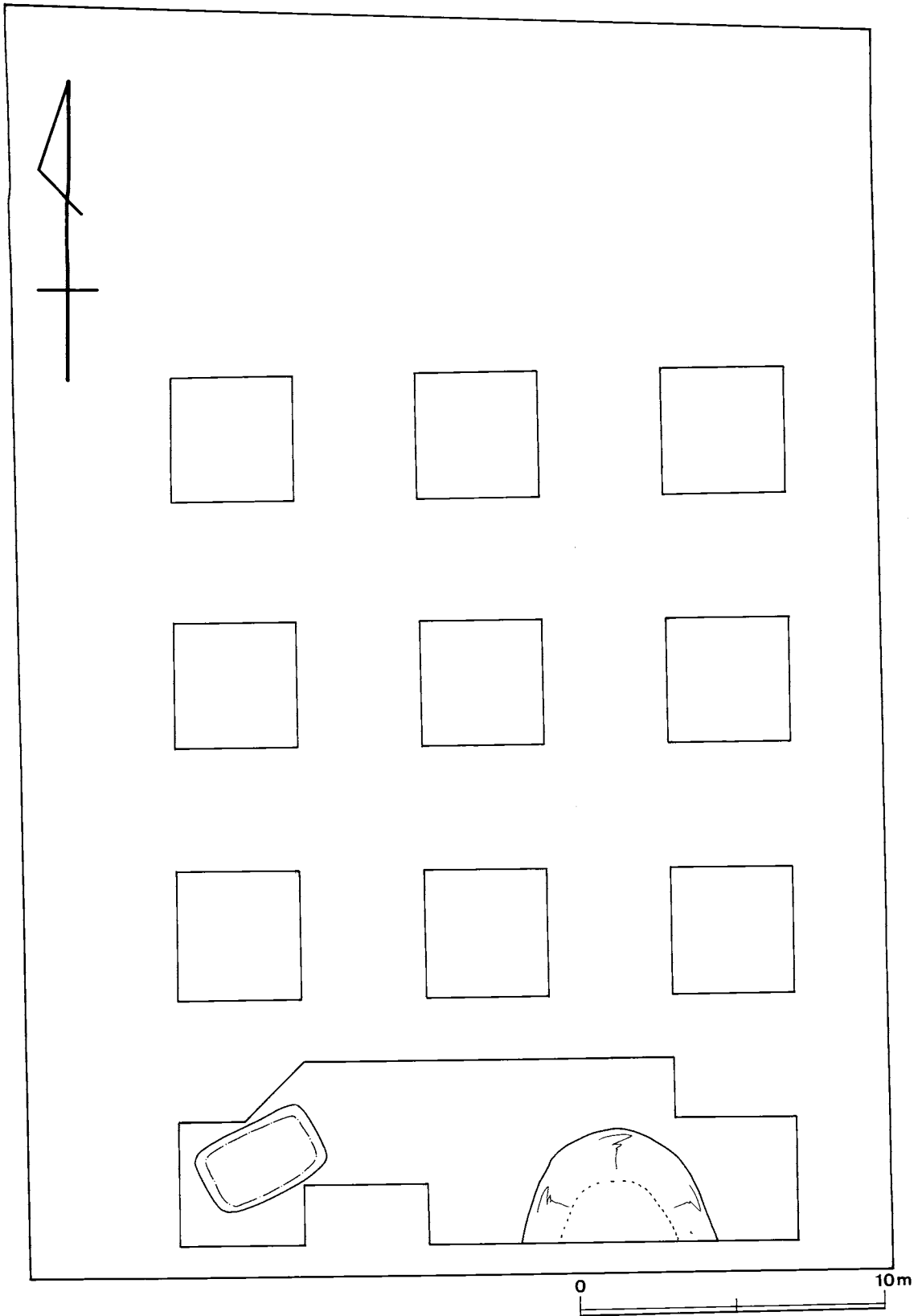
本遺構は調査区の南側に位置する。調査区外に延びており、落盤の危険があったために、黄津穴と判断された時点で調査を中止した。

黄津穴とは明治期の農業副業の土取り（壁土とする）遺構である。黄津穴の場合その殆どが、ローム層下の礫層近くまで掘り込まれている。



第 33 図 北側遺跡調査地点





第 34 図 北側遺跡全測図

ふじく ぼひがしだい に

## 6. 藤久保東 第二遺跡の調査

藤久保東第二遺跡は、埼玉県入間郡三芳町大字藤久保字東 724 番地付近にひろがる遺跡である。三芳町の東部には、そのさらに東方の台地縁辺部（富士見市）から数条の開析谷が入り込んでおり、そのうちの 1 条が本遺跡の北側に臨まれる。

この谷には江川という小河川が流れるが、その水源は本遺跡の東方の藤久保字俣埜にある。開析谷は水源から下流へは 6~8 m の比高差をもって深くなっていくが、水源より奥、すなわち遺跡方向には、徐々に緩やかになっていく。水源から約 250 m ほどで本遺跡の北側に開析谷は達するが、ここでの比高差は約 4 m になる。本遺跡から奥へはさらに緩やかになり、約 250 m 隔てた藤久保字東 815 番地付近で谷頭となる。

発掘調査は、2 度にわたっておこなわれている。第 1 次調査（A 地点）は昭和 58 年 6 月 6 日から 6 月 30 日に、第 2 次調査（B 地点）は昭和 59 年 6 月 4 日から 8 月 31 日に実施された。第 1 次調査（A 地点）は調査区域の北東部 825 m<sup>2</sup>、第 2 次調査（B 地点）は南西部 916.88 m<sup>2</sup> であった。

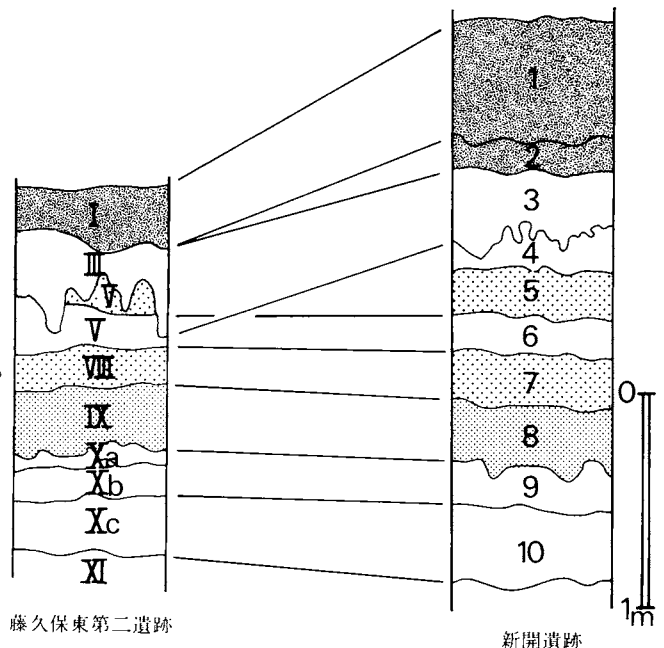
### 1) 遺 構

#### a. 層 位

第 35 図に示すように、立川ローム層の上部は耕作の深行や土の流出によって消滅しており、下部層（IV 層以下）からでないとは確認できない状況であった。

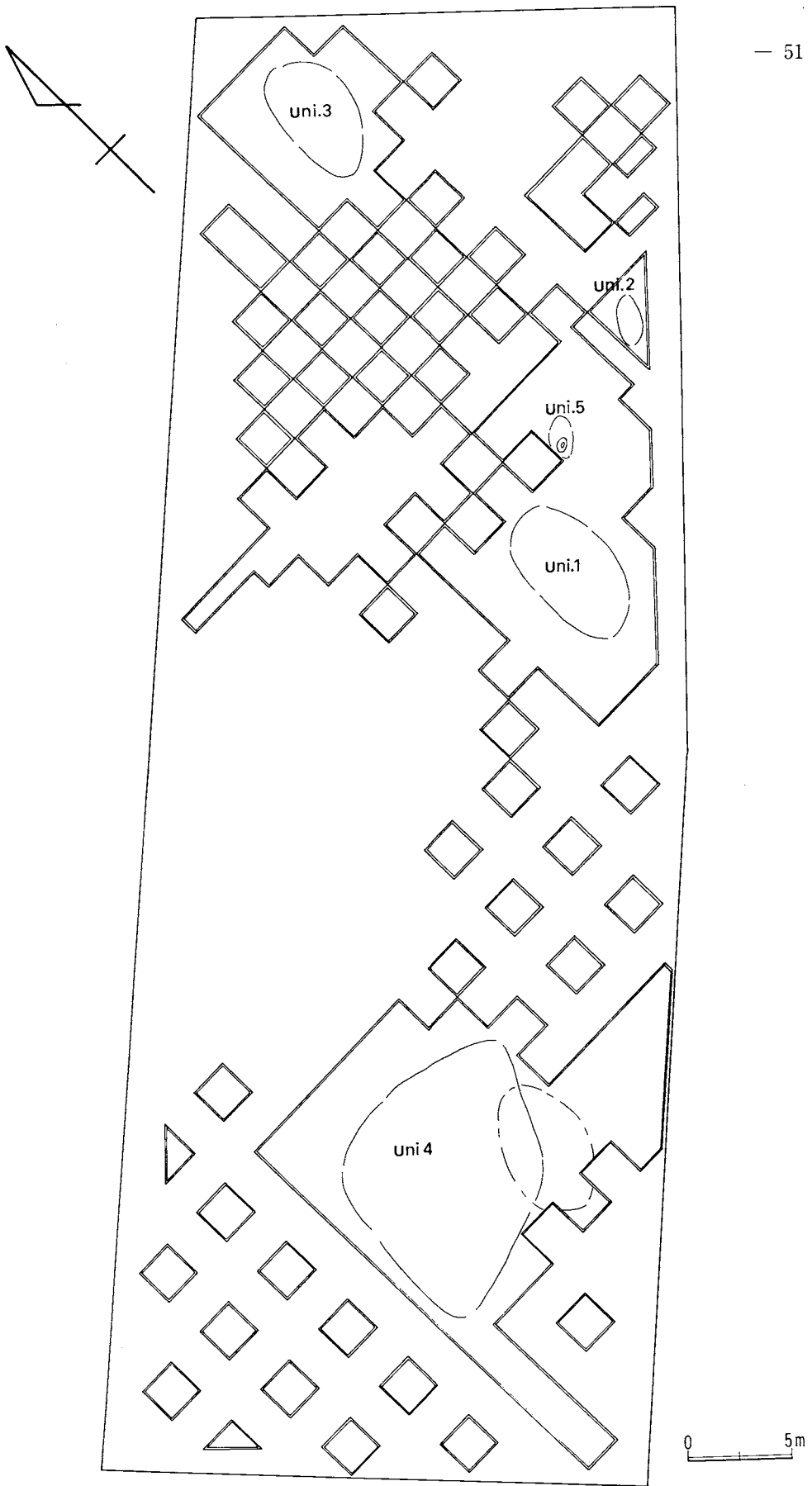
本遺跡の層位は、三芳町新開遺跡（松本他 1981）の層位と基本的には同様であるが、新開遺跡調査時の 9 層とした層位が細分された。ここではその細分の対比のため新開遺跡の土層図も図示しておく。

- I 層—耕作による攪乱土層。表土層。
- IV 層—ガラス質粒子を多く含む黄褐色ローム層。
- VII 層—暗黄褐色ローム層（B.B. II 上部）。
- IX 層—VII 層に比べ黒ずんだ暗黄褐色ローム層（B.B. II 下部）。
- X<sub>a</sub> 層—砂質分に富んだ黄褐色ローム層。
- X<sub>b</sub> 層—X<sub>c</sub> 層に比べ僅かに黒ずんだ赤褐色ローム層。
- X<sub>c</sub> 層—赤色粒子を多く混入する赤褐色ローム層。



第 35 図 藤久保東第二遺跡土層図

層位においても理解できるように、立川ローム層の上部までが滅失した状況になっており、



第 36 図 藤久保東第二遺跡全測図

表土層から破片等の出土はあったものの縄文、旧石器上層の遺構の検出は不可能であった。しかし、深すぎてなかなか調査のメスが入れられない立川ローム層下部の旧石器時代の遺構の調査が可能となり、いくつかの成果が得られた。

IV層から2ユニット、XI層から2ユニット（うち1ユニットには浅い土坑を伴うものと思われる）、IX層下部からX<sub>c</sub>層上部にかけて1ユニットが検出された。

#### ユニット1

41グリット 42グリットを中心にひろがるユニットで、東方の未調査区に広がる可能性が高い。確認された範囲で東西約6m、南北約6mを測る。ユニットの東南部の未調査区にかかる付近に約18.5×11cm、厚さ4.5cmの台石と推察される偏平な砂岩質河原石が出土しているが、このユニットはこれを中心にひろがるものと考えられる。

台石（1）の出土層はVI層下部、VII層の直上であり、他の石器はVI層からVII層上部にレベルを測った。石器は台石を含め13点検出している。

#### ユニット2

35グリットに1点の台石が検出された他には出土遺物はない。あるいは東南部の未調査区にひろがるものであろうか。台石は約15×9cm、厚さ4cmの砂岩質の偏平な河原石。VII層下部出土。

#### ユニット3

2グリット 5グリット 6グリット北に分布をみ、7m×5mに広がる。円礫1点（破碎礫3点）と使用痕のある石器1点、剝片、碎片11点で構成される。層位的にはIX層下部に中心をもつ。

#### ユニット4と炭化物ユニット

第2次調査区検出のユニットである。東西約10×南北約9mの拡がりをもっており、石器剝片等43点（うち1点は接合）が検出された。石器はIX層下部からX<sub>c</sub>層上部に分布をしていたが、特に集中したのはX<sub>a</sub>層からX<sub>b</sub>層の間に集中をみた。炭化物ユニットは東西約8×南北約5mの拡がりをもって、ユニット4の東南部側に重なるように確認された。炭化物片は微小で散在的であった。

#### ユニット5と土坑

ユニット1の北東側に隣接して検出されたユニットである。ユニットと言っても2点の石器と土坑が伴う可能性があるに過ぎない。石器は石核と剝片の2点のみで、いずれもIX層下部からの出土であった。この2点の石器出土レベルでは土坑プランの確認作業を実施し得なかったため、確証性はないが土坑との関連性は考慮してもよいものと思われる。

土坑はほぼ円形を呈し、約73×70cmを測る。深さは約10cmと浅くすり鉢状を呈する。覆土は暗褐色を呈し、第2黒色帯層（IX層）よりやや黒ずんでいる。

## 2) 遺 物

### 器種および材質

#### ユニット1

台石をのぞく他の石器は剝片と碎片である。その内訳は剝片5点碎片7点である。

石質を内訳けると、台石が砂岩、剥片のうちチャート2点、頁岩3点、安山岩1点である。碎片はチャート3点、安山岩3点、頁岩6点である。

ユニット2

台石は砂岩である。

ユニット3

円礫1点、破碎礫3点、焼破碎礫1点、剥片7点、碎片3点、使用痕のある石器1点の計15点で構成される。このうち剥片7点としたなかには頁岩製のものが6点含まれ、接合こそ不可能であるが、同一母岩と考えられる。

ユニット4

石器としてはナイフ形石器3点、加工痕のある石器2点、ハンマーストーン1点、そして局部磨製石斧（2片に割れて出土。石器組成表では2点とした。）1点が出土している。この他に安山岩製の石核1点とチャートの原石と思われる円礫が2点出土している。剥片は14点、碎片19点が出土している。

ユ ニ ツ ト	石 質	台 石	ナイフ形石器	スクレイパー	ハンマ	石斧	加工痕のある石器	使用痕のある石器	石器小計	剥片	碎片	剥片・碎片小計	石核	円礫	破碎礫	合計
ユ ニ ツ ト 1	砂岩B	1							1							1
	頁岩F									3	2	5				5
	安山岩F									1		1				1
	〃 G										3	3				3
	チャートJ									1	1	2				2
	〃 K									1	1	2				2
ユ ニ ツ ト 2	砂岩A	1							1							1
ユ ニ ツ ト 3	頁岩G									6	4	10				10
	砂質凝灰岩E						1	1	1							1
	安山岩F									1		1				1
	チャートL														1	1
	砂岩B														3	3
	砂岩C												1			1

ユ ニ ツ ト	石 質	台 石	ナイフ形石器	スクレイパー	ハン マ ー	石 斧	加工痕のある石器	使用痕のある石器	石器 小計	剥 片	碎 片	剥片・ 碎片小計	石 核	円 礫	破 碎 礫	合 計
ユ ニ ツ ト 4	砂質凝灰岩A					2			2		4	4				6
	"    B						1		1							1
	"    C									1		1				1
	"    D		1						1							1
	頁岩A									1		1				1
	"    B									2		2				2
	"    C									1		1				1
	"    D		1						1							1
	"    E										1	1				1
	チャートA									1	1	2				2
	"    B									1		1				1
	"    C									1	3	4				4
	"    D										1	1				1
	"    E						1		1		3	3				4
	"    F									1		1				1
	"    G		1						1	1		1				2
	"    H													1		1
	"    I													1		1
	安山岩A									2		2	1			3
	"    B									1						1
"    C										1					1	
"    D									1	1					2	
"    E										2					2	
砂岩A					1				1						1	
長石A											2	2			2	
ユ ニ ツ ト 5	頁岩A												1			1
	"    B									1		1				1

藤久保東第二遺跡ユニット1 出土石器一覧表

No.	器	種	石	質	器長 (mm)	器幅 (mm)	器厚 (mm)	重さ (g)	破 損	図版No.	注記No.
1	台	石	砂	岩	185.0	100.75	50.95	15.90			FH2
2	剥	片	頁	岩	63.2	41.2	12.0	34.3			FH2-42G-6
3	碎	片	頁	岩	22.9	20.05	3.85	1.3			FH2-42G-7
4	剥	片	頁	岩	46.8	23.85	9.6	7.3			FH2-42G-8
5	剥	片	チャート		27.9	21.2	6.1	3.8			FH2-42G-9
6	碎	片	安山岩		18.7	13.4	4.05	1.0			FH2-41G-21
7	碎	片	チャート		17.85	13.85	4.95	0.8			FH2-41G-22
8	碎	片	頁	岩	28.95	26.15	5.9	3.1			FH2-41G-25
9	碎	片	安山岩		18.9	18.4	3.45	0.9			FH2-41G-29
10	碎	片	頁	岩	31.1	33.7	8.9	4.3			FH2-41G-30
11	剥	片	頁	岩	30.75	25.45	7.7	5.4			FH2-41G-33
12	剥	片	チャート		36.05	22.9	8.95	6.1			FH2-41G-34
13	碎	片	安山岩		22.4	18.7	13.95	3.2			FH2-41G-51

藤久保東第二遺跡ユニット2 出土石器一覧表

No.	器	種	石	質	器長 (mm)	器幅 (mm)	器厚 (mm)	重さ (g)	破 損	図版No.	注記No.
	台	石	砂	岩	148.7	85.25	52.6	965.0			FH2-35G-1

藤久保東第二遺跡ユニット3 出土石器一覧表

No.	器	種	石	質	器長 (mm)	器幅 (mm)	器厚 (mm)	重さ (g)	破 損	図版No.	注記No.
1	剥	片	頁	岩	44.10	40.1	14.2	30.1			FH2-6G
2	使用痕のある石器		砂質凝灰岩		76.1	69.65	16.9	68.5			FH2-6G-2
3	剥	片	頁	岩	66.3	36.5	23.85	44.2			FH2-6G-3
4	碎	片	頁	岩	24.10	13.1	5.8	1.5			FH2-6G-6
5	碎	片	チャート		23.7	16.3	12.6	4.1			FH2-6G-8
6	剥	片	頁	岩	54.15	34.1	13.6	2.3			FH2-6G-9
7	碎	片	頁	岩	42.4	26.8	13.1	13.0			FH2-6G-10
8	剥	片	頁	岩	76.35	44.1	25.10	96.4			FH2-6G-12
9	破	碎	礫	砂岩	50.05	37.55	22.75	42.1			FH2-6G-13
10	破	碎	礫	砂岩	58.2	30.10	26.25	24.9			FH2-6G-14
11	円	礫	砂	岩	80.7	66.65	36.2	225.0			FH2-6G-15
12	剥	片	頁	岩	76.10	54.55	42.65	142.8			FH2-6G-18
13	剥	片	頁	岩	52.5	20.1	13.65	11.5			FH2-6G-19
14	破	碎	礫	砂岩	40.55	23.3	20.8	15.0			FH2-6G-22
15	碎	片	頁	岩	18.7	14.95	5.95	1.4			FH2-6G-23
16	剥	片	安山岩		48.6	31.9	13.9	18.8			FH2-6G-24

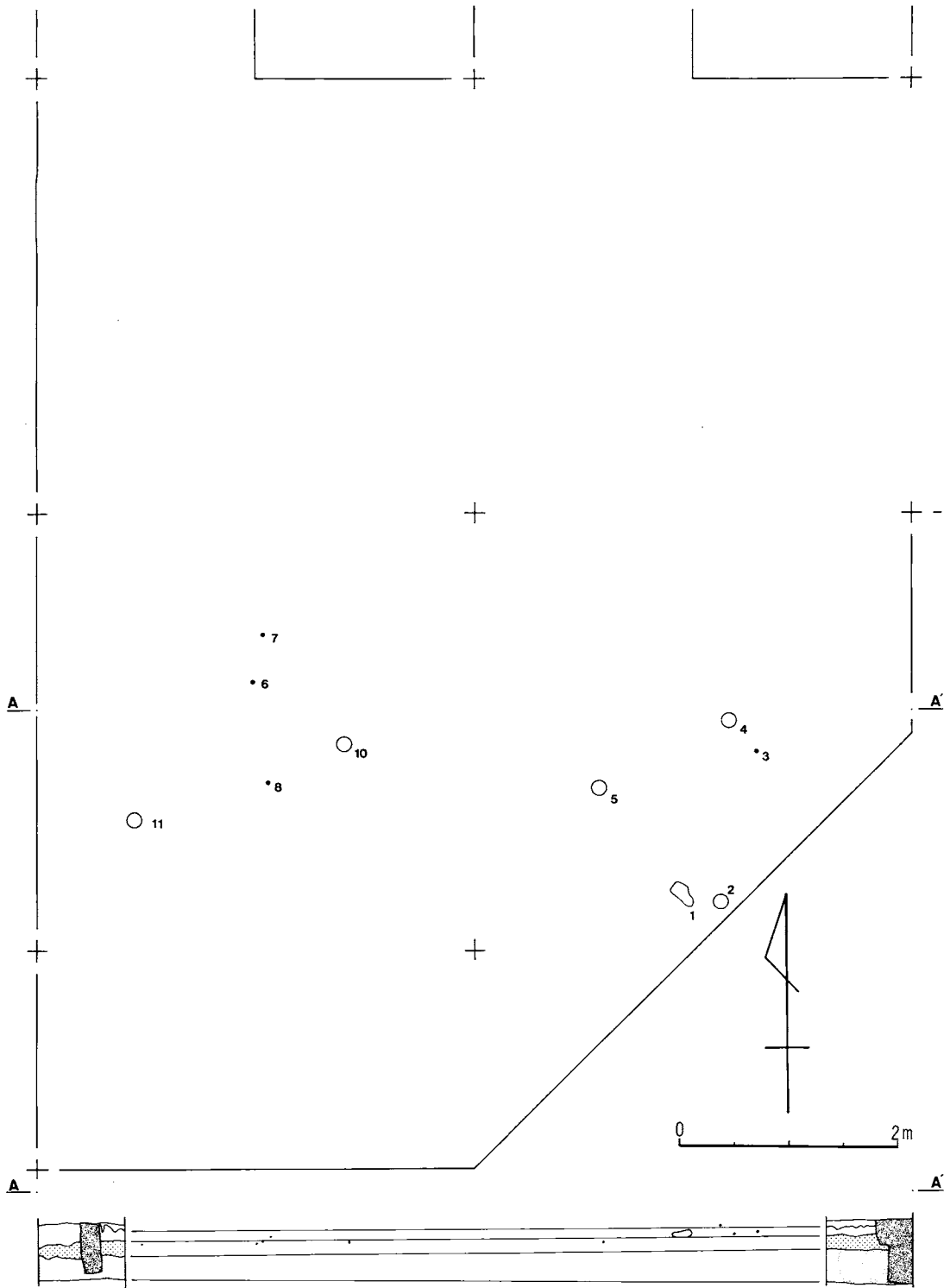
藤久保東第二遺跡ユニット4 出土石器一覧表

No.	器種	石質	器長 (mm)	器幅 (mm)	器厚 (mm)	重さ (g)	破損	図版No.	注記No.
1	局部磨製石斧	砂質凝灰岩	84.6	63.5	13.2	86.3	頭部折		FH2-48・FH2-229
2	ナイフ形石器	砂質凝灰岩	55.4	25.5	7.8	10.9			FH2-226
3	ナイフ形石器	チャート	38.5	25.0	9.3	0.9			
4	ナイフ形石器	頁岩	56.7	22.7	9.4	9.8			
5	加工痕のある石器	砂質凝灰岩	49.9	31.4	8.6	14.2	末端折		FH2-247
6	加工痕のある石器	チャート	31.7	15.8	7.1	3.0	頭部折		FH2-221
7	使用痕のある石器	頁岩	54.9	40.1	13.9	25.4			FH2-49
8	ハンマー	砂岩	110.5	83.9	58.3	765.0			FH2-12
9	ナイフ形石器	チャート	35.7	10.4	4.9	1.4			FH2-241
10	剥片	頁岩	45.1	36.2	12.0	16.2			FH2-220
11	剥片	チャート	18.6	17.1	5.2	1.2			FH2-26
12	剥片	チャート	31.2	27.7	8.8	4.9			FH2-15
13	砕片	頁岩	30.1	20.6	3.4	1.2			FH2-31
14	剥片	頁岩	70.8	38.1	7.2	18.0			FH2-9
15	砕片	チャート	14.4	14.0	8.1	2.2			FH2-10
16	円礫(原石?)	チャート	103.9	86.3	74.10	825.0			FH2-8
17	円礫(原石?)	チャート	115.0	88.9	63.4	1110.0			FH2-248
18	石核	安山岩	81.4	69.8	47.3	370.0			FH2-7
19	砕片	長石	18.9	15.8	3.4	0.9			FH2-5
20	砕片	砂質凝灰岩	26.9	12.3	8.5	2.2			FH2-27
21	剥片	頁岩	11.1	16.8	7.1	3.2			FH2-13
22	砕片	砂質凝灰岩	13.1	10.7	2.8	0.3			FH2-237
23	砕片	砂質凝灰岩	16.2	11.4	3.6	0.4			FH2-228
24	剥片	安山岩	47.2	46.6	20.7	50.0			FH2-227
25	砕片	砂質凝灰岩	22.8	11.9	2.8	0.4			FH2-234
26	砕片	チャート	28.3	13.3	4.3	1.2			FH2-235
27	砕片	安山岩	10.8	9.8	2.6	0.3			FH2-236
28	剥片	チャート	22.5	12.6	3.2	1.2			FH2-11
29	砕片	安山岩	22.2	21.8	5.7	2.2			FH2-2
30	剥片	砂質凝灰岩	59.5	30.2	13.8	17.5			FH2-50
31	剥片	安山岩	38.0	16.2	6.0	2.4			FH2-14
32	砕片	チャート	10.5	5.9	6.0	0.2			FH2-240
33	砕片	チャート	11.1	5.8	3.8	0.1			FH2-24
34	砕片	長石	22.7	7.4	4.2	0.7			FH2-25
35	剥片	チャート	32.2	4.9	6.1	2.9			FH2-3
36	剥片	チャート	34.9	18.1	8.8	4.8			FH2-238
37	砕片	安山岩	10.8	9.8	2.6	0.3			FH2-236
38	剥片	安山岩	62.1	32.1	30.1	63.4			FH2-224
39	砕片	安山岩	26.9	12.3	8.4	2.2			FH2-20
40	砕片	安山岩	33.3	17.8	7.9	3.6			FH2-21
41	砕片	チャート	22.4	18.7	13.9	3.2			FH2-51
42	剥片	チャート	49.4	31.9	16.15	24.2			FH2-1

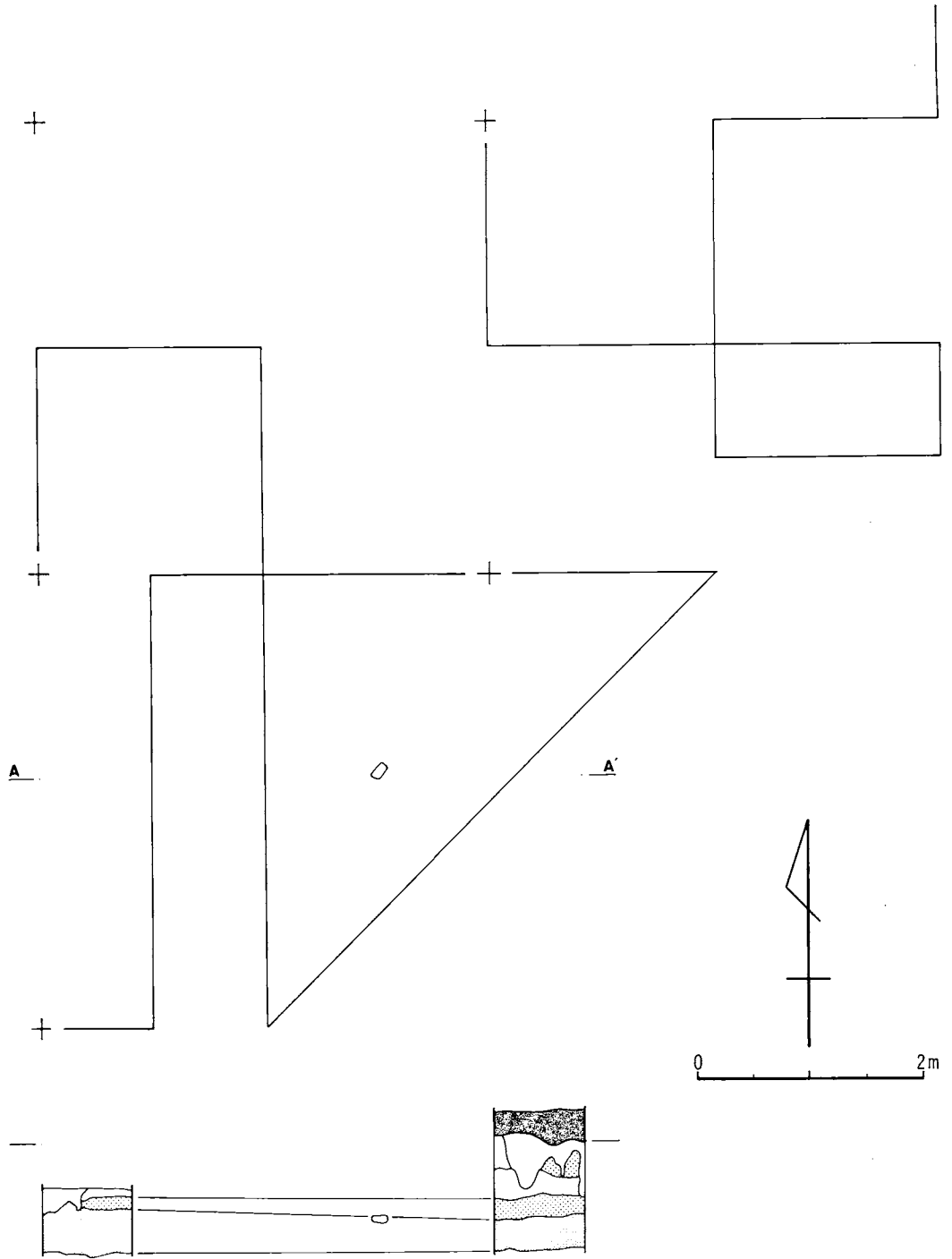
藤久保東第二遺跡ユニット5 出土石器一覧表

No.	器種	石質	器長 (mm)	器幅 (mm)	器厚 (mm)	重さ (g)	破損	図版No.	注記No.
	石核	頁岩	76.55	37.0	30.4	57.5			FH2-34-2
	剥片	チャート	62.95	32.35	18.2	30.1			FH2-34G-55

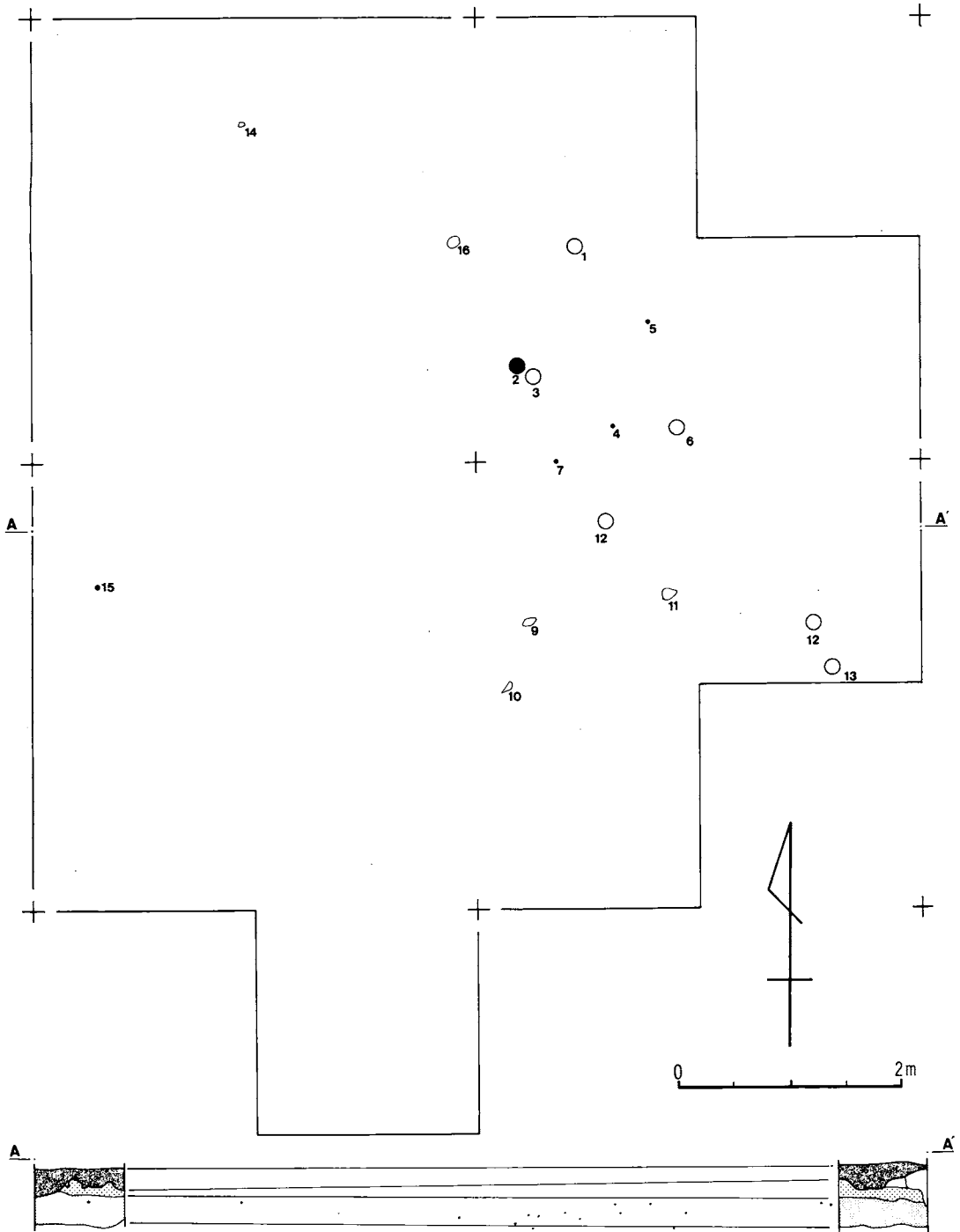




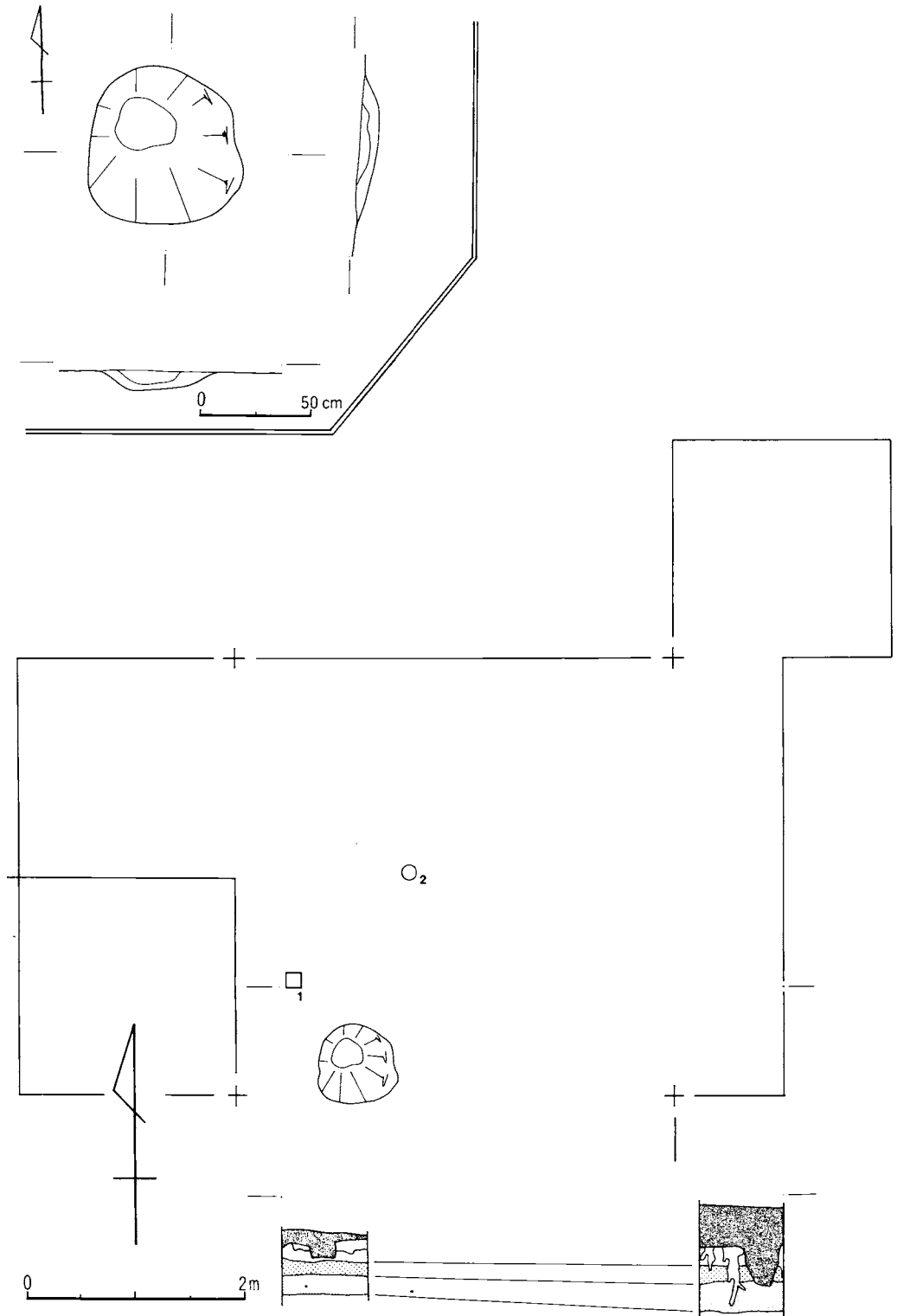
第 37 図 藤久保東第二遺跡ユニット 1 石器分布図



第 38 図 藤久保東第二遺跡ユニット 2 石器分布図



第 39 図 藤久保東第二遺跡ユニット 3 石器分布図



第 41 図 藤久保東第二遺跡ユニット 5 石器分布・土坑図

石器分布図凡例

- 石 斧
- ★ ナイフ形石器
- (加工痕・使用痕のある石器)
- ★ ハンマー
- 剥 片
- 碎 片
- 石 核



第 40 図 藤久保東第二遺跡ユニット 4 石器分布図

## 7. <sup>またの</sup> 俣埜遺跡D地点の調査

武蔵野台地北東縁辺部付近にはいくつもの開析谷が形成され、それらの谷には東方の沖積地に向かう小河川が流れるものがほとんどである。江川もまた、そのうちの1つであり、本遺跡付近を水源として流れ始める。水源はかつては豊富な水量で池を形成するほどであったが、現在はその付近は埋め立てられ住宅が林立する。湧水は住宅地を暗渠で流れ、富士見市境から地表に流れを見せはじめる。

俣埜遺跡は江川の水源を眺む南側の台地にひろがる。昭和52年以来4次の調査がおこなわれており、旧石器時代キャンプ跡、縄文時代早期炉穴、縄文時代中期集落、平安時代炭窯、土器生産関連遺構などが発見・発掘されている。今回ここで報告する俣埜遺跡D地点は第4次の調査地区であり、地番は三芳町大字藤久保東708-3番地にあたる。

旧石器時代礫群、縄文時代早期炉穴群が検出された。

### 1) 遺 構

#### a. 旧石器時代の遺構

##### 礫群（礫ユニット）

発掘区の南側約40m<sup>2</sup>を旧石器時代の遺構検出のための調査地区とした。その結果1ヶ所の礫群を検出した。礫群は約6×4mにひろがりを持ち、散在的に分布をみた。検出された層位はVI層を中心とするもので、上層のIII層から下層のIV層付近にまで散布した。礫のほとんどが焼けており、また破碎礫であった。

石器の検出は皆無であった。

##### 炭化物

礫群のほぼ中央に炭化物の集中する区域が認められた。そのひろがりは2.3×1.6mであった。層位的な分布のあり方は礫群に近似した。ひろがり、層位からして礫ユニットに伴うものと理解される。

#### b. 縄文時代の遺構

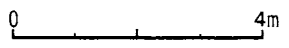
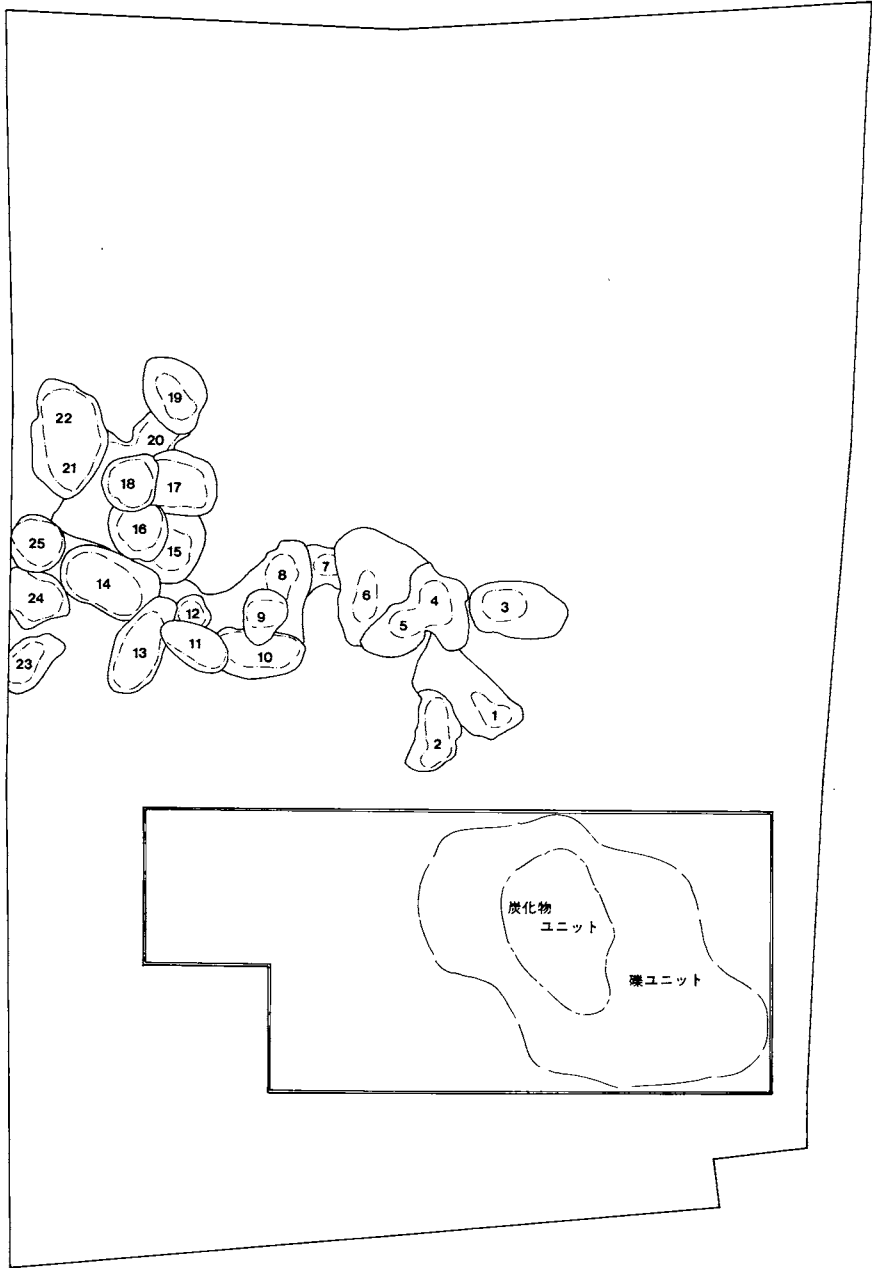
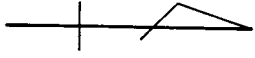
##### 炉穴1～25号

発掘区のほぼ中央区に25基の炉穴が検出された。25基の炉穴のうち、炉穴群の南側にあった23号炉穴と北側にあった3号炉穴のみが単独の検出であったほかは、すべて重複しており、平面形をみると、アメーバー状とでも言うような不整な形状を呈していた。各炉穴の計測値については別表に示す。

23基の炉穴について、セクション・平面形から新旧の関係を追うと次のような形成過程が捉えられた。古期から示す。

7号→1・6・8号→2・4・5・10・12・15号→9・14・17号→13・16・24号→11・18・19・21・22・25号という段階に分けることができる。

ただしそれぞれの段階が同時期併存であるかどうかは詳らかではない。



第 42 図 侯埜遺跡 D 地点全測図

表 俣埜遺跡D地点炉穴計測表

遺構名	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	備考
1号炉穴	1.86	0.82	0.26	土器片出土 図43-5
2号炉穴	1.29	0.69	0.35	
3号炉穴	1.51	0.88	0.17	
4号炉穴	1.46	1.00以上	0.32	
5号炉穴	1.10以上	0.78	0.29	土器片出土 図43-6
6号炉穴	1.79	1.19以上	0.21	
7号炉穴	0.56以上	0.57	0.22	
8号炉穴	2.00以上	0.81	0.31	
9号炉穴	0.86	0.71	0.65	
10号炉穴	12.60以上	0.72	0.36	
11号炉穴	12.00以上	0.67	0.28	
12号炉穴	0.40以上	0.56	0.35	
13号炉穴	16.50	0.79	0.45	
14号炉穴	16.61	0.91	0.41	
15号炉穴	11.50以上	0.59以上	0.32	
16号炉穴	0.92以上	0.74以上	0.45	
17号炉穴	19.20	12.00	0.32	
18号炉穴	0.96	0.92	0.35	
19号炉穴	13.20	0.94	0.35	
20号炉穴	0.55以上	0.61	0.30	
21号炉穴	0.60以上	0.65以上	0.28	
22号炉穴	0.95	1.82	0.45	
23号炉穴	1.02	1.82	0.29	土器片出土 図43-1~4
24号炉穴	1.01以上	0.92	0.30	
25号炉穴	0.91	0.95	0.33	

## 2) 遺物

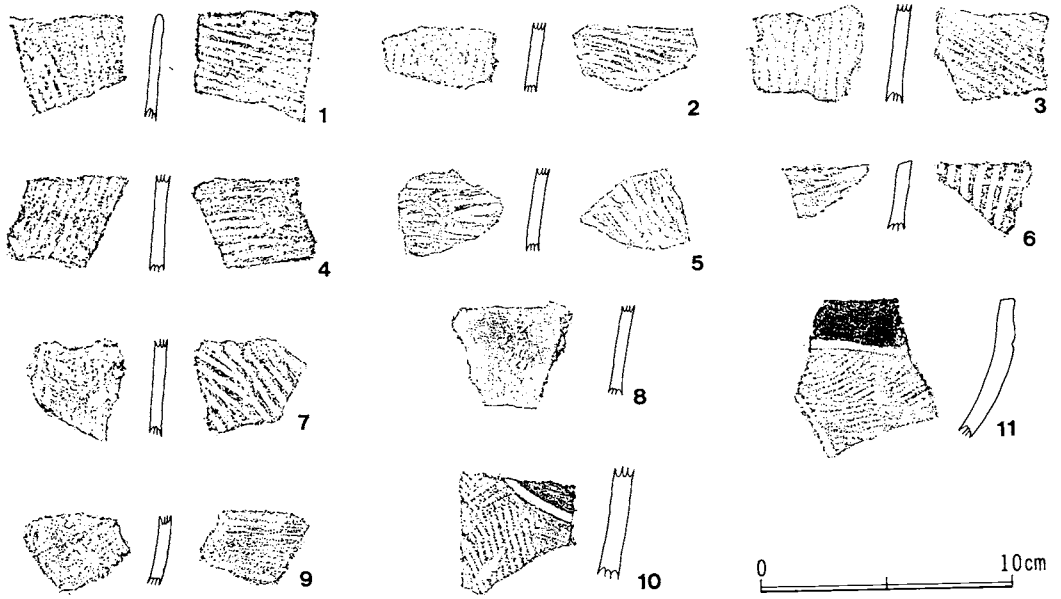
### a. 炉穴内出土の土器

1～6の土器片は炉穴出土の土器である。1～4は23号炉穴より出土。5は1号炉穴、6は5号炉穴より出土。いずれも貝殻条痕文を土器内外面に施こすものである。1～5は茅山下層式。6は鶴ヶ島台式。

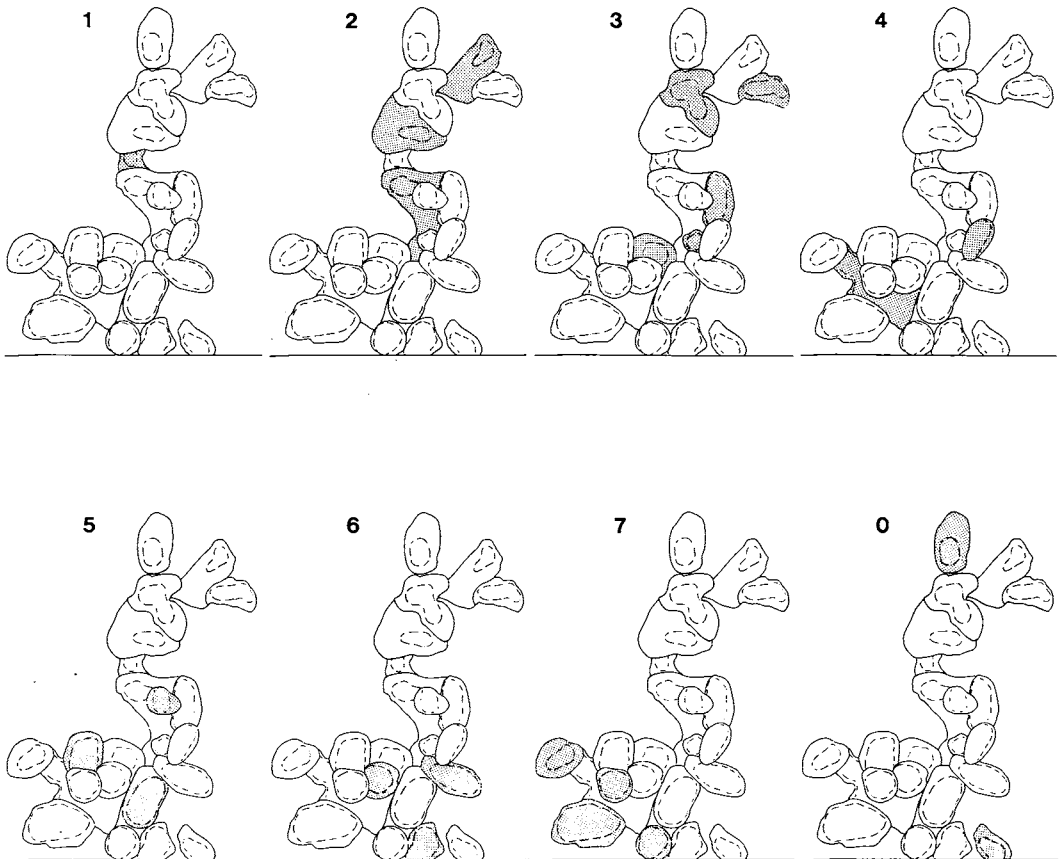
### b. 遺構外出土の土器

7～9の土器片は貝殻条痕文系土器で9が野島式、他は茅山下層式。  
10・11は縄文後期初頭称名寺式である。

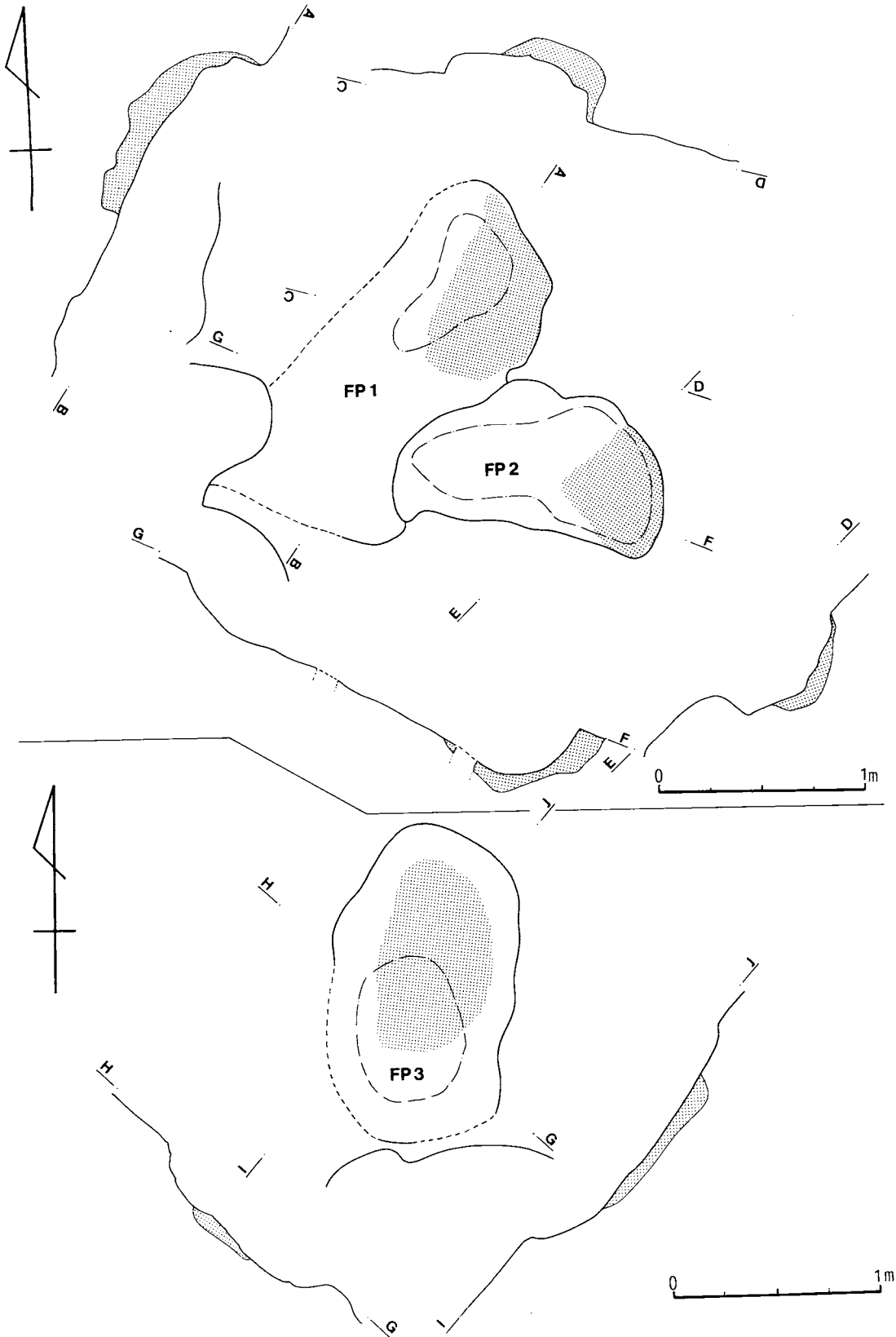




第 43 図 侯埜遺跡出土土器拓本図



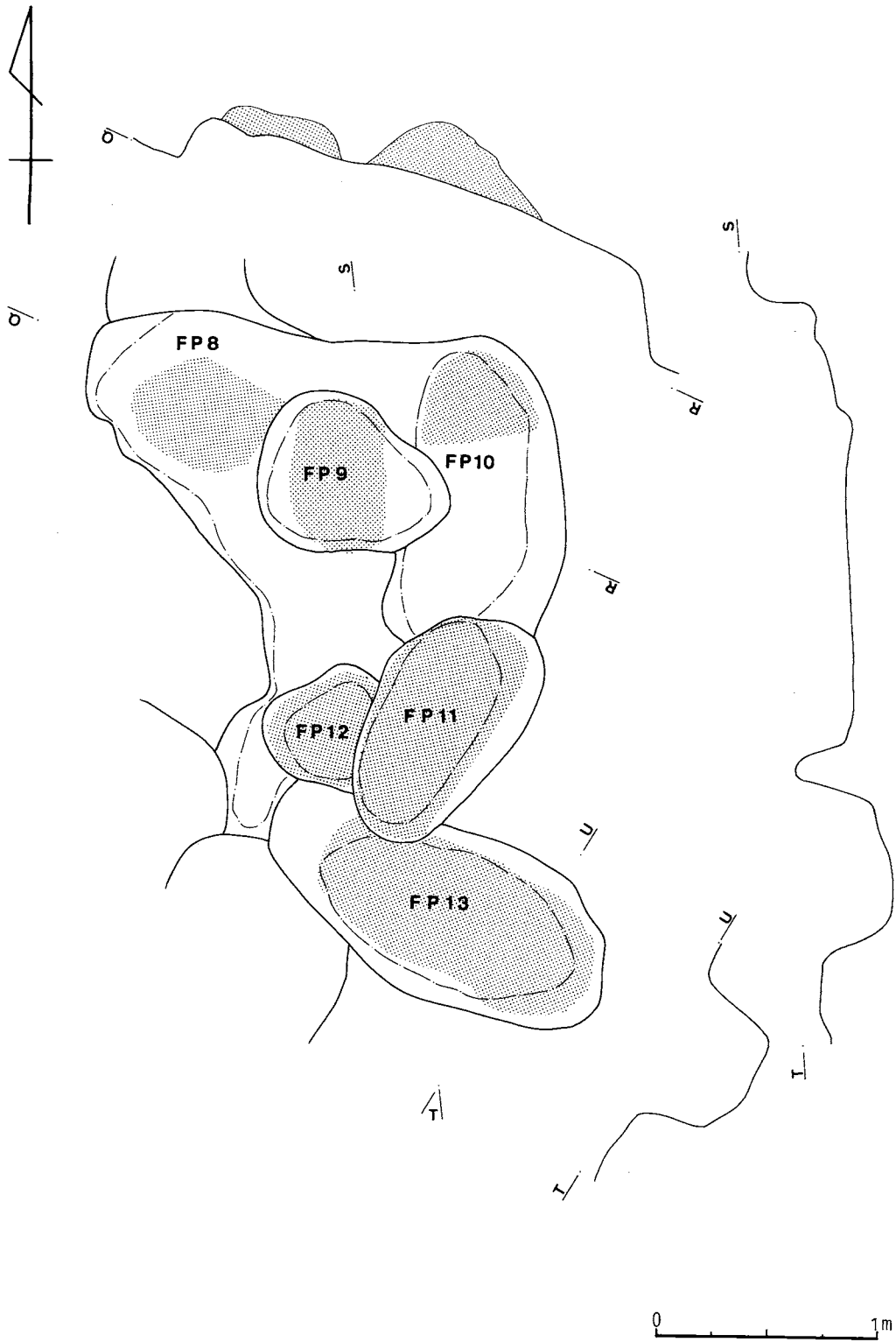
第 44 図 侯埜遺跡炉穴群新旧関係図



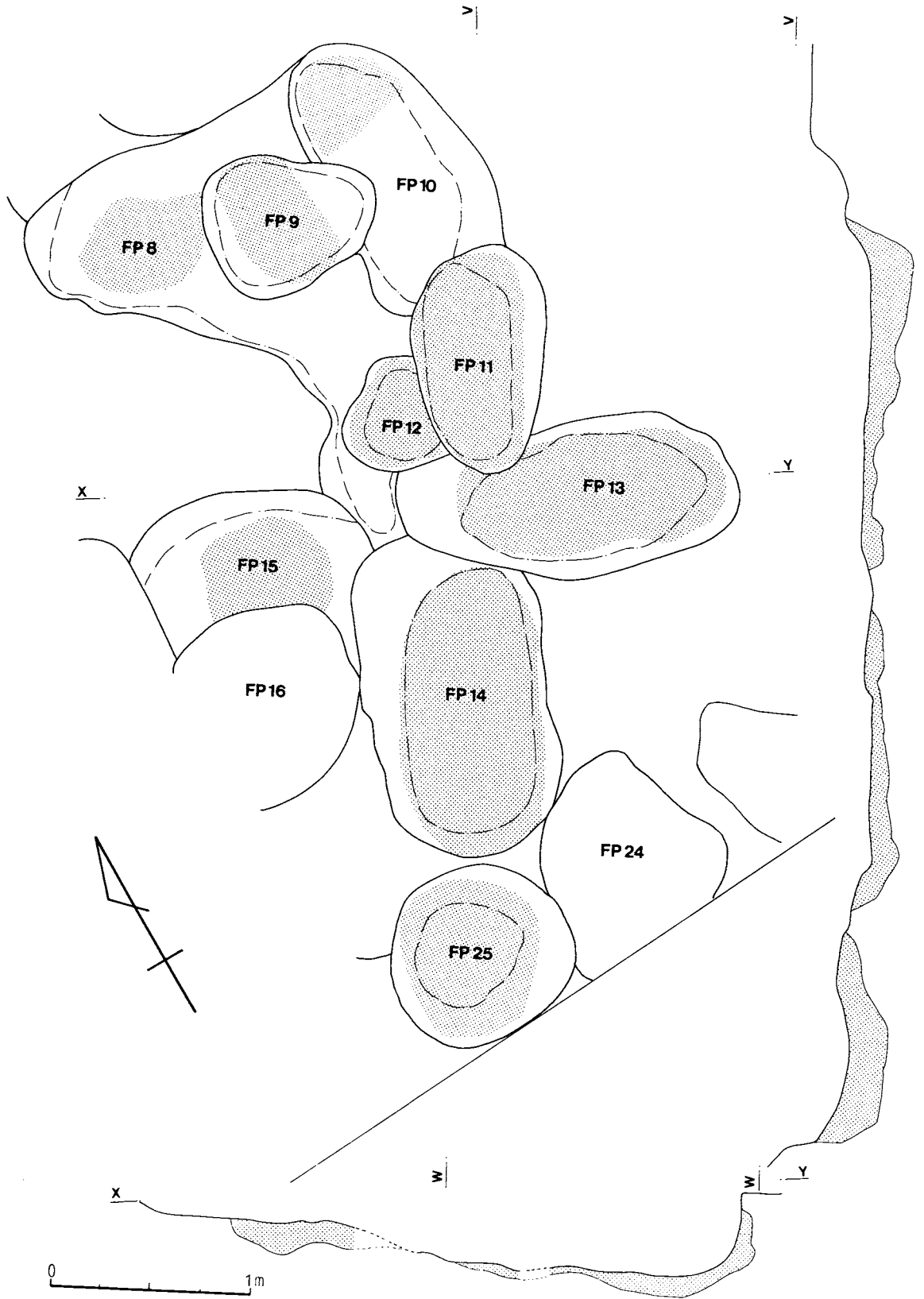
第45图 侯埜遗址1·2·3号炉穴实测图



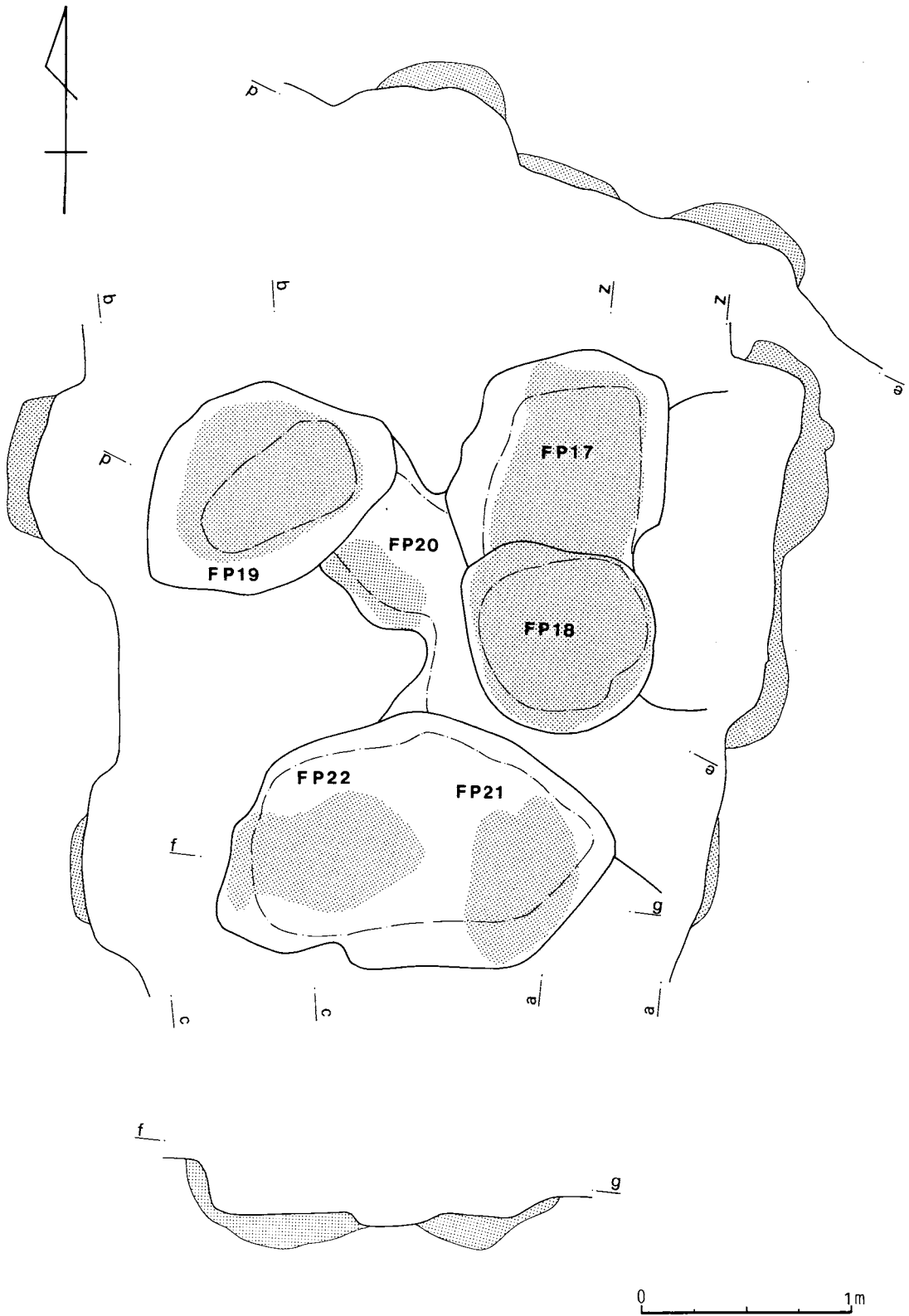
第 46 图 侯堃遗迹 4·5·6·7 号炉穴实测图



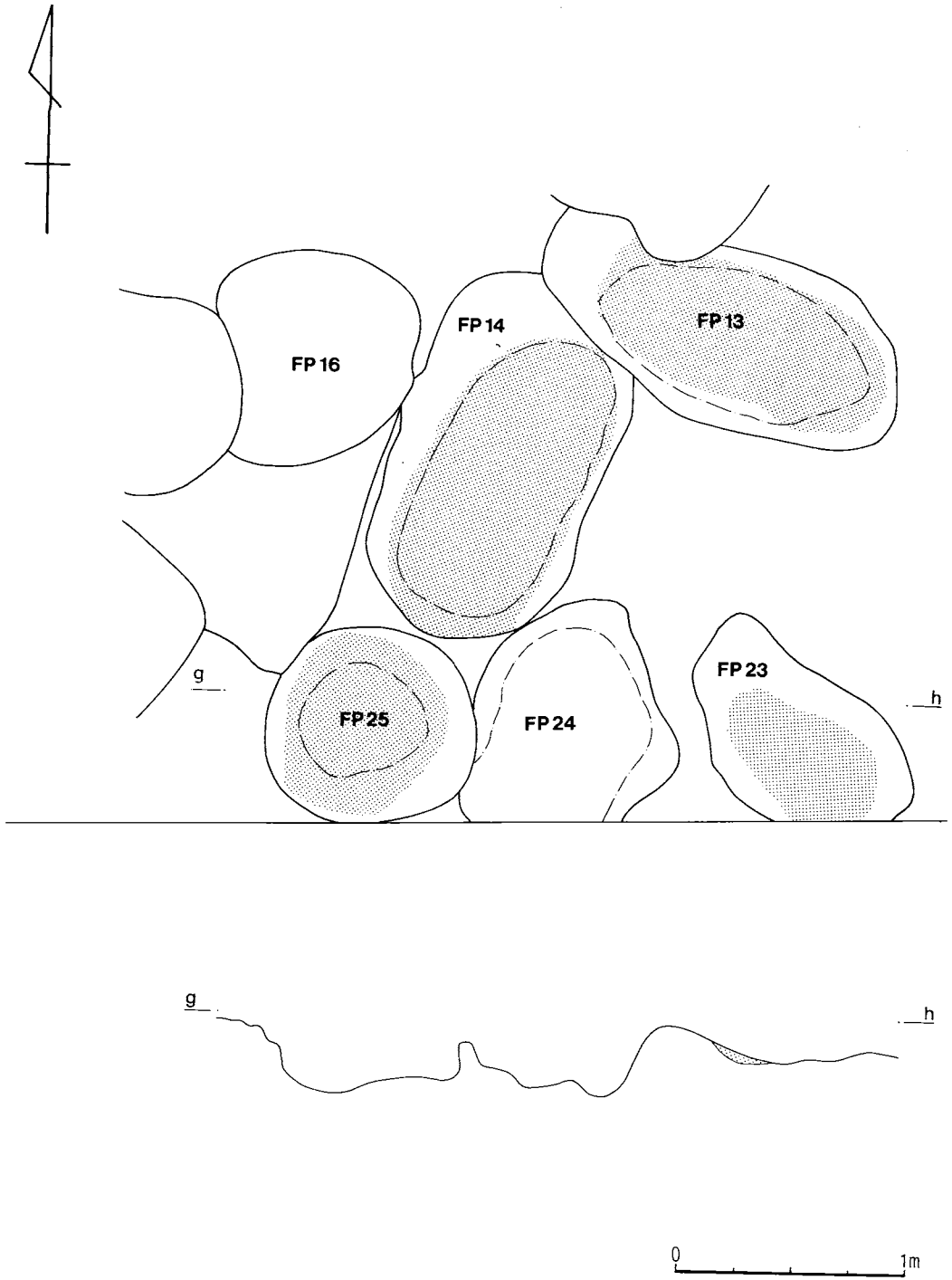
第 47 图 侯堃遗迹 8·9·10·11·12·13 号炉穴实测图



第48图 侯埜遺跡8・9・10・11・12・13・14・15・16号炉穴実測図



第 49 图 侯堃遗迹 17·18·19·20·21·22 号炉穴实测图



第 50 図 侯埜遺跡 13・14・16・23・24・25 号炉穴実測図

埼玉県入間郡三芳町

# 町内遺跡群発掘調査報告書

発 行 昭和 63 年 3 月 31 日

編集発行 三芳町教育委員会

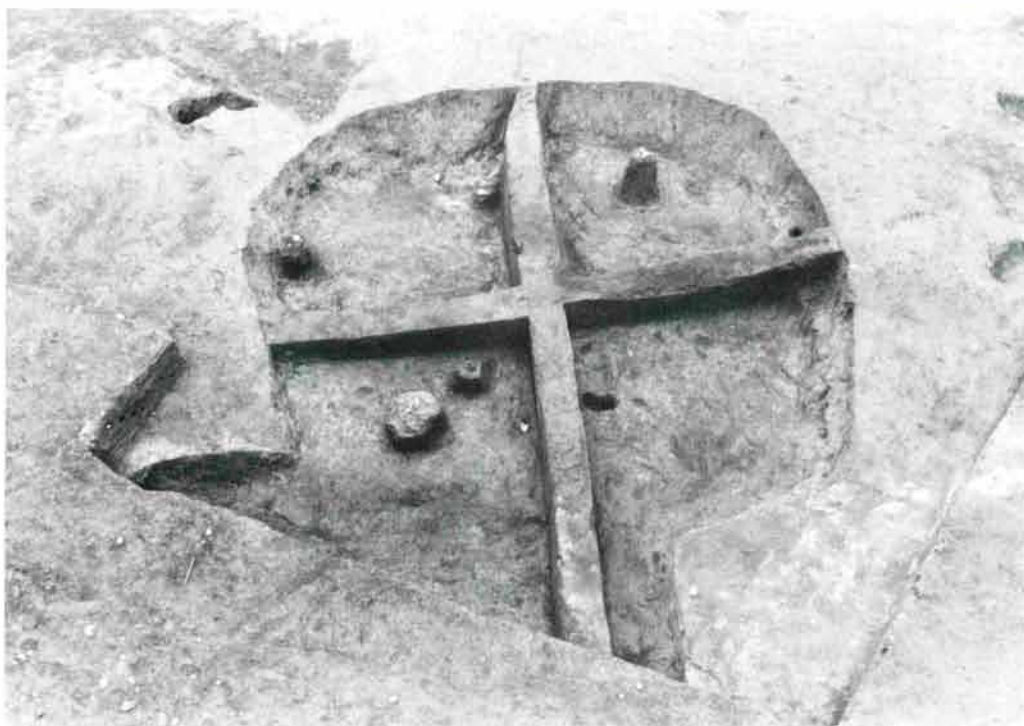
印 刷 新日本印刷株式会社



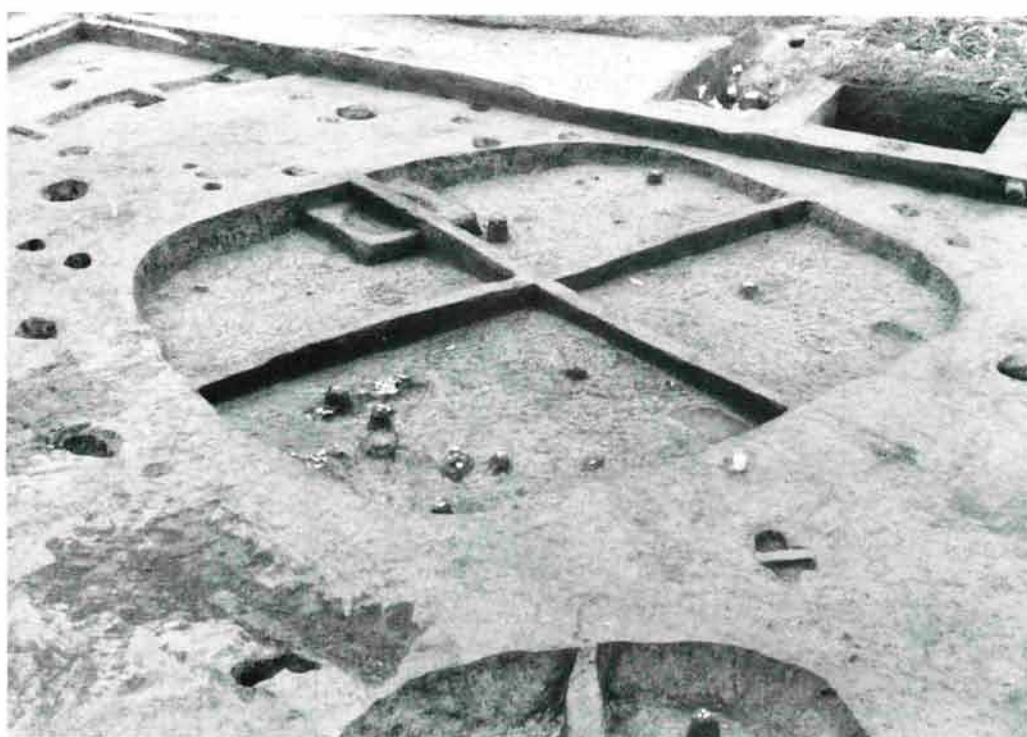
# 写真図版



藤久保東第二遺跡ユニット4 発掘風景



1号住居跡・2号住居跡

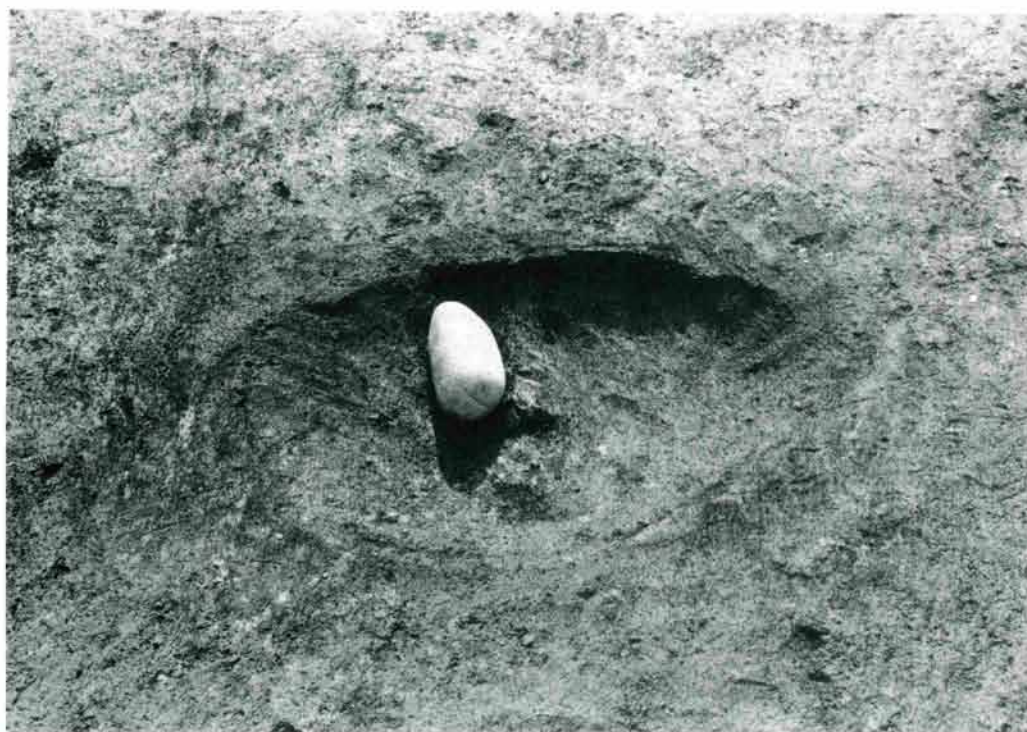


3号住居跡遺物出土状況





3号住居跡



3号住居跡炉



4号住居跡・1号土坑



5号住居跡





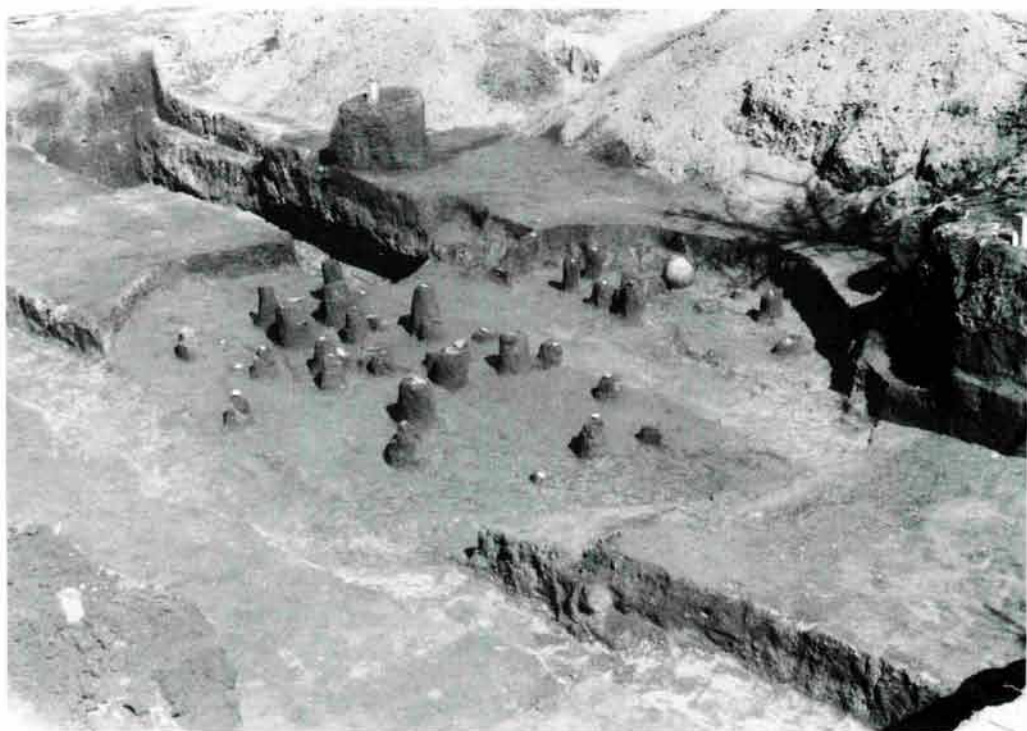
6号住居跡



7号住居跡



8号住居跡

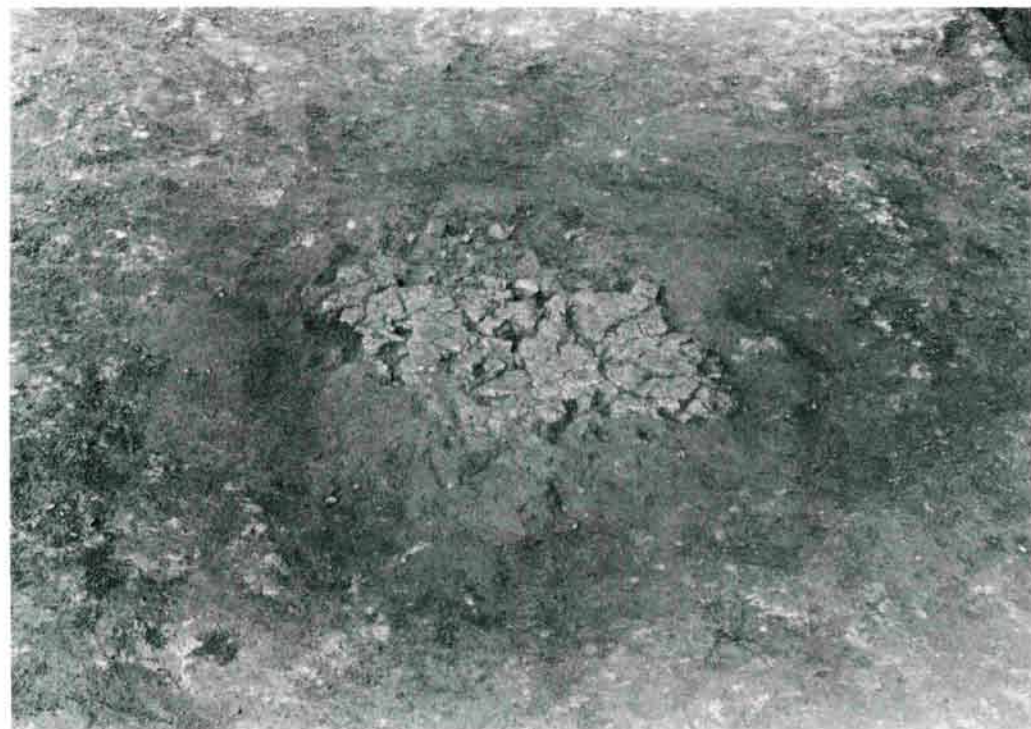


8号住居跡遺物出土状況





9号住居跡



9号住居跡炉（火皿）



10号住居跡



10号住居跡遺物出土状況





11号住居跡



1号方形周溝墓



1号方形周溝墓西溝



1号方形周溝墓底部穿孔壺形土器出土狀況





1号地下式坑



2号地下式坑



1



2



3



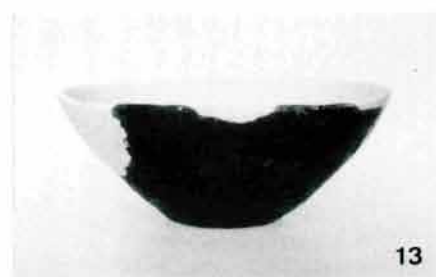
4



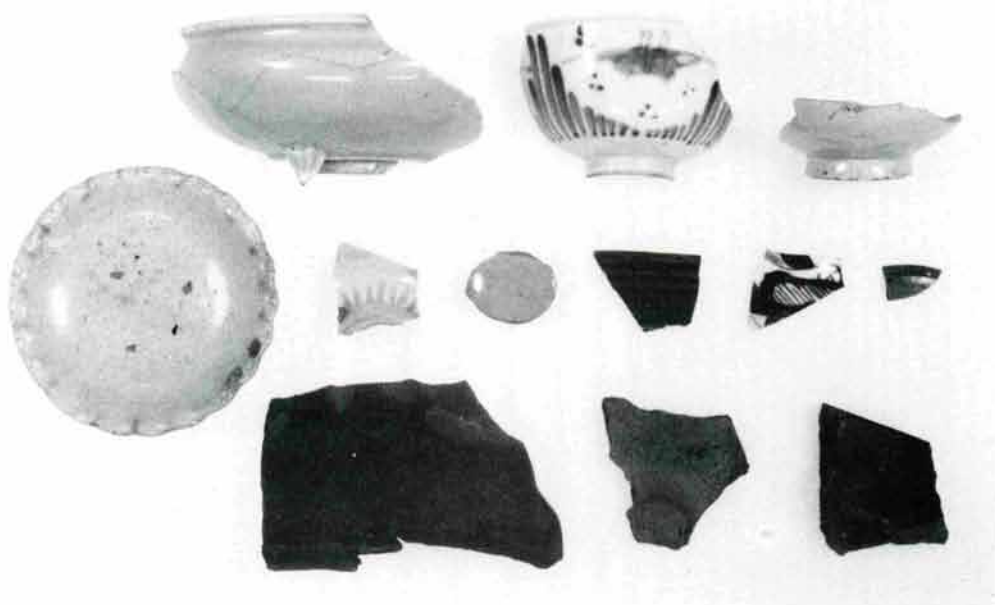
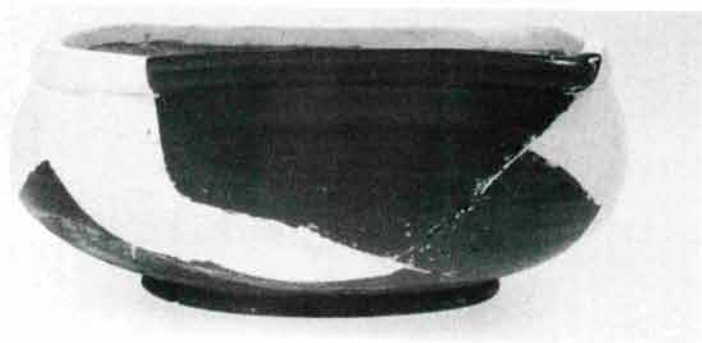
5



6



出土遺物 (2)

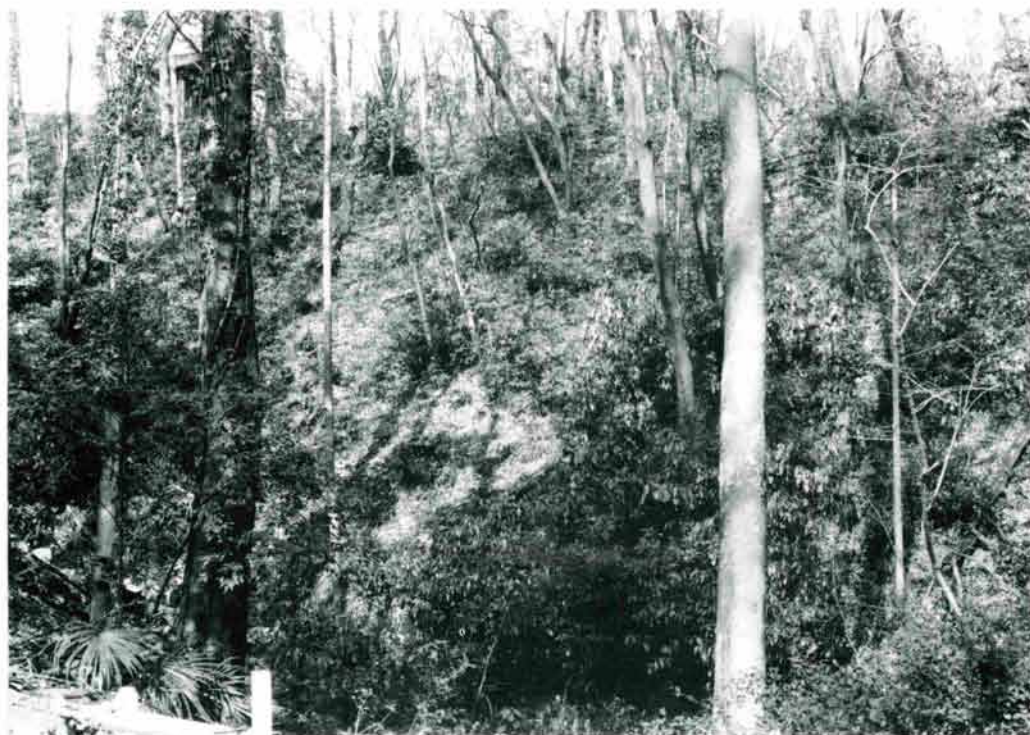


2号地下式坑出土遺物





調査地全景



調査地近景

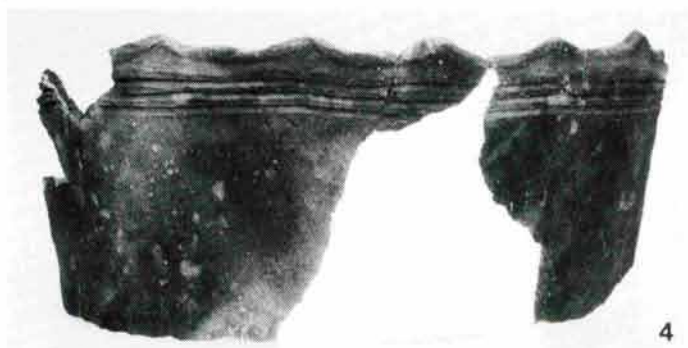
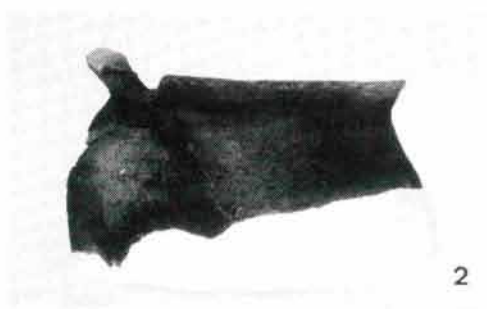


深鉢形土器出土状況



鉢形土器出土状況

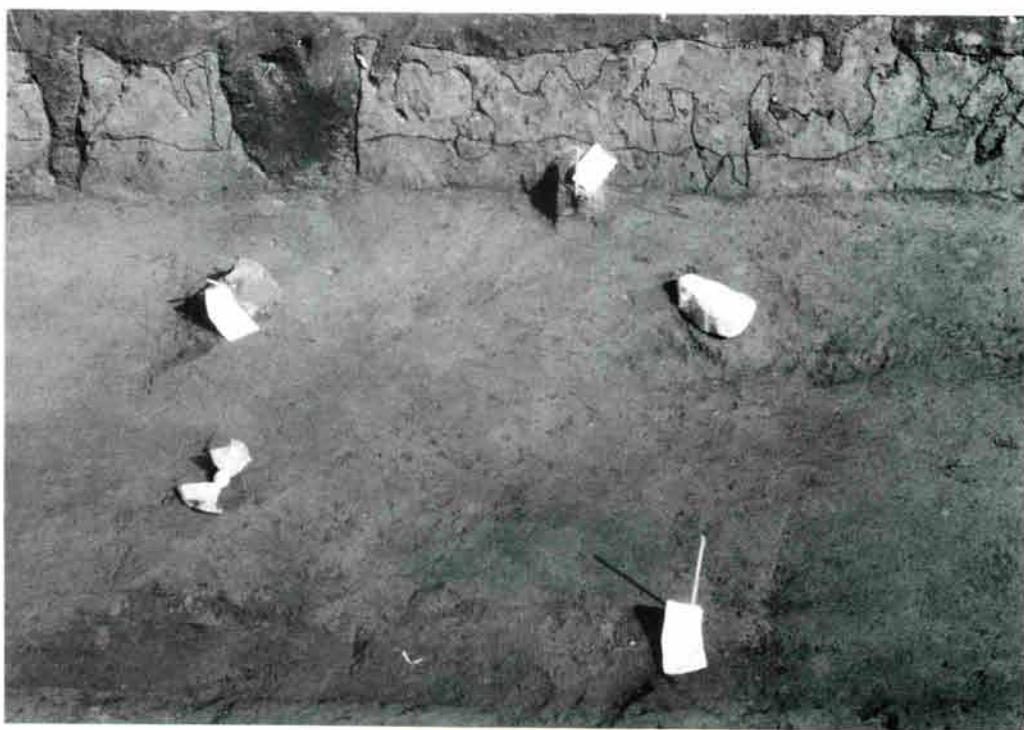




出土遺物

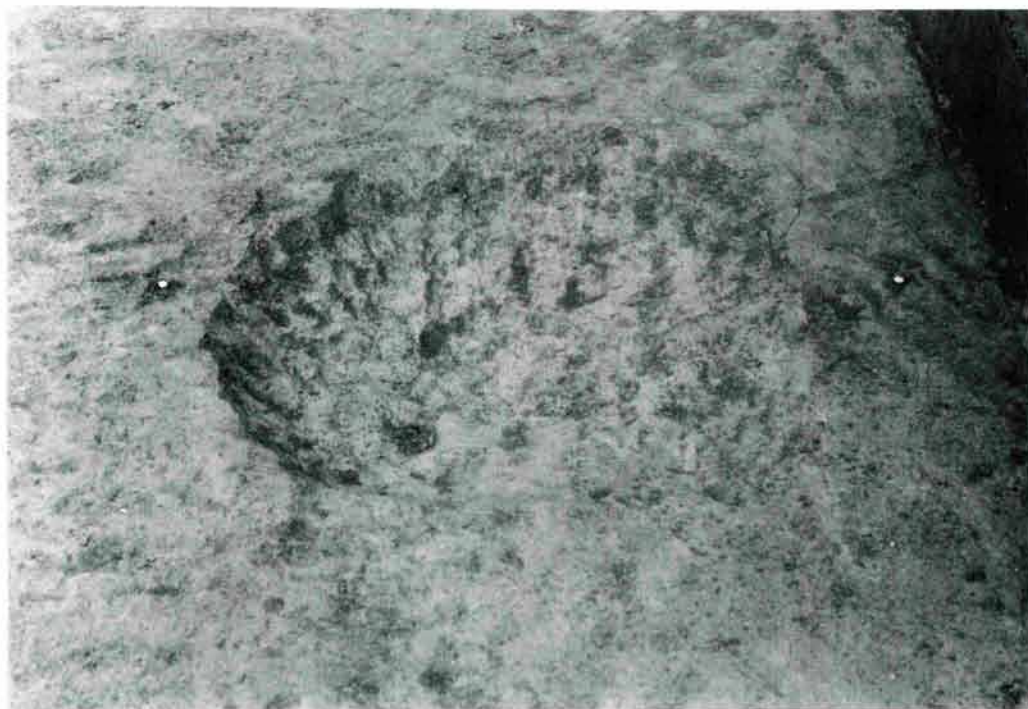


第1次調査（A地点）全景



ユニット1（台石を中心として）





土坑（ユニット 5 付近・X層上面確認）

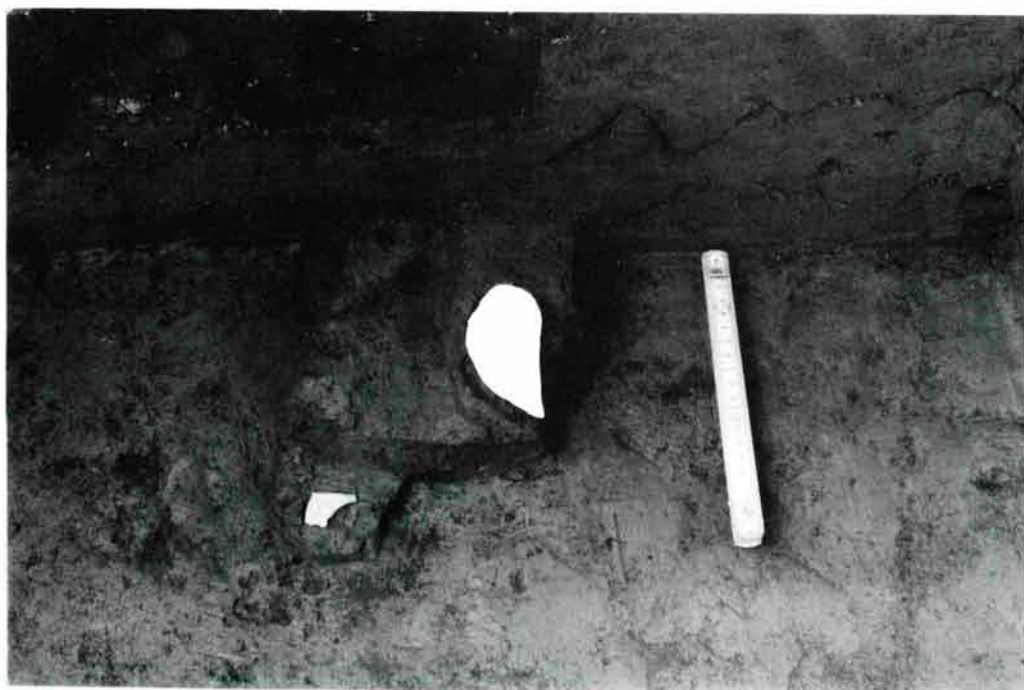


ローム層土層分層写真

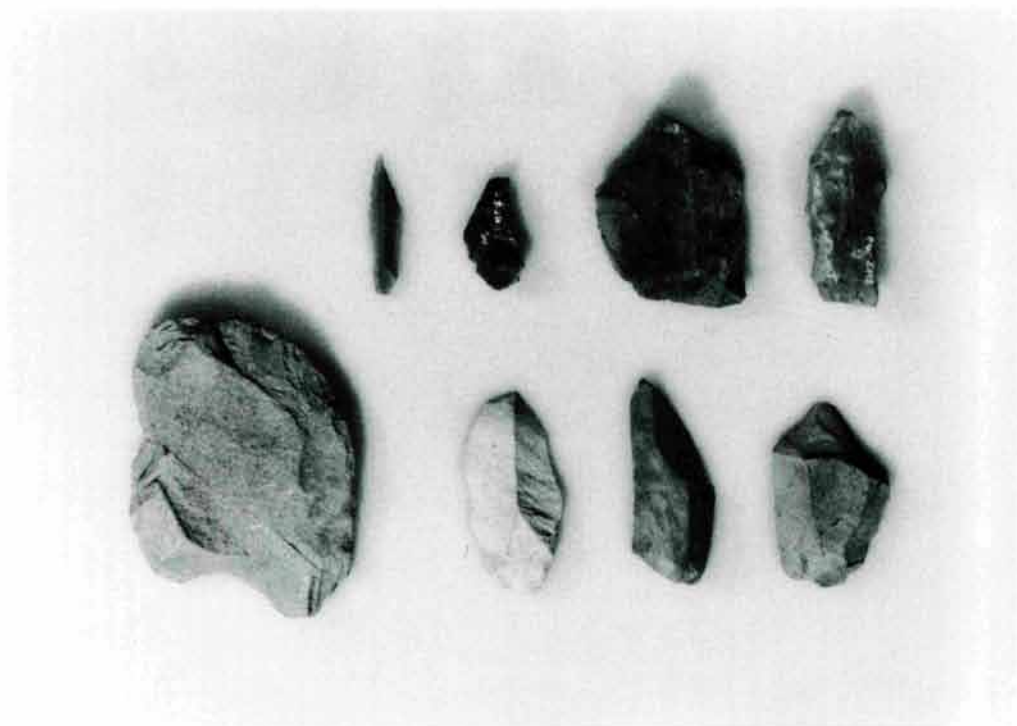
(10 a・10 b・10 c→Xa・Xb・Xc)



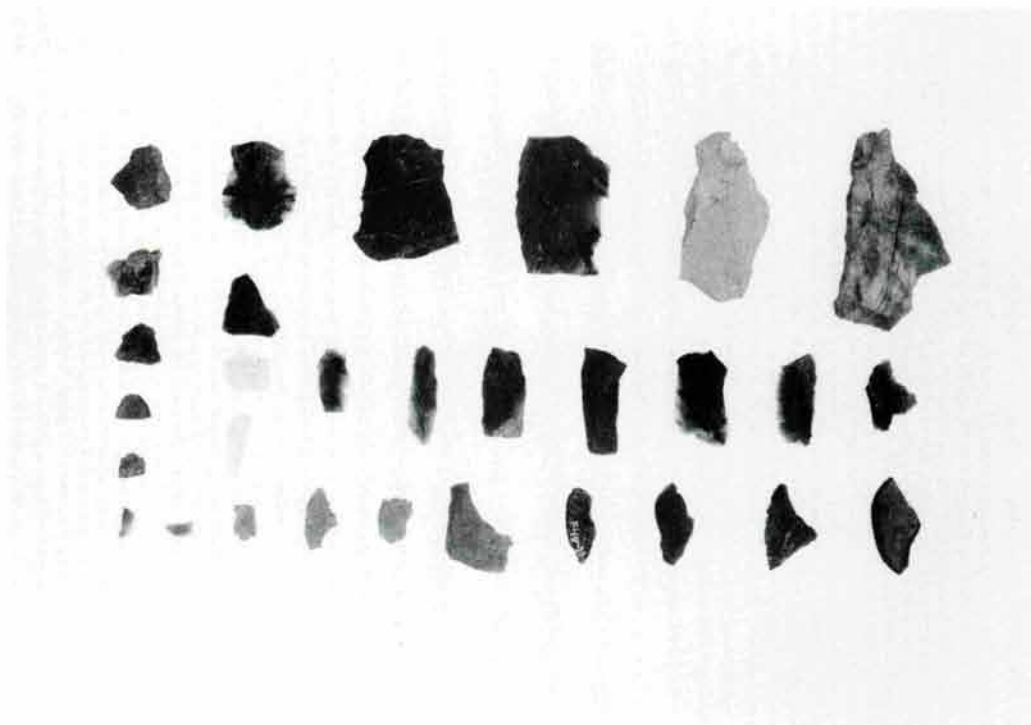
ユニット4 全景



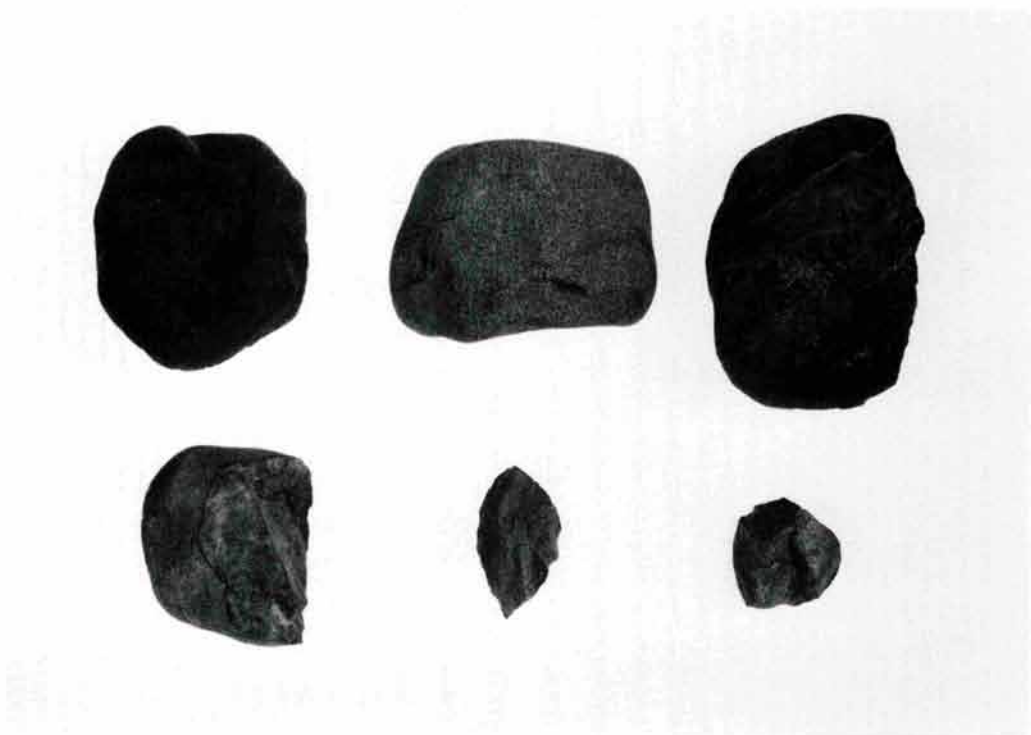
ユニット4 局部磨製石斧出土状況



ユニット 4 出土石器(1)

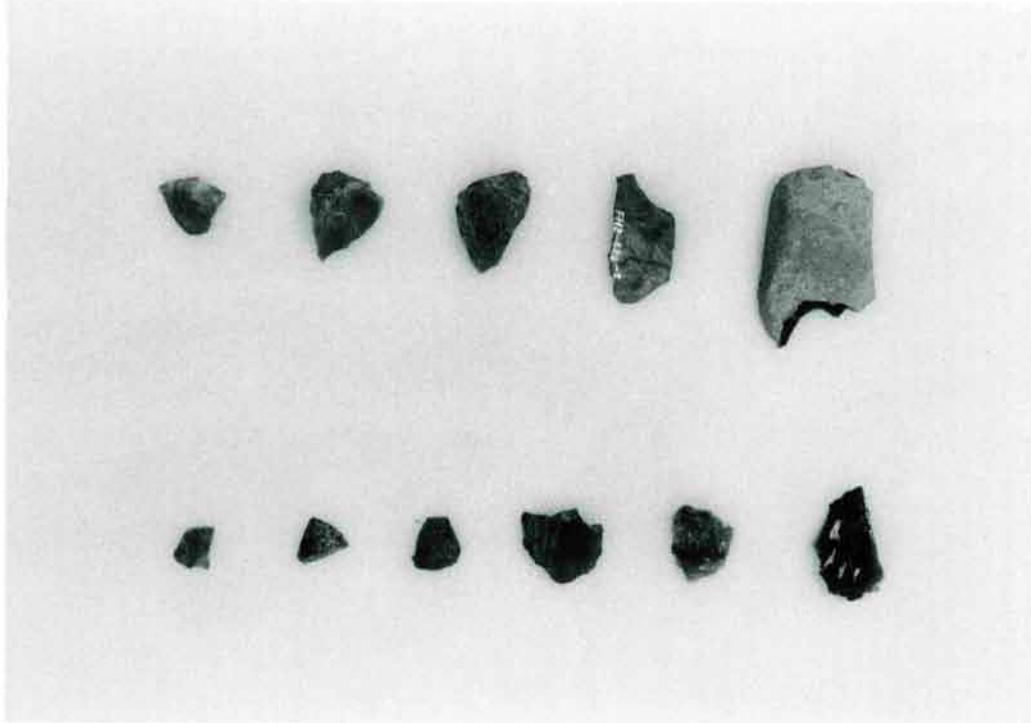


ユニット 4 出土石器(2)

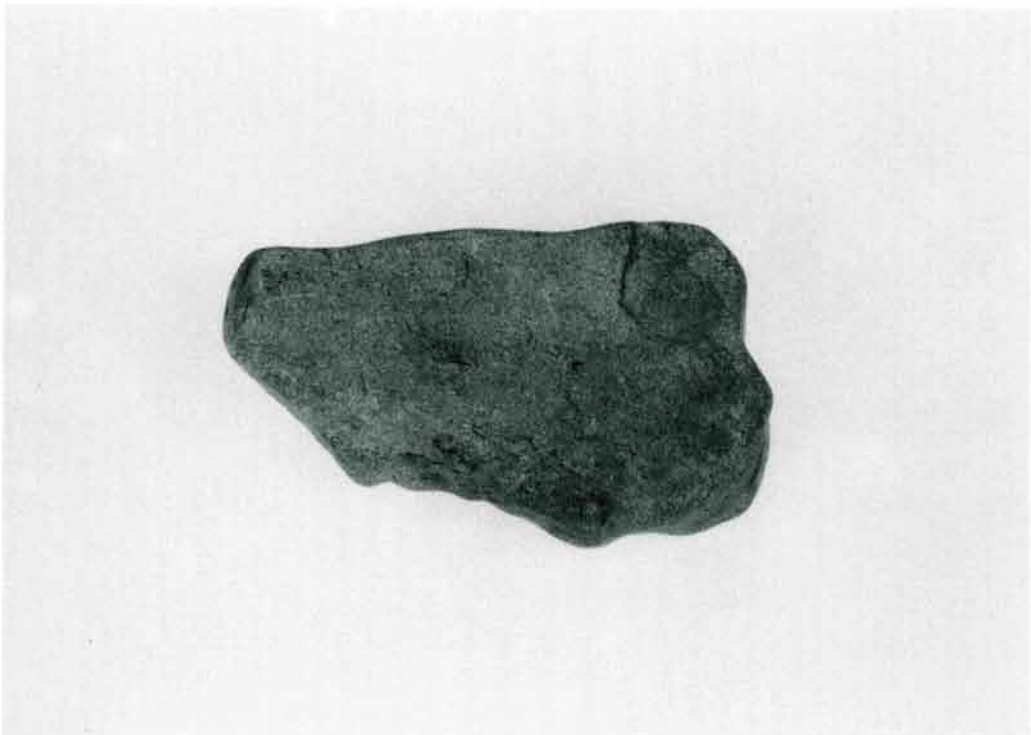


ユニット 4 出土石器(3)





ユニット1出土石器



ユニット1出土石器（台石）



ユニット 3 出土石器



ユニット 3 出土石器

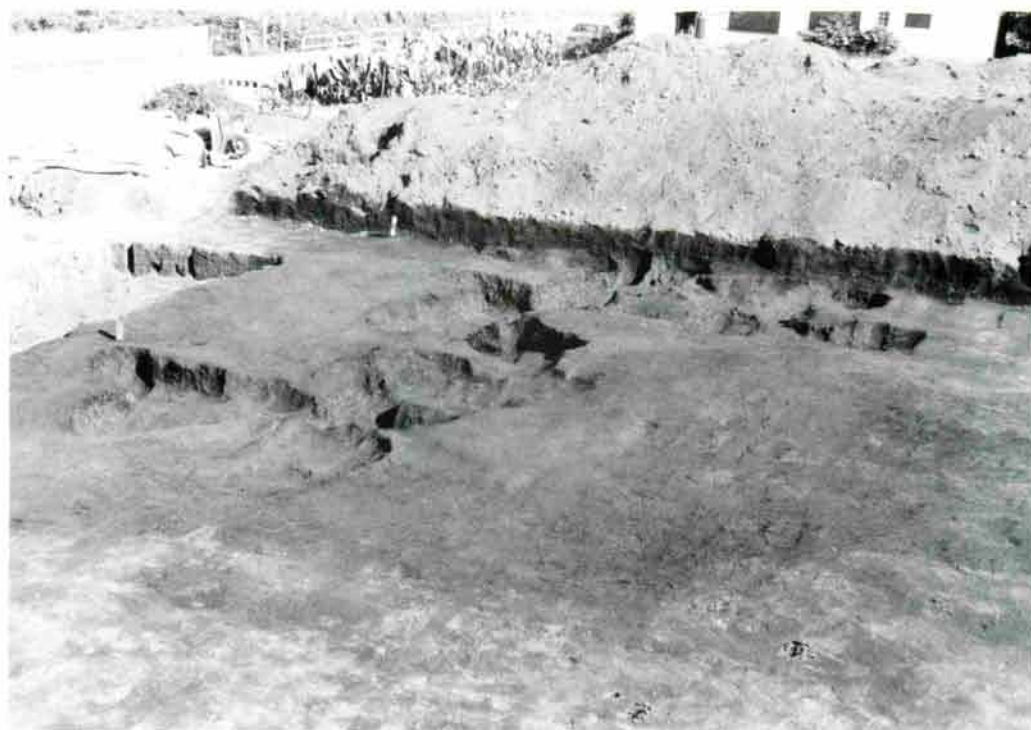




ユニット5 出土石器



ユニット2 出土石器（台石）



炉穴全景（北方より）



炉穴全景（南方より）